
狼の夜～忘れられた約束～

未華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼の夜〜忘れられた約束〜

【Nコード】

N2804N

【作者名】

未華

【あらすじ】

それは忘れられた約束だった。

幼い少女が交わしたその約束は、10年の時を経て動き出す。

大切な幼馴染と義兄と過ごしてきた穏やかで温かな毎日。
平穏な日常は、少しずつ崩れていく。

『思い出せ・・・思い出すな』

相反する言葉を投げかけるブルーアイの青年。

日常は非日常へと変貌する。

少女を守る二人の男。

変わらないと思っていたものは、少しずつ色を変えていく。

これは、遠い昔の約束の始まりと終わりの物語。

プロローグ（前書き）

現代ファンタジーです。

主人公逆ハー気味？

ぬるめに残酷シーンも含みますのでご注意ください。

プロローグ

少女はフト目を覚ました。

いつもだったら、決して真夜中に起きるなどということはないはずのに。

月明かりさえもない闇と静寂。

見慣れたはずの小さな自分の部屋。

しかし不意に、少女は不安になる。

毎日、一人で眠っているはずなのに、何だか世界中から取り残されたような、そんな孤独感があった。

少女はベッドを抜け出す。

「パパ、ママ」

眠たい目を擦りながら、部屋のドアを開け、暗闇の奥に向かって少女はそっと両親に呼びかける。

さほど大きくない家。

夜の静けさの中で、少女の声は予想以上に響く。

だが返事はない。その事実には少女は途方に暮れる。

すっかり目が冴えてしまった今、ベッドに戻って寝なおすなどという考えはすでになかった。

かといって、暗闇の中を一人で両親の元に行く事は、六歳になっただけの少女には、勇気がいることだった。

「パパ、ママ」

もう少し声を大きくして、もう一度呼びかけてみるが、やはり返事はない。

少女は決断した。

部屋を出てキツと前を見据える。

「幽霊さん。出ないでね」

震える声でそう呟いてから、両親の寝室へと向かう。

知り合いから安く買い取ったというその家は、ひどく痛んでいて、少女の軽い体重ですら、歩きたびにギシギシと不気味な音を立てる。

少女はその音に泣き出したくなるのを必死に堪え、服の裾を握り締める。

口元はぎゅっと引き締め、視線はなるべく前だけに向ける。

目がやっと闇夜に馴れた頃に一つのドアが目についた。

少女は途端に詰めていた息を吐き出す。

両親の寝室だった。

そこにパパもママもいる。

そう思ったと同時に、もう恐怖も消え去っていた。

安堵感から自然と笑みが零れる。

ここまでたどり着くのになんかに怖かったのか、二人に話したらきつと笑われるだろう。

けれどそれでもいい。

早く会いたい。

寝る前に話しをしたはずなのに、いつも以上に恋しさが募って、

少女は急いでドアに駆けより扉を開いた。

ギイイツ。

建てつけの悪い扉が低い音を立てる。

中を覗き込む。

だが、そこもやはり暗闇だった。

少女は部屋に足を踏み入れる。

しかし次の瞬間、その場がどこかいつもと違うということに気が付く。

「パパ、ママ？」

一歩足を踏み出し、ソレに躓きそうになって、少女は慌て後ず去る。

そして見た。

それが何であるのかを。

「……………」

が、少女には分からなかった。目の前にあるソレが何なのか。自分が何を見ているのか。そんなはずはない。

「パパ……………ママ……………？」

呼べば、ママは眠そうに

「どうしたの？」

と言い、パパは

「こっちにおいで」

とすぐに手招きをしてくれるはずなのだ。

こんなはずはない。

床の上にある二つのもの。

暗闇の中でも分かる、床に壁にベッタリと張り付いているドロドロとした液体。

開け放たれた窓から、所在無く吹き込む風が、カーテンを大きく揺らし、少女の間をすり抜けた。

ソレが何であるのか、暗闇に目が馴れている少女に分からないはずはなかった。

優しい月明が差し込む。

だが、少女は泣かなかった。

声を発することさえもせず、動くこともしなかった。

少女は暗闇の中、大きな目を見開きただその場に立ち尽くしていた。

嵐の前の静けさ（1）

晴れ渡る空と温かな日差し。

雀の鳴く声が、安穏な平和な様子をよく表している。

とある高級住宅街。

所狭しと立ち並ぶのは、豪邸と呼ぶに相応しい家々。

欧米並みに広い庭とその豪華の門構え。

人々の日常とは少しばかりかけ離れた者たちの住む処。

その中の一つ、建物・庭共々純和風の造りで、綺麗に植えられた

草木と、庭に敷き詰められた小石。

庭の奥には、鯉が泳ぐ池。

堂々とかがけられた表札には『南条』の名が刻まれている。

日本を代表する名家の立ち並ぶ住宅街。

『南条』もその一つに属している。

だが、そんな名家の朝の風景は至って普通そのものだったりする。

トントントン。

「ふんふーん。ふふーん」

台所からはこぎみよい包丁の音と、食欲をそそるにおいが漂ってくる。

鼻歌交じりに、仕事をテキパキとこなしているのは、ショートカット

トの小柄な女性。

名前は日比春重。

見た目二十代でも通りそうな年恰好だが、すでに二十年以上南条家で女中をしているという女性である。

彼女は、ほとんど家にいない主の変わりに、通り一切をこなしている。

「もうそろそろ静輝坊ちゃんも戻って来る時間ですよ。楓お嬢ちゃん」

チラリと時計を見て、隣にいる少女に声をかける。

「うん。急がなきゃ。早くしないと綜ちゃんも来ちゃう」

そう言っつて、少女は火にかけたフライパンに、卵を慎重に落とす。今日の南条家のメニューの一つは目玉焼きだ。

たかが目玉焼きと侮るなかれ。

卵を完璧な半熟にするというのもまた難しいものなのだ。

少女は、真剣そのものの眼差しで、フライパンに落とした卵と睨めっこ状態に入る。

黒に茶がかかった髪は、肩にほんの少しかかる程度のセミロング。決して垢抜けた美人というわけでもないのだが、その容貌は愛嬌があり柔和でどこか人を惹きつける。

名前は南条楓。なんじょうかえで

楓を見ながら春重は徐に息を吐く。

「楓お嬢ちゃんも、本当に大きくなりましたわねえ」

と、後に続いたその言葉に楓は思わず春重の顔を見返す。

「どうしたの？ 唐突に……」

「いえ、今日で、ちょうど楓お嬢ちゃんが南条家に来て、十年になりますでしょ？」

「うん。そっか。そうだったよね」

楓は小さく微笑む。

あの日……初めてこの家に迎え入れられた日も、こんな温かな晴れた日だった。

「ここに来た時は本当に小さくて、あまりにも内気でいらっしやっただでしょ？ ちっとも、笑顔をみせてくだらないし、近づきだけで逃げてしまわれて……。それが今じゃあ、こんなにかわいらしい笑顔を向けて下さって、素直で優しく目玉焼きが焼けるまでに成長して下さい！ 春重は嬉しいです」

そう言っつて、春重は今にも泣き出しそうな程瞳を潤ませる。

「お、大げさだよ。春重さんてば」

「いいえ！ 春重は嬉しくて、涙が止まりません」

そう言いながら、エプロンで顔を覆う。

「春重さん……。ありがとう」

春重は楓にとって、母親であり父親でもある存在だ。

本気で親身に自分を思ってくれている春重の姿に、心がホッコリと温かくなる。

「ここに来てもう十年か。本当に早いね」

楓はしみじみと言う。

強盗に襲われ死んでしまった両親。

楓はたった六歳で、一人ぼっちになってしまった。

心細くて淋しくていつも泣いていた自分。

あの頃は、今のこの幸福な時間など想像もしなかった。

「私って幸せものだよね。こんなお屋敷に引き取られたってだけでもすごいのに、その上……」

「その上、お兄さんはとびつきりかつこよくて頼りになるしな」

その時、ヒョッコリとキッチンに顔を出した青年が、勝手に楓の言葉を続けた。

嵐の前の静けさ(2)

十月も半ばだというのに、額には汗が光っている。

それを拭っていないのは、ただ横着者なだけなのだが、いかにも「スポーツマン」といった趣があつて、その姿が妙に絵になっていたりする。

「おかえりなさい。静ちゃん」

そう言いながら、楓は青年へとタオルを差し出す。

「ありがとな。はあー、それにしても腹減った。やっぱり、食欲の秋だからかな」

端正な面持ちに、スラリと長身。

癖の無い黒髪は、そんじょそこらの婦女子よりよっぽど綺麗。

良家の子息らしいその容貌は、老若男女問わず好評で、朝の日課であるジョギングするその姿は、その閑静な住宅街ですっかり名物となっている。

品のある容貌に似合わず、性格はかなり大雑把で底抜けに明るい。

根っからの自由人だ。

南条静輝。楓の義兄にあたる。

「お前の場合、年中だろ。秋の所為にするなよ」

と、続いて顔を出したのは、嘉神綜一狼。

南条家の隣の住人。

適度に癖の付いた髪は、日の光にさらせば金色にも見える、明る

い茶色。

着込んでいる制服は胸元のボタンを外して着崩し、着用を義務付けられている紺色のネクタイも緩やかに締められている。

校則違反ギリギリの出で立ちで、一見とてもそうは見えないが、楓達を通う名門校として名高い、みのりかわがくえん稔川学園の生徒会長を務めていたりする。

意思の強そうな目と不敵さを感じさせる口元が印象的で、粗野な井出達をしているはずなのに、どこか気品すら漂う。整った顔立ちだが、静輝とは相反する雰囲気。

静揮が生粋の日本男児なら、総一郎は英国紳士といったところだろうか。

何事にもクールで、すべてを完璧にこなす。

頭脳明晰。スポーツ万能。

その上、喧嘩もめっぼう強く、ついでに地位も名誉もある。完璧人間。

冷静沈着な綜一狼と天真爛漫の静揮。

生まれた時から家が隣同士の悪友でもあり、色々な意味でライバル同士でもある。

(その上、こんな二人と幼馴染なんだもんなあ)

立ち並ぶ二人を見て、思わずため息が出そうになる。

非の打ち所無くかつこいいい。

学園でも人気を二分する二人。

他の女子生徒が見てもため息ものである。

嵐の前の静けさ(3)

「いきなり来て喧嘩売んなよなっ」

「別に。本当のことだろ」

「あんなー」

浸っていた楓は、二人の言い争いに我に返る。

「二人とも喧嘩しないで。すぐに、朝食にする……………あー！」

ハタツと思い出す。

今の今まで、目玉焼きをすっかり忘れ去っていたことに。

慌ててフライパンを覗くが遅かった。

すでに、目玉焼きは見るも無残な姿になってしまっていた。

「さすがに焼きすぎですね」

『失敗をして物事を覚えるもの』という教育理念を持つ春重は、目玉焼きの様子を知りつつも、口には出さなかった。

「まったくしょうがないな、楓は」

固まっている楓の隣から、それを覗き込み綜一狼は意地悪く笑う。

「はあー。やっちゃった」

楓はガックリと頭を垂れる。

今時の十六歳にしてはしっかりしているのだが、おかしなところが

抜けている。

これは綜一狼の弁であり、その他の人々も認めるところである。

「なあに、失敗は誰にでも有るさ」

すかさずフォローを入れたのは静揮だった。

よしよしと楓の頭を撫でる。

「ま、食えないことはないだろ。俺が引き受けてやる」

綜一狼はフライパンを持ち上げて、器用に炭になる一步手前の真っ黒な物体を皿に移す。

「うっん。これは自分で食べる」

幼馴染みの言葉に感謝しつつも、楓は大きく頭を振り、綜一狼から皿を取り上げた。

そもそも、南条家の朝食に綜一狼を誘ったのは楓なのだ。

両親が海外の仕事で家には不在のため、綜一狼は面倒臭がってなかなか食事をしない。

平気だ、という綜一狼を無理やり誘った手前、きちんとした物を出す責任がある。

「ちょっと待ってね。すぐにちゃんとしたの作るから」

有無を言わず、楓はくるりとガスコンロに向き直り、急いで卵を掴み取った。

「ホント、楓はいい子だな。感謝しろ、綜一狼」

その姿を見て、静揮はシミジミと親馬鹿ならぬ兄馬鹿な発言をする。

綜一狼は「はいはい」とゾンザイな返事を返す。

「今度は失敗しないからね」

楓はそう意気込んで言い、二つ目の目玉焼きに取り掛かる。

そんな楓の姿を、綜一狼と静揮が優しい目で見つめていることに、楓は気が付いていなかった。

(きつと楓お嬢ちゃんは、お二人の気持ちに気が付いていないのでしょうねえ)

またも、熱心にフライパンの上の目玉焼きと睨めっこしている一人の少女と、その姿を一心にみつめている二人の青年の姿を見ながら、春重は苦笑せずにはいられなかった。

それは突然に（1）

「ねえ！ UFOが飛んでるーっ！」

一人の少年の言葉に、その場にいた数名の子供達が空を見上げる。雲ひとつない青空の中、確かにそこにはぼっかりと一つ、白い物体が浮いている。

「ホントだー。すごい、すごい！」

ランドセルを背負った子供達はキャツキャツと騒ぎ出す。

「どうしたんだい？」

そこを通りかかった、通勤途中のスーツ姿の男が興味を覚えて声をかける。

「あのねー。あそこ、UFOが飛んでるのー！」

自慢気に、最初にそれを見つけた少年が空を指差す。

「UFO？ ああ」

少年の指す方に目をやり、男は合点がいった。

「違うよ。あれは、飛行船だよ」

「ひーせん？」

「そう。ちゃんとした、人が作った乗り物だよ」

「なーんだ」

男の言葉に、少年たちは口々に「つまんなーい」と言い口を尖らせながら、最初の騒がしさを保ったまま、走り去っていった。

後に残った男は暫く、空にぼつかりと浮かぶ真つ白な飛行船を見上げていた。

（それにしても本当に珍しいなあ。何かの宣伝か。ちょうど稔川学園の近くだな）

少しの疑問を感じつつ、しかし、会社へ出勤する途中であることを思い出し、男もまた子供達とは反対の方へと、早足で歩き出した。

「ここが稔川学園ね」

クスクスと女が笑う。

女の眼下にあるのは塀に囲まれ、いかにも伝統と格式がありそうな建物。

真上から見てもその風景は美しい。

庭の手入れは行き届き適度に配置された緑が綺麗で、正門から十字路に別れた道には大きな噴水があり、裸体の女神像が瓶の中から水を溢れ出させている。

建物は古びていたが、それも趣味のよい建築家のおかげか、アンティークな雰囲気さえ漂わせている。洋館のような洒落た煉瓦作りのそこは、正門に学園名が刻まれていなかったら、到底学園とは分りそうも無い。

選ばれた紳士淑女だけが入ることが許される、稔川学園は日本有数の名門校なのだ。

「ねえ。ここに帰ってきたのは十年振りでしょ？ 懐かしい？」

女は無邪気に隣りにいる人物へと尋ねる。

「別に」

「ふうん」

相手の素っ気無い答えに女はつまらなそうに鼻を鳴らす。

「時間だ」

手元の懐中時計に目を落とし男は呟く。

「もう行くの？ せっかく望郷に帰って来たんじゃない。もうちょっとゆっくりしてればいいのに」

女は不満げに言葉を吐く。

「そつしたいのならお前だけでしている」

男は素っ気無く言うと、パチンと音を立てて懐中時計の蓋を閉める。

そつしてから、ゆっくりと学園を一望出来るその場から踵を返す。

「.....」

男の態度に女はしょうがないというように首を振る。

そつしてから、女はもう一度窓の外の風景に目をやる。

女の顔からは笑みが消える。

「待っていて必ず……」

誰に言ってもなく女は言葉を零した。

それは突然に(2)

稔川学園の校門前は、通学のピークともなると、黒塗りの車の渋滞となる。

車の通学が認められているためだ。といっても、もちろん本人が運転するのではなく、れっきとした運転手がいるのだが。

生徒の約半数が車での通学。渋滞となるのも頷ける。

今日も高そうな外車が列をなしている。

「たくつ。通学くらい、自分の足を使えっていうんだ」

それを見てぼやいたのは静揮だった。

稔川学園には、自分たちを上層階級の人間と自負し、傲慢な態度を取る生徒が多い。

この車での通学もその一つだ。

どれだけ豪華な自家用車で通学するか。

それが生徒たちの一種のステータスにも繋がっている。

そのことを静揮は毛嫌いしている。

「そんなの個人の自由だろ。ま、邪魔だということは認めるけどな」

隣りを歩く綜一狼も静揮の発言に賛同する。

「でも、ホントに毎日のことながらすごい光景だよな」

「あー、鬱陶しいつ。だから金持ちは嫌なんだ。金があればあるほど、性格が歪んでる奴が多い」

十分金持ちであるはずの静揮は、ハアとため息を付く。

「それは俺に対しての嫌味か？」

綜一狼はジロリと静揮を睨む。

綜一狼の家は世界にも顔が広く、日本の五本の指に入るほどの資産家だ。

「おお、恐つ。俺、ちょっと体育館に顔出ししてくるからさ。じゃあな、楓」
「あ、うん」

綜一狼からの威圧を感じて、静揮は慌てその場から退散してしまった。

「あいつの言葉は否定しないが、一括りにされるのは冗談じゃないぜ」

小さく舌打ちして、綜一狼は頗る不機嫌な顔になる。

「大丈夫。本当は静ちゃんだって、綜ちゃんをそんな風に思っただいよ。静ちゃんにとっても、私にとっても綜ちゃんは自慢の幼馴染だもの」

楓は慌ててフォローを入れる。

「自慢の幼馴染か。どうせなら俺は……」

その言葉に、綜一狼はチラリと楓を一瞥する。

「ん？」

そんな綜一狼の次の言葉を、楓は不思議そうな顔で待つ。

「いや。何でもない」

「なにそれ？ 変な綜ちゃん」

楓は怪訝そうな顔で綜一狼を見上げる。すると苦笑している綜一狼と目が合う。

（何なんだろう？）

どうやら呆れられている。そのことだけは分かった。が、それがどうしてたなのか、そこまでは分からない。自分は何か変なことを口走っただろうか？

思い返しても答えは出ない。

「そんな考え込むなって」

隣でおかしそうに笑っている綜一狼の姿を見ながら、楓は思わず声を出して唸ってしまうのだった。

それは突然に(3)

学園は外から見ても大きいのが、中はもっと広くその上複雑になっている。

クラスの数は普通の高校のザツと三倍。

特別教室もそれに合わせてそれなりの数があり、上は十階まであり地下室もある。

ただし地下室は立ち入り禁止となっており、その広さを把握しているものは少ないという。

校舎は大きく三つに別けられており、教室は東棟と西棟とあり、東西の棟の真ん中が両棟共通の特別教室となっている。

楓と綜一狼は共に東棟の教室だ。

「そういえば、楓のクラスに転校生が来るらしいぞ」

東棟の校舎へと入り階段に差し掛かったとき、何気なしに綜一狼が口を開いた。

「転校生？」

「ああ。なんでも、稔川学園のイタリアにある姉妹校から、急ぎよ女子生徒が一名やってくるんだそうだ」

「そうなんだあ。女の子か」

「ああ。ま、女子なら安全でいいんだが」

一人心地で綜一狼は呟く。

これが男子生徒であるならば、楓にちょっかいを出すかもしれないという心配が出てくる。

そのために、それ相応の対応も考えたのだが、女子ならばとりあ

えず安全である。

と、というのが綜一狼の考えだ。

本人はまったく気が付いていないが、楓は案外モテる。

面倒見がよく素直なその性格が、非常に男子生徒に受けがいいのである。

だが、楓に近づく男は有無を言わず、綜一狼が排除しているし、当の本人は人一倍鈍い。

そのため楓自身、自分がモテるなど露ほども思っていない。

「安全？ 男の人だと危険なの？」

などと、間の抜けたことを言っている。

「ああ。危険だ」

楓のボケた発言に、綜一狼は大真面目な顔で答える。

「うーん。そうなのか」

まあ、確かに外国は物騒だとよく言うし、多少は危険なのかも知れない……などというので、楓は納得していたりする。

これが冗談ではなく真面目だというのだから、ある意味尊敬ものである。

「おはよう」

階段を上りきったところに、見慣れた男が立っていた。

白いシャツに柄物の紺ネクタイ。背はさほど高くなく楓より四、五センチ高いくらいのもので、綜一狼よりも十センチ以上は低い。

今時古臭い丸めがねと、口元の髭の濃い剃り残しが、その男をひどくやぼったく見せている。

ガチガチに固めた髪のももまた、三十そこそこの歳のはずであるその男の年齢を、十歳は老けて見せていた。

「おはようございます、早山先生^{はやま}」

綜一狼は軽く会釈をし、即座に挨拶を返す。楓もその後続く。早山は数学の教師で、生徒会の補佐的役割をこなしている教師である。

生徒会長である綜一狼はもちろん、楓もそれなりに面識があり気心の知れた教師だ。

「どうしたんですか？ 珍しいですね、こんなところでお会いするなんて」

楓は不思議そうに早山を見る。

と言うのも、早山は東棟とは反対の西棟のクラスを受け持っているからだ。職員室も二手に別れているため、東西に別れた教師が、反対の棟に足を運ぶことは滅多にない。

「一緒に登校かい？ 君たちは本当に仲がいいんだね」

楓の問いに答えることなく、早山は呟くように言う。

しかし、その声はどことなく間の抜けたようであり、二人を見ているはずの目もどこか虚ろだった。声を出し言葉を吐いたものの、それはまるで機械が言葉を暗唱するような無機質な響きがある。何かがおかしい。

楓は早山の顔を見上げる。その顔は笑ってはいたが、まるで能面

であるかのように、薄っぺらで感情が出ていなかった。

楓はゾツと、背筋が寒くなるのを感じた。

いつも見知っているはずの目の前の人物が、得たいのしれない、何か別のものに变化してしまった。そんな感覚だ。

「あの、家が隣同士ですから」

しかし楓はそれを振り払おうと、努めて明るい声でそう答える。

「そうか」

早山の虚ろな目が一瞬光りを見出したかのように輝いた気がした。しかしそれは正気なものではなく、明らかな狂気の輝きだった。

「楓、危ないっ!」

楓がそれを認識した瞬間に、綜一狼の鋭い声が楓の耳に飛び込んできた。

それは突然に(4)

「えっ？」

早山と綜一狼が動くのは同時だった。

早山は素早く、持っていた鞆から小型の刃物を取り出し、楓たち目掛けて振りかざしたのだ。

その瞬間、綜一狼は機敏に反応し、楓をその場から押しやる。

唐突に力を加えられ、楓はバランスを崩し、数メートル先に飛ばされしりもちをつく。

廊下を歩いていた他の生徒達から悲鳴が漏れる。その声で、呆然としていた楓は我に返る。

「!?!」

言葉を失う。

そこには、血だらけのナイフを握り締めている早山と、右腕を抑えうずくまっている綜一狼の姿があった。

「くっ!!」

綜一狼が眉を顰め、小さくうめいたのが楓の耳に届く。

「あはっ。あははは……」

早山は血の付いたナイフを握り締め、顔面蒼白で干からびた笑いを漏らした。

尋常でないことは、誰の目にも明らかなことだった。

その光景に、楓は言葉を発することすら出来ない。

知らず知らずのうちに、握り締めた両手が小刻みに震え出す。胸の鼓動が早鐘する。

「綜ちゃ……………」

「楓！ 来るなよ」

震える声でやっと紡いだ幼馴染みの名前。

だが、同時に上がった綜一狼の鋭い声にかき消される。

「消える。お前など死んでしまえっ！」

早山は奇声を発し綜一狼に襲い掛かる。

(どうして早山先生が綜ちゃんを?)

ギラギラと血走った目で、早山は綜一狼ただ一人に刃を向ける。

横にいる楓にも、遠巻きにそれを見守っている他の生徒たちにも、

一瞥さえもしない。

早山と幾度となく言葉を交わしている。

いつもニコニコと穏やかな笑みを絶やさない人。

それが、楓の知っている早山という教師だ。

今まで悪い噂の一つも聞いたこともない。

むしろ、一部の生徒に媚びる教師が多い中、どの生徒にも変わらぬ態度で接しているという早山は、評判が良い方だ。

決して、こんな騒ぎを起こすような人物ではない。

それに、例え何らかの理由で綜一狼に敵意を持ったとしても、これほどまでの憎悪を、いや殺意を抱くものだろうか？

今日の前で起こっている光景が、楓には信じられなかった。

怖くてしょうがないのだが、そこから目を逸らす事は出来ない。いつそのこと、このまま意識を失えたらとそんなことを思ったりした。

しかし、そんな楓の気持ちとは裏腹に、目の前で乱闘は未だ続いている。

早山はナイフを振り上げ綜一狼に襲い掛かっていくが、それをスレスレの位置で避けている。

綜一狼はそれなりの武術を心得ている。

その動きには無駄がない。

だが、何分狭い廊下での行動である。

すぐにまた襲い掛かってくる相手をただ避けるのには限度がある。楓の目にも、綜一狼の動きが危ういのがよく分かる。

斬り付けられた綜一狼の腕から、血が何滴か床に滴り落ちる。

勢いで壁に体を付いた後には、血がベッタリと張り付いている。

「や………」

無意識意に楓の口から言葉が漏れる。

目を瞑り、耳を塞いでしまいたいという衝動を、楓は寸でのごころで押さえ両手を強く握り締める。

昔、これと似た光景を見たことがある。正確にはその後の光景だが。

忘れていた。

いや、忘れようとしていた。それが今鮮明にプレイバックしてくる。

周りにこびり付いた血の色。

切り裂かれた人の肌。

足元に転がる、「人だった物」

もう二度と決して笑うことはない、冷たく固くなった物言わぬ大切な人たち。

それは、暗闇で不意に浮かんだ月明かりで、はっきりと見えた。

「死ねえーっ！」

「やめてっ！」

早山の奇声と共に楓は動いた。

「楓っ！」

それに気がついた綜一狼が、叫ぶように名を呼んだのが楓の耳にも届いた。

だが、そのまま綜一狼に襲い掛かろうとする早山の腕にしがみ付く。

「くっ！ 離せ！」

早山は楓を引き離そうと暴れ出す。

握られたナイフが無意味に空を切りつける。

楓は必死に歯を食いしばりながら、早山の腕に食い下がる。

「もういい！ 楓、離れろ！！」

「きゃあっ！」

綜一狼が声を発してすぐ、楓の体がふわりと宙に浮いた。

相手は一見軟弱そうであっても、れっきとした成人男性なのだ。

ほんの数秒争っただけで楓は早山に振り落とされる。

ザッ。

その拍子に、ナイフが楓の手の甲を切り裂く。
手に熱さが走ったと同時に、楓は地面に落下する。
だが、それだけでは終わらなかった。

目の前に翳りを感じて見上げてみると、そこには目を血走らせて
いる早山の姿があった。

早山の放つ威圧感に、楓は床に手を付いたままの状態で凍りつく。

「お前も殺してやる」

今まで聞いたこともないような地を這うような早山の低い声に、

楓の恐怖が再び蘇える。

冷水を浴びたように体から血の気が引く。

迫る死の影に成すすべもなく、楓はただ目を見開き早山を見つめ
る。

自分に向けられたナイフが、静かに迫ってくるのを見た。

それは突然に(5)

(殺される)

そう思った。

「楓!」

綜一狼は瞬く間に、楓と早山の間に入り、ナイフを握り締めているその手を、おもいつき蹴り上げた。

ナイフは早山の手を離れ、宙で弧を描き乾いた音を立てて床に落ちる。

「貴様ごときが楓に触るな」

鋭い目で早山を睨み付ける綜一狼。

「ひっ」

そんな綜一狼の姿に、早山は半歩後ずさる。

目で人を殺せるならば、早山は死んでいただろう。

それほどまでに鬼気迫るものがあつた。

「あ、あ……」

恐怖からなのか、混乱からなのか、早山が声にならない声を漏らす。

なおも後ずさる早山の間合いに、綜一狼は一瞬のうちに飛び込んだ。

そして、そのままなんの躊躇もなく、渾身の力をこめてお腹を蹴り上げる。

「ぐわぁっ」

早山は数メートル先にすっ飛び、その場に倒れ込み気を失う。その場は一瞬の静けさが支配する。

「す、すごい」

誰かが呟いたその一言で、傍観者たちはようやく起こった出来事を理解する。

楓や綜一狼を取り囲むようにして、拍手や感嘆の音が、校舎外にも聞こえるくらいの勢いで響く。

「楓!」

そんな中、まだその場に座り込んだままの楓の元に、綜一狼が駆けつける。

「綜ちゃん」

そのままの態勢で、楓は魂が抜けたかのように抑揚のない声を発する。

やっと駆けつけてきた学園のガードマンが早山を連れて行く。

その横顔はやはり生気がなく、目はうつろなままだった。

「早山先生」

楓は、たまらず声をかける。

だが、早山は一瞥することもなく、先ほどの狂気が嘘のように、ヨロヨロと引きずられるように、その場を後にした。

「生徒会長、救急車を呼びましょうか？」

早山がいなくなったことを見て、生徒の一人が恐る恐る綜一狼に声をかける。

「いや、いい」

そう言うと、綜一狼はスッと楓に手を延ばす。

「ありが………へっ？ えっええっ。ちょ、綜ちゃん！」

その手をとった楓は、素っ頓狂な声を発する。

その手に掴まった途端、綜一狼は楓を一気に引き上げ、そしてそのまま抱き上げたのだ。

軽々と、自分の肩を楓の枕にして、右手で楓の肩をしっかりと掴み、左手で両足を抱え込む。

所謂お姫様抱っこというやつだ。

綜一狼のファンが見たら卒倒しそうな光景だ。

現に、その場に居合わせた女子生徒からは、令嬢らしからぬため息と悲鳴がただ漏れている。

「暴れるな。落っこちるぞ」

大慌てな楓と騒然とする観衆を尻目に、シラツとした様子で、綜一狼はスタスタと歩き出す。

「お、降ろしてー！」

パニック状態で、真っ赤な顔をして楓は上ずった声を発する。

「だめだ」

それに間髪を入れない早さで、綜一狼はきつぱりと言い放つ。

「だって！ 綜ちゃん、怪我してるんだよ？ そんなに血出てるし！ 私はちゃんと歩けるから」

「嘘つけ。腰抜かしてたくせに。俺の怪我は大したことない。もう血も止まった」

「そんなこと言ってたって、私だって、ちょっと手を切られただけじゃないっ」

手の甲はまだジンジンと痛んでいるが、綜一狼の肩の傷とは比べようがない。

「いいから黙ってる」

「綜ちゃん」

楓の抵抗も虚しく、目的地に着くまでの間、人々の注目を一身に集めていた綜一狼と楓だった。

それは突然に(6)

かくして目的地の保健室。

保健室はツンツと消毒液の臭いがする。

「あの、綜ちゃんの傷は大丈夫ですか？」

用意された丸椅子から身を乗り出し、恐る恐る目の前にいる女性に尋ねる。

楓の前には、肩に包帯を巻かれた綜一狼がいる。

血で汚れた制服を脱いだため上半身は裸。だが、その大半は痛々しく真っ白な包帯が巻かれている。

傷口には脱脂綿が当てられているにも関わらず、真っ白な包帯の下から、うつすらと赤い色が染み出している。

その光景は、見ているだけでも痛々しい。

「大丈夫。血は派手に出たみたいだけど、傷は浅いわよ。やっと血も止まったし、また下手なこととして傷口開かなきゃ平気よ」

呆気らかんとした口調で、この学園の保健医は答える。

「よかったあ」

楓は張り詰めていた息を吐く。

「俺より楓は？ 傷が残るなんてことないですよね？」

綜一狼は、ひどく真面目な顔で保険医に問う。

楓の手はすでに治療済み。

綜一狼が、楓の治療を先にするといつて、譲らなかつたためである。

「あなたよりは全然軽症よ。傷もそのうち綺麗に消えるから大丈夫」「よかつた」

綜一狼は安堵の息を吐く。

「それにしても、生徒会長が血だらけで女の子抱きかかえてくるんだもの。何かと思つたわよ」

長年この学園で勤務している彼女だが、今日の出来事は前代未聞だ。

「すみません」

綜一狼は照れくさそうに笑う。

「わ、笑い事じゃないつ。人の心配より自分の心配でしょ！ あんな無茶して……………」

楓は、声を張り上げて潤んだ瞳で綜一狼を睨む。

「あ、あんなことするから、そ、そんなにち……………血が止まらなくなつて……………」

やはりというか、案の定というか、楓を抱き上げて運んだことで、綜一狼の傷口はもの見事に開いてしまった。

「何も泣くことないだろ？ もう血は止まつたから」

楓はいつの間にか泣き出ししていた。

怒って………というよりは、今更ながら実感した深い安堵感が、楓の涙腺を完璧に壊したのだ。

泣き出した楓を見て、さすがの綜一狼も閉口する。

「すまない。ごめんな、楓。俺が悪かった。だから、もう泣くな
て」

ついに綜一狼は白旗を揚げる。

綜一狼はひたすら楓に頭を下げる。

楓はブンブンと首を振る。

別に怒っているわけじゃない。

そう言いたいのだが、止めようとしても、涙はなかなか止まってくれない。

楓はシャックリを上げつつ、小さな子供のように泣き続ける。

「ま、怖い目に合ったんだものね。泣くなって方が酷でしょ」

その光景を見て、ハンカチを手渡し、保険医は優しく言う。

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ。それにしても、あの早山先生がどうしてこんなことをね。到底そんな人には見えなかったけど」

保険医は小さく肩を竦める。

あの時、早山が綜一狼を襲ったのは偶然なんかじゃない。綜一狼を待ち構えていて、そして襲った。

それがなぜなのか？

綜一狼は理由を知っているのだろうか？

楓は、綜一狼をジッとみる。

「今はその話はよしましょう」

そんな楓から視線をそらし、綜一狼は静かに言葉を紡ぐ。

「あ、ああ。そうだね。あなたたちは、直接の被害者だものね。無神経だったわ。ごめんなさい」

「いいえ。早山先生に何があったのか……。俺にも、まったく分からなくて。正直、困惑していますよ」

綜一狼は深く息を吐く。

「早山先生、どうなっちゃうのかな？」

「楓が気に病むことじゃないさ。あとは、先生方が対処してくれるだろうから」

楓の呟きに、綜一狼は優しく答える。

「さて。これからどうしたものか、他の先生たちと相談してくるから、あんたたちはここでゆっくりしてなさいね」

そう言うと、保険医は二人を残し、保健室から出て行った。

それは突然に(7)

部屋には二人きり。

喧騒は遠く、静寂がその場に落ちる。

保健室はプライバシーを考慮して、窓にも白く厚いカーテンがかけられており、中の様子も外の様子も分からない。まるで違う世界のように、落ち着き払った空気が支配している。

(やっぱりまだ大騒ぎなんだろうな)

遠くのざわめきを微かに聞きながら、楓はぼんやりとそんなことを思う。

「楓……………」

「ん？」

楓の隣にあつた長いすに腰を掛けていた綜一狼は、楓が座っている丸いすを回して、自分の方に向き直らせる。

「は、はい？」

楓は不意を付かれ、驚いて声を発する。

「俺に無茶だとか言うけど、お前の方が無茶苦茶だったろうが。いきなりあんな相手の目の前に飛び出すなんて、下手をしたら死ぬところだったんだぞ」

さっきとは違い、少しばかり怒りを含んだ、説教口調で綜一狼は

言葉を紡ぐ。

「あの時は必死だったから……」

綜一狼の強い眼差しに、楓は口ごもる。

「お前が俺を助けようとしてくれるのは分かる。それはすごくうれしかった。でもな、もう二度とあんな無茶はするな」

ひどく真剣な面持ちで、綜一狼は楓を見つめる。

「でも、私だってすごく心配したんだから」

誰かが死ぬのを見るなんてもうごめんだ。

綜一狼の怪我を見たあの瞬間の恐怖。

失ウカモシレナイ。

そう思った瞬間に、体が考えるよりも先に動いていた。

ナイフなんかより、ただ綜一狼が殺されるかもしれないということの方が、よっぽど怖かった。

だから、自分の行動を反省はしても、後悔はしない。

もし、あの時に飛び出していなければ、綜一狼は今こうして笑ったり怒ったりしていなかったかもしれないのだ。

「もう無茶はしないよ。だから、綜ちゃんもあまり危険なことはないでね」

「……善処する」

うーんと唸ってから、楓の言葉に綜一狼はそう答える。

「善処？」

綜一狼の曖昧な答え方に思わず眉を顰める。

「誓います。もう無茶はしません」

そんな楓を見て、綜一狼は仰々しく片手を上げて、そう言い直す。

「うん。よろしい」

満足気に、楓はにっこりと微笑む。

「やっと笑ってくれたな。うん。楓は笑ってる方がいい」

楓の顔を覗きこみ、綜一狼は眩しそうに目を細める。

「私も、今の綜ちゃんの方が好き。さっきの綜ちゃん、本当に恐かったから」

早山に向けたあの温か味の欠片も無い人を見下した冷たい瞳。

あんな綜一狼は始めて見た。

端から見ていた楓ですら恐くなった。

「あの時は、怒りで我を忘れていたから。でも恐がらせて悪かった」
肩を落とす綜一狼。

「ううん。ごめん。私こそ変なこと言って」

シユンとなってしまうた綜一狼を見て、楓は慌てて首を振る。

「いや、楓は本音を言ったままだ。もう俺のことなんて嫌いになっただろ？」

背中に影を背負い込み、暗い声で言葉を吐く。

「そんなことない！ 私は綜ちゃんのこと好きよ」

楓は両手を握り締めて、意気込んでそう答える。もちろん他意はない。

「へえ。そうか。好きか」

その言葉を聞いた途端、綜一狼はにやりと含んだ笑みを浮かべる。先ほどまでの落ち込みは何だったんだ？と突っ込みたくなるくらいの変わりようである。

「うん。当たり前じゃない」

しかし楓はそんなことには気が付かない。さっきと同じように真面目な顔で頷く。

「俺も楓のこと好きだ」

「？ え？ うん。あ、ありがとう」

綜一狼に至近距離でそう言われて、楓は思わず声を上ずらせる。

「それだけか？」

「へ？」

「俺は楓のことが好き。楓も俺が好き。これって両想いってことだよな？」

「よな？」

ただでさえ向き合って至近距離にいるのに、更に綜一狼はズイッと楓に体ごと近づくと。

綜一狼の端正な顔が楓の目と鼻の先にある。

「え？ ええっ」

ここまでできてやっと、これから起こるうかつかといつことを理解する楓。

「楓、俺は……」

いつの間にか楓の手は、綜一狼の手に包み込まれている。

「そ、綜ちゃん？」

胸の鼓動が大きくなるのを感じる。

楓は、綜一狼の真剣な眼差しから目が逸らせない。

それは突然に(8)

「はい、ストップ」

すっかり二人の世界状態の中、いつの間にか戻って来た保健医はヒクヒクと引きつった笑いをして、二人を睨んでいた。

「あ……………」

「きゃあっ」

その姿を見たたん、楓は慌てて立ち上がり、綜一狼から数メートル離れる。

「ここをどこだと思っているの？ まったく、近頃の若い子は」

保健医は額を押さえ込み、ぶつぶつと呟く。

「ち、違います！ そ、そんなんじゃないんです！ 本当に違くて……………」

部屋の隅っこで、真っ赤な顔をして訳の分からない言い訳を始める楓。

「何でこんなベストなタイミングで」

綜一狼はといえば、落胆の色濃くぼそりと呟き、うな垂れる。

「仲がいいのはいいけれど、時と場所を考えてね」

「これからは気を付けます」

少しばかり毒気を含んだ保険医の言葉に動じることもなく、爽やかな笑顔で綜一狼は答える。

（今のって何？）

一方楓は、あまりの出来事にパニック状態になっていた。

「さて。あなたたち、取り敢えず病院に行くことになったわよ。大丈夫なんだけど、上の人たちは色々うるさいのよ。今、車を呼んでくるわ」

「さっきのようなことがないように」と釘をさし、保健医は部屋を出て行った。

後には楓と綜一狼が残る。

「あの人はワザワザ邪魔しに帰ってきたのか？ ……て、楓。いつまで、そんな隅っこにいるんだよ」

未だ部屋の隅に佇んだままの楓に、綜一狼がため息を付くように言う。

「だ、だって」

楓はジッと綜一狼を見る。

「だって何だよ？」

まだ混乱している楓に比べ綜一狼は何事もなかったように、普段と変わらない様子だ。

「な、何でもない！」

(からかわれたただけだ)

そう思ったら何となく腹立たしくて、楓は言いかけた言葉を飲み込むと、スタスタと綜一狼の元へと歩み寄る。

その時だった。保健室の扉が勢いよく開く。

ややもすれば、そのままドアが吹き飛んでしまうのではないかというほどの勢いがあった。

楓はびっくりして、ドアの方へと視線を向ける。

「楓！」

「綜一狼！」

楓の目の前に、二人の男女の姿が飛び込む。

「静ちゃん。透子トウコさんも」

あまりにも唐突な登場に、楓は目を丸くして二人を見る。二人の表情は共に険しいもので、それぞれ端正な顔をひどく歪ませている。

「どうした？ 血相変えて」

そんな二人の様子を見て、綜一狼はシラツとした口調で言う。

「どうしたもこうしたも。傷は？ ああ。しゃべれるということは、大したことないのね」

綜一狼の姿を見て、透子と呼ばれた少女は幾分か安心したように息を吐く。

「ああ。見ての通りだ」

ニイツと不適な笑みを浮かべて、綜一狼は包帯の巻かれた腕を軽く上げて見せる。

「あなたという人はまったく」

呆れたように言葉を吐きながらも、透子は表情を緩ませ微笑を浮かべた。

かたぎりとめい
片桐透子。

それが彼女の名だ。ストレートの黒髪とクツキリ二重の瞳。加えて完璧なプロポーション。

ミス稔川に選ばれたほどの美貌の持ち主で、二年生の現副会長。成績優秀、スポーツ万能、嘉神家とも縁が深い、旧家の令嬢である。

気さくな人柄で、男女を問わず慕われている。

綜一狼の『恋人』いや『婚約者』と黙されている。

「あなたも大丈夫ね」

綜一狼から楓へと視線を移し、透子は優しく微笑む。

「はい。心配をかけてすみません」

楓は勢いよく頭を下げる。楓にとっても透子は憧れの存在であり、密かな目標だったりする。

「いいのよ。無事だったんですもの」

楓の言葉に透子はやんわりと言う。

「手、怪我したのか？」

楓の手に巻かれた包帯を見つけて、静揮は険しい顔で声を上げる。

「うん。でも、どつってことないのよ。綜ちゃんが庇ってくれて」

楓は慌てて言う。

「そうか。『庇って』ね」

静揮は含みを持った言い方をして、鋭い視線を綜一狼に向ける。

「車が着たわよ」

保健室に保健医がひょっこりと顔を出す。

「はい。すみませんが楓を先に連れて行ってくれますか」

「え？ 綜ちゃんは？」

「すぐ行く。生徒会のこと、ちょっと透子に話があるんだ」

綜一狼はにっこりと楓に笑って言う。

「分かった。じゃあ、先行くね」

その言葉を聞き、楓は保健医と共に部屋を出た。

それは突然に（9）

楓が出て行くと、その場はガラリと雰囲気が変わった。

綜一狼の表情はフツと冷たいとも形容出来る表情に変わる。

それと同時に、透子も表情を引き締める。

「今度のことは、外部に漏れないように操作しておくわ」

これが世間にバレたら、学園の大スキャンダルになる。

なにせ、政治家の子供や綜一狼や静揮のような大会社の御曹司、透子ように旧家の令嬢など、ただでさえ注目を集めやすい生徒が揃っているのである。

「ああ。もちろんだ」

綜一狼は小さくうなづく。

その時、ズボンのポケットから微かな着信音が聞こえてきた。

綜一狼は携帯電話を取り出す。

「ええ。私です。今は怪我の治療に……。いえ、大したことはありません。……分かっています。すべて任せてください。ともかく落ち着いて。指示は後でコチラから出します。……。……。……。それではよろしく願います」

ほんの数分言葉を交わし、綜一狼は携帯電話を切った。

「少しは自分の頭を使えと言っただ」

携帯電話を切った後、綜一狼は苛々と言葉を吐く。

「誰からのの？」

「理事長だ。さっきの事件を聞いて、慌てふためいて電話してきた。透子。お前はあの男を呼び出してくれ。明日、俺が直接会う」

立ち上がりながら透子に言葉をかける。

「守屋………ね？」

眉を顰めて、嫌悪感をあらわにし透子は言葉を吐く。

「ああ」

「あの男を使うこと、私は賛成できないわ」

「お前はあいつが嫌いだからな。だが、こういうことはあいつの専門特許じゃないか。使わない手はないだろ」

透子の反発の言葉を、綜一狼は一蹴するかのようにきっぱりと言う。

「……分かったわ」

「もう戻っていいぞ。後のことは明日だ」

「ええ。………綜一狼。くれぐれも油断しないでね」

「誰に向かって言ってるんだ？」

「そうね………ごめんなさい。少し動揺しているらしいわ」

綜一狼の答えに、透子は小さく笑って踵を返し部屋を出て行った。

「……………」

「お前は戻らないのか？ 授業が始まってるだろ」

綜一狼は無言で佇んでいる静揮に言葉を向ける。

「早山はお前を襲って、楓はそれに巻き込まれたってことらしいな」

静揮は静かに言葉を吐く。

いつもと違うその声のトーンに、綜一狼は無言のまま静揮を見る。

「誰からも慕われている人望が厚い生徒会長。成績優秀スポーツ万能。その上、容姿端麗ときている。そんな奴が、裏でどんなことをしているのやら」

軽く肩を窄めて、言葉には侮蔑が見え隠れしている。

「何が言いたい？」

あくまで普段と変わらず、しかし綜一狼の声は鋭く静揮を射抜く。

「お前が裏で何しようとして、俺は口出しするつもりはない。言うてどうにかなる奴じゃないしな」

「その通りだ」

綜一狼は小さく笑う。

楓には見せたことが無い、どこか冷たい微笑だった。

静揮は出口へと向かう。

扉に手をかけたまま、もう一度綜一狼を振り返る。

「だけどな、楓を巻き込むな。もし、また今度のようなことがあつ

たら、俺は絶対許さない。全力で楓をお前から引き離す」

そう言って綜一狼を強く睨むと、静揮は保健室を後にした。

「もう二度と傷つけない。そんなこと俺が一番分かってるさ」

一人残された綜一狼は、低くそう呟き、傷ついた肩を強く掴んだ。

オオカミ来襲(1)

「静ちゃん。朝ごはん、コーンフレークだけどいいかな？」

楓は台所から、リビングにいる静揮に声をかける。

「あー！ そんなのは俺がやるからいい！ 怪我人は安静にしてるって」

慌ててかけつけてきた静揮が、楓が手に持っていた食器を奪い取る。

「別に、怪我っていつてもかすり傷なのよ？」

あまりにも大慌てでやってきた静揮に、楓は苦笑して言う。

あの傷害事件から一夜明けて、南条家はいつもと変わらない朝を迎えていた。

「怪我は怪我だ。いいから大人しく座ってなさい」

そう言って、静揮は無理やり楓を椅子に座らせる。

「平気なのに」

ふうつと楓はため息を付き仕方なく席に付く。

それを見届けて、静揮はいそいそと朝食の用意を始める。

しかし普段やりなれないもので、その様子はどう見ても手当たり次第に物を引っ張り出しているようにしか見えない。

「悪い。コーンフ레이크はどこだ？」

「上の戸棚の左から二番目。あ、うん。そこ。あー、もっと奥だよ」

たどり着きそうでした。たどり着かない。たまたま楓が席を立つ。

「私が取ったほうが早いよ」

「悪い」

言い出したのはいいものの、お湯すらまともに沸かしたことの無い静揮だ。

余計手間をかけるだけだった。静揮はバツが悪そうに頭を掻く。

「それにしても、こんな時に限って春重さんがいないんだもんな。まいつちつまうぜ」

静揮は、楓からの支持で冷蔵庫から牛乳を出しながら言う。

「私が行った方がいいって言ったの。友達が入院したっていうんだもん」

「命には別状ないんだろ？」

「それにしたって、私よりはひどいよ」

「結果はな。でも、一歩間違えばこんなもんじゃすまなかつたんだぞ」

手に巻かれた包帯を見て静揮は眉を顰める。

「うん。ごめんね。心配かけて」

「まあ、無事でよかった」

静揮は軽くぽんぽんと楓の頭を叩く。

「あれ？　そう言えば綜ちゃん遅いね」

いつもなら、とつくにやって来ている時刻である。

「そーだな」

綜一狼の名にムツとして、静揮は気の無い返事をする。

「私、迎えに行つてこようかな？」

「何でワザワザ楓が行くんだよ」

その言葉に静揮が異をと見える。

「だって傷の具合心配だし。もしかしたら痛くて動けないのかも。うん。そうだよ。綜ちゃんてば、無茶ばかりするから、またきつと何かやって……」

自分で言いながら本気で心配になっていく楓だった。
自分でドツボにはまっている。

「へっ！　あいつは殺してもしないさ。傷の一つや二つ、どぶっ
てことないって」

両手を宙に上げて、静揮はフンツと鼻を鳴らす。

「とりあえず殺したら死ぬけどな」

キッチンの入り口で、当の綜一狼がすかさずツッコミを入れる。

「んだよ。来たのか」

刺々しく静揮は綜一狼に向かって言う。

「おかげさまで、怪我の具合もよくてな」

静揮の不機嫌な様子など意に介さず、綜一狼はそう言い放つ。

「よかった。もしかしたら、また傷が開いたのかと思ったのよ」

「約束しただろ？ もう無茶はしないって。大丈夫。ちゃんと安静にしてたから」

「うん」

綜一狼の優しい微笑に、楓は大きく頷く。

そんな二人のやり取りをぼんやりと眺めながら、静揮は知らず知らずのうちに険しい顔つきになる。

「静ちゃん、どうしたの？ ボウツとして。もしかして、具合悪いとか？」

静揮を覗き込んだ楓が表情を曇らせる。

「いや。何でもないんだ」

静揮はハツとして、あやふやな笑いを浮かべる。

「ただ、腹が減ったからじゃないのか？」

「そうだろう？」 と綜一狼は同意を求め静揮を見る。

「あはは。うん。実はそうなんだ。昨日は色々あつて食欲なかったしさ」

仕方なく静揮も話を合わせる。

本当は昨日楓を巻き込んで、怪我をさせた綜一狼を許した訳ではない。

しかし、楓は綜一狼を庇うだろうし、ここでそのことを持ち出すほど、静揮も馬鹿ではない。

「よかった。昨日から静ちゃん元気なかったから、ちょっと気になつてたのよね」

楓は安堵のため息を漏らし微笑む。

「大丈夫だよ。楓が元気なら俺も元気だ」

笑みを返し静揮は明るい声で言った。

オオカミ来襲(2)

「うん。じゃあ、朝食にしようか」

席につき、その場の雰囲気も何となく和みかけた時、綜一狼が徐に口を開く。

「昨日のことなんだが、どうもおかしなことになって来た」「何か分かったの?」

結局、訳が分からないまま早山は連行されていってしまった、あの後どうなったのか、楓はまったく知らなかった。

「いや。それが、早山本人は何も覚えていないと言っただ」「覚えていない?」

その言葉に静揮が顔を顰める。

「ああ。俺達を襲ったことも、それどころか、朝からの記憶がまったく無いと言っている」

「そんなことって……」

確かに、自分達を襲った時の様子は尋常ではなかった。

それにしても、記憶がないなんてことが本当にあるのか、楓は考え込む。

「そんなの言い逃れに決まってるだろ。あれだけ大暴れしてよく言えたもんだぜ」

静揮は眉を吊り上げて憤慨する。

楓に傷を付けたという許し難い行為。

できる事なら、二、三発殴ってやりたいというのが今の心境だ。

「今、精神鑑定もしているらしい。その結果が出てみないと何とも言えないがな」

「うん。早山先生があんなことをするなんて、今でも信じられないよ。すごくいい人だったのに」

学園で見る優しいな笑みを浮かべる早山を思い出す。

「それはどうかな。人は見た目だけじゃ判断できない。なあ、綜一狼」

静揮は綜一狼に意味ありげに目を向ける。

その瞳にどことなく敵意が込められている。

「ああ。そうだな」

それを受けて、綜一狼は表情を変えことなく答える。

どこかよそよそしい空気。

「え、と……」

その場が何やら重苦しい雰囲気になり、楓はオロオロする。

と、その時ちょうど、どこからともなく微かなアラーム音が鳴り響いた。

携帯電話の着信音だ。

「悪いな」

その音を聞き、綜一狼はすぐに制服のポケットから携帯電話を取り出した。

「俺だ」

綜一狼は、相手の言葉に何度か頷き、徐々に表情を険しいものに変化していく。

その様子を傍で見ていた、楓と静揮は思わず顔を見合わせる。

「……………分かった。今からすぐに行く」

最後にその言葉を返すと、綜一狼は携帯を切り立ち上がる。

「何かあったのか？」

神秘的な顔つきの綜一狼を見て、堪らず静揮が訊ねる。

「ああ。まったく、昨日といい今日といい次から次へと……………。楓、悪いがすぐに行かなきゃいけなくなった。朝食悪いな」

「うっん。そんなことはいいけど、一体どうしたの？」

昨日のことが脳裏を掠め、楓は心配そうに綜一狼を見る。

綜一狼の腕には、痛々しく包帯が巻かれている。

傷は浅いということだが、やはり完治するのに数日はかかるということだった。

「そんな顔しなくても大丈夫だよ。昨日みたいな乱闘はしないさ。ただ、ちょっとばかり厄介なんだ」

笑いかけてはいるが、やはりその顔にはどことなく動揺が残っている。

「何があったの？」

楓は綜一狼に尋ねる。

「ああ。学園が乗っ取られたらしい」

綜一狼は至って真面目な顔でそう答えた。

オオカミ来襲(3)

「乗っ取……………」

「られた？」

綜一狼から出たその言葉に、楓と静揮は間の抜けた顔をする。

「それってどういうこと？」

楓はうーんと頭を抱え込む。

いくら日本有数の名門校と言っても場所は学園。

乗っ取ってなんの意味があるというのだろう。

「てーことは、誰かが立て籠もってるのかそういうことなのか？」

同じように考え込んでいた静揮が、綜一狼に神妙な顔で尋ねる。

「いいや。そんな原始的なことじゃないさ。正確には、学園のシステムが乗っ取られたんだ。ともかく行ってくる」

そう言いながら、綜一狼は素早く上着を着込む。

「待つて。私も一緒に行く」

楓は慌てて席を立つ。

「だめだ。何が起こってるか分からないんだ。危ないだろ」
「迷惑はかけないから。ね、いいでしょ？」

楓は拝み倒すように綜一狼に向かって手を合わせる。

「遊びに行くわけじゃないんだ」

「うん。分かってる。でも、綜ちゃんだけじゃ、心配じゃない」

綜一狼の言葉に楓はもっともらしくそう反論する。

(楓が付いてくるっていう事の方がよっぽど不安じゃないのか?)

と、綜一狼は思わず心の中で反論し額を押さえ込む。

「そんな大怪我してる綜ちゃんを一人でなんて、絶対行かせられないんだから」

いつになく頑なに楓はそう言い張る。

「でもな」

どうしたものかと綜一狼は困り果ててチラリと静揮の方を見る。

「綜一狼の負けだな」

その様子を見て静揮はおかしそうに笑う。

こういう場合の楓はひどく頑固だ。

根が真面目な分、相当性質が悪い。

さしもの綜一狼も今回はうまく丸め込めないだろう。

まだ思案している様子の綜一狼に、静揮は更に言葉を続ける。

「こういう時の楓は何言っても聞かないって。行こうぜ。急いでんだろ?」

そう言いつつ、静揮も席を立ちいつの間にか、すっかりと出かける準備を整えている。

楓が行くとなれば、自分が行かないわけにはいかないのだ。

「たくつ、分かったよ。ただし、俺から離れるなよ」

すでに付いていく気の二人に何を言っても無駄だということを感じ、綜一狼はとうとう折れる。

「うん」

ほんとうに分かっているのかどうか、にっこり笑って楓は大きく頷いた。

オオカミ来襲(4)

時は二十一世紀。

文明は確実に進歩した。

その中でも、稔川学園のシステムは目を見張るものがある。

すべてのものにおいて、最新の技術を取り入れる。

それが、この学園の謳い文句の一つでもある。

例えばセキュリティ管理。

生徒は一人一人、学園オリジナルのカードを持っている。

このカードには、特殊なICが埋め込まれている。

これを持っていなければ学園内に入ることは不可能。

つまり、それを身につけていることにより、その者が学園の関係者かどうか判断し、不審人物の侵入を防げるといっわけである。

おまけに、個人の認識機能にもすぐれており、偽造その他一切の不正進入は不可能に近い。

また、学園内の販売物もすべてそのオリジナルカードでの支払いとなっている。

衣食住に必要な一通りのものが販売されており、生徒はそれをカード一つで買うことが出来る。

しかも、プリペイド式なので、買いすぎや不正な方法で手に入れられたカードの使用を抑えることが出来る仕組みになっているのだ。

その他にも学園の主な連絡事項は壁かけ式の大形テレビから、決まったペースで流れている。

知りたいこと聞きたい事がすぐにひきだせる、最新のコンピュータも備え付けられている。

そして、それらを管理しているのは総一狼率いる生徒会だ。

そのため、生徒会の権力は下手な教師よりずっとある。

すべてのコンピュータ、セキュリティシステム。

そういったものは、厳重な管理の元、滞りなく使われてきたのだ。

そう。今までは。

校舎に足を踏み入れたと同時に楓は思わず耳を塞いだ。

「何これ？」

耳の奥に入り込む不快な音。

すべてのモニターが砂嵐になっている。

廊下に備え付けられた大型テレビからも、各部屋にある最新のものであるはずのコンピュータからも、セキュリティ管理の小さなモニターさえ、すべてが同じように電波のないテレビのように砂嵐を映し出している。

しかも大音量で雑音が響いている。

耳がおかしくなりそうだ。

「生徒会室に行くぞ」

同じように耳を押さえ込みながら、綜一狼が声のポリウムを上げる。

楓と静揮は頷き、綜一狼の後に続く。

（何だか怖い）

足早に進む二人の後ろから、楓は辺りをキョロキョロと見回す。いつも見慣れているはずのその風景が、まるで知らない場所のようだ。

電灯さえイカレているのか、昼間だというのに薄暗く、モニターだけがボウツと淡い光を放っている。

「楓、大丈夫か？」

その声にハツとして楓は顔を上げる。
綜一狼が足を止め楓の顔を覗き込んでいる。
楓は慌てて頷く。

「無理すんなつて。楓は恐がりなんだから」

隣りにきた静揮が意地悪く言う。

「平気だよ」

無理についてきた手前、口が裂けても恐いだなんて言えない。

「大丈夫だ。俺がいるから」

そう言ったのは綜一狼だった。

口で何と言っても、態度で恐がっているのはバレバレだ。

「俺達だろーが？」

それに続き静揮が不満気な声で訂正する。

「そついえば一応、お前も居たんだな」

シラツとした顔で綜一狼は言う。

「まったく、いい根性してやがるぜ」

静揮は口元を引きつらせている。

「おかげ様でな」

嫌味なくらい（というか嫌味だが）綺麗な笑みを浮かべながら、
綜一狼は涼しい顔で答える。

「相変わらずム力つく奴だな！ 大体、お前は昔からな……」

「昔の話などいちいち覚えていないな」

「てめーはっ」

「ぶっ。あははっ」

言い争う二人を見上げていた楓は、唐突に笑い出す。

「？」

あまりにも盛大に笑っている楓の姿に、綜一狼と静揮は目を丸くする。

「ごめん。でも、あははっ」

何もこんなところで言い争う必要は無いのに。

二人は落ち着いた口調ながら、その声は騒音に負け時と大きい。

傍から聞いている楓には、それがおかしくて仕方がなかったのだ。
不安な気持ちもいつの間にかき消される。

爆笑している楓を見て、綜一狼と静揮も思わず苦笑した。

「あれ？」

先に進もうと歩き出した直後、ふと視線を感じて楓は辺りを見回す。

一瞬、視界の端を横切る者を見た気がした。

「どうした？ 楓」

「今、誰かいたみたい」

「まさか。他の生徒には、遅延連絡してあるはずだし、生徒会役員
だったら、俺たちに寄ってくるだろ」

「ううん。でも、確かに人だったもの。こっち」

楓はそう言うと人影が消え去った方角へと歩き出す。

「あ、おいっ。楓」

妙に気になった。

明らかにこちらに気が付いていた。

それなのに、姿を見られた途端に逃げ出すなんておかしい。
楓は人影が消え去った方角へと歩き出した。

オオカミ来襲(5)

それはちょうど、大型モニターに差ししかかった時だった。

西棟と東棟を結ぶ、だだっ広い踊り場には、学園でもっとも大きなモニターが頭上に吊るされている。全校生徒の三分の一が入れるスペースだけあって、そのモニターも半端な大きさではない。

突然に、その場の騒音がピタリと一斉に鳴り止んだ。

まるで、三人がその場に入るのを待っていたかのように。

不吉なくらいの静けさがその場に広がる。

「何だ？ 直ったのか」

「いや。見る。モニターに何か映ってる」

静揮の問いに、綜一狼が踊り場の大型モニターを顎でしゃくる。

「あれは……」

ぼやけた映像が、やがてその人物を明確に映し出す。

黒髪に青い瞳の男。

年は二十代前半といったところだろうか。

黒髪に青い瞳はひどく神秘的で、ハツとさせられるほどに綺麗な顔立ちをしている。

「何だよこいつ」

隣りで静揮が息を飲むのが分かった。

驚く楓たちとは対照的に、男は椅子にゆったりと座り込み、悠然と笑みを称えている。

まるでその場の光景を楽しんでいるかのようにだった。

「チッ」

男の余裕な表情を見て、綜一狼が忌々しげ舌打ちする。
不快感が支配する。

自分の領域を土足で踏み荒らされた。

こんな屈辱的なことは、久しぶりだった。

「こいつ、どこから映像を送ってるんだ？ 何のつもりなんだよ、
一体」

静揮もひどく憤慨した様子で画面の男を強く睨む。

『簡単なことだ。コンピュータなど所詮は機械。一つにつけこめば
すべてが覆せる。実に単純で楽な作業だ』

「なっ」

絶妙なタイミングだった。

男はまるで静揮の問いに答えるかのように、ゆったりとした口調
で言葉を吐いた。

「モニタールームか」

そこで綜一狼は合点がいく。

学園内でも数名しか足を踏み入れることが出来ないはずのモニタ
ールーム。

学園すべてのコンピュータを管理しているいわば、学園の中心部。
蟻の子一匹入り込めないよう厳重に警備されたそこに、男は入り

込んだのだ。

「お前は誰だ？」

しかし、それならば話は早い。

綜一狼は臆することなく、男を真つ直ぐに見据える。

その姿を見て、男はさもおもしろそうに口元を緩ませた。

『運命の巡り合わせとは数奇なものだな。何が起ころのか分からない』

そう言い綜一狼を見、そして視線は楓へも向けられる。

あまりにも唐突なことに、楓はビクリと小さく体を震わせる。

綜一狼も男の視線に気が付き、楓を自分の後ろへと引き込みその姿を隠す。

静揮も一歩前へと足を進め敵意を露にして男を睨む。

「質問に答える」

『血気盛んなことだ。まあいい、とりあえず名ぐらい名乗るのが礼儀というものか。俺は、ナイトウルフビシウ夜狼の聖だ』

「ヒジリ？」

その名に、楓の心の奥がコトリと音を立てた。

オオカミ来襲(6)

「ナイトウルフ
夜狼だと？」

綜一狼は息を呑む。

「冗談だろうが」

静揮も真面目な顔で声を固くする。

そんな二人のただならぬ様子に、楓はただキョトンとするばかりだ。

『ヒジリ』という名に引かかるものを感じたものの、『ナイトウルフ夜狼』という名称は聞いたこともないものだった。

『名ぐらいは聞いたことはあるだろう？ 世界を股にかけ盗賊集団。世間は俺たちを、ほしいもののためなら手段を選ばない、残忍卑劣な獣集団おおかみなんて言ったりもしてるみたいだがな』

「そういえば」と楓はフト思い出す。

何年か前に、新聞でそんな記事を読んだことがあった。

世界的遺産の絵画が、予告があつたのにも関わらず盗み出されたと。

「無敵の盗賊団」とかいう題がデカデカと紙面を飾っていて、この時代に「盗賊」なんて言葉がひどく不釣り合いだと思つたものだった。思えば、それが今目の前に居る『ナイトウルフ夜狼』だったのだろう。

「冗談はよしてくれ。なんでそんな有名な人がこんなところにいるんだ？ ここはただの学園だ。場所を間違えたんじゃないか？」

やっと平静を取り戻した静揮が、いつものように軽口を叩く。

その言葉を受けて、聖は口元を歪ませて小さく笑う。

「何がおかしいんだよっ」

「黙っている、静揮」

熱くなる静揮を押しとどめ綜一狼は聖に向き直る。

「わざわざ姿を見せたんだ。用件を言え。何が目的だ？ 俺も、この学園にあんたが盗むようなものがあるとは思えないんだが」

淡々とした口調で綜一狼は言葉を吐く。

相手は自分たちの動揺をおもしろがっている。

相手をワザワザ喜ばせてやるほど、綜一狼はお人よしではない。

「スカイティア空の涙。それを探している」

綜一狼の問いに聖は青い瞳を細める。

「ばかなっ！ それは……………」

ひどく狼狽した様子の綜一狼を、聖はおもしろそうに見る。

『今日はちよつとした挨拶に來たまでだ。お前にな……………楓』

そこで映像は途絶えた。

後には、騒がしい雑音がその場に響くのみだ。

そんな中、楓はただ呆然と立ち尽くす。

どうして、あの男が自分の名を知っているのか。それが、あまりにも意外なことだった。

「なんで、あの聖って奴が楓を名指しにするんだよ」

驚いたのは楓だけではなかった。静揮も、綜一狼も驚きを隠せない。

「楓、あの男を知っているのか？」

綜一狼の真剣そのものの問いに、楓は大きく横に首を振るのが精一杯だった。

心臓がドキドキと大きな音を立てている。

知らない。確かに知らないのだ。

でも知っている。知っているのだ。

楓の奥で何かがそう言っている。

相反する二つの答えが、楓の中で交差している。

でも、それを綜一狼や静揮に伝えるには、あまりにも曖昧すぎた。自分自身戸惑っているこの感覚を、他の誰かに伝えるのはとても無理そうだった。

「そうか」

綜一狼もそれ以上、詮索はしなかった。

「綜一狼、お前はどうなんだ？ 何か心当たりがあるんじゃないのか？」

暫くの沈黙の後、静揮は消えた画面を睨んでいる綜一狼に言葉を

向ける。

「いや。それより生徒会室に行こう」

静揮の問いにそう答え、綜一狼はゆっくりと歩き出す。

話す気がないことを悟り、小さく肩を竦めてから、静揮もその後
に続く。

（あなたは誰？）

今はもう何も映し出されていない画面を見つめ、楓は心のザワメ
キを押さえ込みながら、心の中で呟きを漏らした。

オオカミ来襲(7)

生徒会室に入ると、一足早く来ていた透子が綜一狼の元へと駆け寄ってきた。

部屋の中はバタバタと慌しく、役員たちが走り回っている。

「状況は？」

「見ての通り。まだみんな混乱していて、システムの復帰には暫くかかりそう。とりあえず、セキュリティだけは回復したけど、あの画面に映っていた男に逃げられたわ」

透子は悔しそうにキュツと唇をかみ締める。

「ま、そうだろうな。回復したというよりは、あいつが、元に戻していったという方が正しいだろう」

透子の言葉に綜一狼は淡々と言葉を吐く。

「私も見たわ。あれは一体……」

チラリと綜一狼の隣にいる楓に、視線を向ける。

「ともかく今は、システム復旧が先だ」

「ええ。そうだったわね」

綜一狼の言葉に、透子は作業へと戻った。

「楓、大丈夫だからな」

「うん……ごめんね、綜ちゃん」

楓は小さく息を吐き呟く。

何が『大丈夫』で何が『ごめんね』なのかよく分からないが、今日ここに来たことで、何かとんでもないことに巻き込まれてしまったのは間違いない。

(やっぱり思い出せない)

ずっと考えてはいるのだが、どうしても『ヒジリ』を思い出すことが出来ない。

聖のすべてを見透かしているかのようなあの青い瞳を思い出し、楓は唇をかみ締める。

思い出す度に胸が締め付けられる。

不思議な感覚。

恐いとも悲しいとも言い難い。

でも、確かに心が声を発している。

一番的確な表現。

それは『切なさ』かもしれないと楓は思う。

何ともおかしい感覚。

(きつとまた逢うことになる)

楓は心の中で呟く。

予感……いや、それは妙にはっきりとした確信だった。

「楓」

名を呼ばれて我に振り返り隣を見ると、険しい顔をした静揮の瞳と
かち合う。

静揮の目は何かを問いた気に、楓の瞳を覗き込む。

「……はあ。なんか、わけわかんねーよな。この間から。おかしなことばかりだ」

一度何かを口にしかけて、けれどそれを飲み込み、静揮は力なく笑い言葉を投げる。

「うん。本当だよな」

「もどかしい……」

「え？」

「お前のこと、全部分かったらいいのにな。そうしたら、お前にそんな顔させないのに」

一体自分はどんな顔をしていたのだろうか？

『ヒジリ』を思い出したその時の顔は、そんなにひどい顔をしていただろうか？

複雑な思いが入り混じってよく分からない。

「悪い。何言ってたんだ俺は。いや、ほら、困ったことがあれば何でも言えよ。ってことだ。何でも相談に乗るからな」

考え込む楓の姿に静揮はそう言葉をかける。

「うん。ありがとう。頼りになるお兄ちゃんがいて心強いよ」

楓はにっこりと微笑む。

その言葉に、静揮がどこか複雑な表情を浮かべていることに、楓は気づかなかった。

転校生（1）

結局、システムの復旧が完了したのはお昼近くになってからだ
た。

（綜ちゃん、どうするつもりなんだろ？）

生徒たちが登校してからも、細かな後始末で綜一狼は忙しそうに
動き回っている。

生徒会役員ではない静揮と楓は、そうそうに生徒会室から追い出
されてしまった。

気持ちは晴れないままながら、静揮と別れ楓は自分の教室の中へ
と入る。

「あれ？」

最初は気が付かなかった。

しかし、数秒後に異変に気が付く。

なぜか、教室はシンと静まり返っている。

その上、教室の中にいる者たちの視線はあからさまに楓に向けら
れている。

あまりに異様な雰囲気は楓は思わず後ず去る。

「え、えっと……」

自分の姿がどこかおかしいのだろうか？

確かにきちんと制服は着ているし、髪もそんなに乱れてはいない
と思う。

それとも、顔に何かついていたりとか？

楓は訳が分からず、思わず自分の顔や服をペタペタと触り、おかしなところがないかと確認する。

「楓！」

「南条さん！！」

一瞬の沈黙。

それは嵐の前の静けさだった。

沈黙の後、クラスメートたちは男女を問わず、われ先にと楓の周りに集まり出す。

呆然としたまま、楓はあっという間にクラスメート達に取り囲まれた……というよりは包囲されてしまった。

「ねえ！ 会長に抱きかかえられたって本当！」

この一言で、楓はこの異様な状態に合点がいく。

昨日の傷害事件。

それが、すっかりクラス中の話題になっていたというわけだ。

「あなたたちってただの幼馴染みじゃないの？」

「会長はてっきり透子さんと付き合ってると思ってたけど、それってカモフラージュだったんだ」

「うそでしょー！ 会長と付き合ってるの！」

「俺は、早山先生と三角関係だったって、聞いたけど」

「つーか、早山が南条さんに言い寄ってたんだろ？」

「いつからそういう関係なのよっ」

矢次に繰り返される言葉。楓は硬直する。

すっかり忘れていたが、昨日は昨日でそんなこともあったんだ。と、妙に他人事に思ってしまう。

今日は今日で色々合った所為で、楓の中で昨日のことはすでに遠いものになっていた。

それにしても、多少の騒ぎは覚悟していたものの、まさかここまですごい反応とは。

人の噂を甘く見ていた。

話が広がるのが早い上に、中にはとんでもないホラまで含まれている。

周りを取り囲むクラスメートたちの迫力に圧倒され、楓はただ呆然とする。

「黙っていないで何か言ってよ。楓」

「南条さん!」

「どうなのっ」

当の本人を他所に、段々とその場が白熱してくる。

取り囲まれ楓は身動き一つ出来ない。

その上、後ろにいる者がドンドンと詰め寄ってくる所為で、目の前にいる者が楓を押しつぶしていく。

「痛ッ」

小さい楓はあっという間に人の群れに飲まれてしまい、早山に傷つけられた手の甲が、誰かにぶつかって忘れかけていた痛みを思い出させる。

「ち、ちよっと待って」

ズキズキと痛みだした手を庇いながら、やっと絞り出した声もその場の騒音でかき消されてしまう。楓は途方に暮れる。

バンツ！

突然に鳴り響いた、何かが倒れ込む音。

それは、教室の中のざわめきを一瞬で押さえ込むほどの音だった。

転校生(2)

その音に一瞬、楓への追及の声が止まる。

皆、反射的に音がした方へ視線を移す。

見ると、そこには木造の教卓が横たわっていた。

それには、しっかりと四本の足が付いている。

どこも折れてはいなかったし、不安定な場所にあったわけでもない。

もちろん、そんなものが倒れ込むほどの振動があったなど、この教室にいる全員が知っている。

つまり、誰かが故意に倒したということだ。

誰か、というのもこの際必要ないのかも知れない。

なぜなら、その張本人はその場にいるからだ。

倒した教卓に足をかけ、ふうと軽く息を吐き出している。

金の髪は短くカットされ、耳にかかる程度の長さ。

耳にはグリーンの丸い小さなピアス。

そして、それと同じ色の大きく切れ長の瞳。

よく一人で教卓を倒すなどという行為が出来たものだと思わせる華奢な体。

まるで少年のような、中世的な美しさがある。

身に纏っているのは紛れもなく、稔川学園の制服だったが、リボンとかベルトだとかを外した極力装飾品を無くした独特の着こなしは、それなりの個性になり、彼女の魅力をより一層引きだしている。

「何だよ、一体」

その様子を見ていた一人が啞然としつつ呟く。

それを聞きつけ、その人物はニツコリと微笑み言葉を吐き出す。

「黙れ」

と。言葉と表情が一致していない。

戸惑う周りをよそに、本人はスラスラと言葉を並べ立てる。

何語か分からない。

とりあえず日本語と英語ではないことは確かだ。

並べられた言葉が理解出来ず、その場の者たちは呆然とする。

「ふう」

一通り言葉を吐くと、その人物はもう一度息を吐き、ジッとその場の者たちを見る。

「……………」

その視線の強さに圧倒され、誰一人として言葉を口に出せない。

「早い話、か弱い女の子をいじめるなっことよ」

そう言ってスタスタと歩き、楓の前で足を止める。

周りはその迫力に押され、思わず道を譲っていく。

「ねえ」

楓に向かい少女は言う。

「は、はいっ」

楓は驚いて声を上ずらせながらも、返事をする。

「今って昼休みじゃない？ おなか減っちゃった。あなた、一緒に食べに行きましょう」

ニッコリと、天使と見紛うほどのかわいらしい笑顔を楓に向けて言う。

「あ。えっと、はい」

何が何だか分からないまま、楓は勢いで頷いていた。

「よしっ！ 行こう！」

グイッと楓を教室から引つ張り出す。

呆然とするクラスメートたちに見送られ、楓は少女と共に教室を後にした。

「あ、あの、ちょっと待って！」

スタスタと歩く少女の歩みを、教室を出て数メートルの位置で楓は足を止め思い切つて声をかける。その声には少女はクルリと振り向き、グリーンの瞳を楓に向ける。

「なあに？」

聞き覚えの無い言葉で何か言われたらどうしようかと思ったが、少女は普通に日本語で返事をした。楓はとりあえずホッとする。

「えっと、さつきはありがとうございます。あんなに大騒ぎになるなんて思わなかったから、すごく困っちゃって。助かりました」

楓はペコリと頭を下げる。

「いえいえ。どういたしまして。だって、あなたすごく困り果てた顔をして、まるで迷子の子羊みたいだったんですもの。つつい放っておけなかったのよね」

クスクスと笑いながら、少女は手をパタパタとさせる。

「楓って、思ってたよりずうとかわいい子。よし。気に入ったわ」

上から下までじっくりと楓の姿を見て、少女はニツコリと笑う。

「思ってたよりって、私のこと知ってるの？」

その発言に、楓はキョトンとして首を傾げる。

「ウン。南条楓。知ってるわよ」

屈託のない笑みを浮かべ、少女は答える。

確かに知らなくてもおかしくない。

早山先生の暴走に巻き込まれ、あまつさえ、綜一狼のあのパフォーマンスだ。

色んな意味で注目的だろう。

こんなことで目立っても、ちっとも嬉しくないのだが。

「あの、それであなたは誰？ あっ、もしかして例の留学生？」

一連のゴタゴタですっかり忘れていたが、昨日楓のクラスに留学
生が来たはずだ。

それがこの……。

「はい。正解。私はルナ・ボイスって言うの。ルナでいいわ。よろ
しくね。楓」

そう言うと楓に手を差し出す。

「うん。よろしく、ルナ」

差し出された手を取って、楓はにっこりと微笑んだ。

転校生(3)

楓たちは、売店で昼食を買う。

普通に廊下を歩いていても、楓へは好奇の目が向けられている。

一連の揉め事の破片が四方に飛び散り、そこに尾ひれが付き、とんでもない話に発展していたりする。

それでなくとも『生徒会長に庇われたヒロイン』として、注目を集めてしまっている。

本当のところはどうなのか。

真相を知りたくてウズウズしているのは、一人や二人ではない。

(綜ちゃんに悪いことしちゃったなあ)

周りからの視線を一心に受けながら、楓は小さく息を吐く。

教室でのあの質問攻めから察するに、自分が綜一狼の『彼女』なのだ、勘違いしている者たちが少なからずいるらしい。

綜一狼はただでさえ忙しいのに、こんなおかしなデマで煩わせたくはない。

「あのね、ルナ。ちょっと寄りたところがあるんだけどいいかな？」

「うん。いいよ。でもどこに？」

小首を傾げながらルナは楓を見る。

「生徒会室なんだけど。ちょっと話をしたい人がいるから」

この際、先手を打って謝っておくのが一番だ。

楓はルナと共に生徒会室へと向かった。

「お邪魔します」

楓は、生徒会室にひょっこりと顔だけを出して中を覗き込む。

「よう。楓」

中には静揮の姿があった。

部屋に置かれたソファに腰掛けて、サンドウィッチやらおにぎりを次々と袋から取り出している。

「どうやら、その場には静揮しかいないらしい。」

楓は生徒会室に足を踏み入れる。

「静ちゃん、ここでお昼？」

「そっ。今朝のことも気になるし、綜一狼がどうするつもりなのか
と思っただけ」

と言いつつ、静揮は持っていたおにぎりをほづばる。

「綜ちゃんは？」

辺りを見回すが、やはりそこに綜一狼はいない。

「昼でも買いに出たんじゃないか。そこに鞆もあるし」

「そっか」

見ると、確かに会長席には見慣れた綜一狼の鞆が置いてある。

「南条君。お昼なら教室で食べてくれない？」

他の役員二名と共に書類らしきものを抱えて生徒会室に入ってきた透子が、静揮に向かって非難めいた口調で言う。

「あ、もしかして、何か仕事ですか？」

「いいえ。別にそういうわけではないんですけど」

透子は小さく首を振り、冷たい視線を静揮に向ける。

「あなただったら、何かというところこの部屋に来て。ここを休憩室か何かと勘違いしてないかしら？」

「別にいいじゃないかよ。こんなに広い部屋なんだし、同じクラスのよしみでさ」

「それ、関係ないと思うわ」

静揮の言葉に、透子は冷たく言い放つ。

「あの、私たちはすぐに行きますから」

二人のやり取りを見て、楓は出口に足を向ける。

「いいわ。もう仕事も終わりにするつもりだったし。この際だから、楓さんもここでお昼にしたらどう？」

「いいんですか？」

外に出ても落ち着かないし、ここに居ていいというのなら有難い話だ。

「いいのよ。ただ、ちょっとまだゴタゴタしているものだから、苛付いてしまっごめんなさいね」

透子はぼつりと呟く。

「ゴタゴタって今朝の……」

「ええ、まあ。でも、お昼くらいゆっくりしたいものね。気にしないで」

微笑みそう言つと、書類の片付けに入る。

「ところでさ、一緒に居るその子誰？」

呑気にモコモコと二個目のおにぎりをほお張りながら、静揮は楓に尋ねる。

「あ、うちのクラスに来た留学生のルナ・ボイスさん。一緒にお昼を食べようと思って」

「はじめまして」

静揮と目が合うと、ルナはにっこり笑って軽く会釈する。

「ああ。どうも。二年の南条静揮です」

食べかけのおにぎりを慌てて飲み込み静揮も頭を下げた。

「よかったな、楓。早速仲良くなったんだ」

「あ、うん。まあ、色々あって」

アハハッと、楓は乾いた笑いを浮べる。

「色々？」

その言葉に静揮は怪訝そうな顔をする。

「はい。実は……」

「な、何でもないの！」

事情を説明しようとしたルナの口を、楓は慌てて押さえ込む。

さっきのことを静揮が知ったら心配するに違いない。

出来れば知られたくないというのが本音だ。

「て、いう時はなんか有るんだよな。楓は」

が、静揮には悲しいくらいにバレバレだった。

転校生(4)

「言いたくないならいいけどな。でも、彼女には何か世話になったんじゃないか？」

「うん。窮地を救ってもらったというか」

「そっか。じゃあ、俺もお礼言っとかないとな。どうも、うちの楓がお世話になりました」

至極真面目ぶった顔で、静揮はフカブカと頭を下げる。

武道を嗜んでいるだけあって、静揮はこういうことにはうるさいのである。

「きゃあ。静揮さんが頭を下げられているわ」

「あの方がやると何でも絵になるのよねえ」

その様子を目撃した透子と一緒にいた生徒会役員が黄色い声を発する。

静揮は学園内でも綜一狼と二分するほどの人気を誇っている。

妹である楓を心底大切にしているというのも、ポイントが高いと高くないとか。

そんな静揮ファンには、こういった場面は堪らないものらしい。

「生徒会長も素敵だけど、静揮さんもかっこいいのよねー」

「うんうん。分かるー。二人一緒に居るところなんかもう……」

「・

「きゃあ。きゃあ」と話の花を咲かせ始める。

「あなたたち後はもういいわよ。教室に戻りなさい」

そんな役員の姿に、透子は苦笑をしつつ言葉をかける。

「あ、はい。それじゃあ……………」

「うちの？ 楓は静揮の恋人？」

出て行くこうとしたとき、ルナの爆弾発言を聞き役員達の動きが止まる。

静揮は手に持っていたおにぎりを落とし、楓は目を丸くする。

「ち、違うよ。静ちゃんは……………」

「ただの妹ですっ！」

「そうよ！ 誰が恋人よつ。透子先輩ならともかく、どうしてあんな子が恋人なのよ！」

楓の否定の言葉より早く、戻ってきた役員達が烈火の如く怒りながら、ルナにそう言い放つ。

いつものおしとやかさはどこえやら。二人は猛然とルナに詰め寄る。

「あ、そうよね。同じ南条だし。でもあんまり似てなかったから」

そんな二人の反発に合いながら、ルナはマイペースにそう言葉を吐く。

「確かに、この子は静揮さんと違ってパツとしない容姿ですけど、二人は紛れも無く……………」

「あなたたち」

「あ、す、すみません。失礼しました！」

コメカミを押さえ込んでいる透子と啞然としている静揮の姿に、役員達はやっと我に返り真つ赤な顔をして部屋を飛び出していった。

「ごめんなさい、楓さん。あの子たちも悪気はないんだけど」

「いえ。透子さんが謝らなくても。別に気にしてないですから」

俯いたまま楓はブンブンと首を振る。

「そっか。恋人同士か。そう見えんのかな」

どことなく嬉しそうな顔をして、静揮はウンウンと頷く。

「あ。私、綜ちゃん捜して来ます！」

突然に、楓は言い捨てるようにして部屋を飛び出した。

「楓さん……」

「楓どうしたのかな？ 私、何か悪いこと言いました？」

「いや。俺にもよく」

楓は明らかにおかしかった。

だが、その理由が分からず静揮とルナは、互いに顔を見合わせ、首を傾げる。

そんな静揮の姿に透子は小さく吐息を付く。

「あなたは」

透子は静揮を見て言葉を零す。
その瞳に、静揮は思わず蹴落とされそうになる。
普段は、特に綜一狼の前では見せることの無い、憎しみすら感じさせる瞳だった。

「あなたは、いつまで偽り続けるつもりなの？」

「何のことだ？」

透子の言葉の意味を理解しかねて、静揮は眉根を寄せる。

「見ていてイライラするわ。あなたもあの子も。それに……
いいえ。何でもないわ。忘れて」

途中で透子は口を噤む。

「お前、もしかして知っているのか？」

静揮はハッとして透子を見る。

自分と楓に血の繋がりが無いということを知っている。

そうであつてもおかしくないことだ。

透子の家と綜一狼の家は昔から付き合いがあつたし、そういう話
話が、戯れに話されていたとしても決しておかしなことではない。

「何のことかしら？」

透子は言い放つ。

「いや、なんでもない」

ここで真相を知ったところでどうなる話でもない。

(言えるものならとっくに言ってる)

静揮は心の中で呟く。

十年だ。十年という月日を、静揮と楓は兄妹として育ってきた。

例え、静揮がずっと楓を妹として見ていなかったとしても、楓は静揮を兄として慕っている。

これは絶対だ。

それを壊すことがどんなに勇気があることで、難しいことなのか、歳を重ねれば重ねるほどに身に染みる。

静揮と楓の距離はもっとも近く、そしてもっとも遠いのだ。

「色々大変なのね」

いまいち理由が飲み込めていないルナだが、その場の重苦しい雰囲気を感じ取り、肩を竦めて呟いた。

ぬくもりを求めて(1)

十年。十年だ。自分が南条家に引き取られて十年。

楓は生徒会室を出て足早に進む。

「逃げることはないのに」

『似てない』

ルナの台詞は痛かった。

まるで、「あなたの家族じゃないじゃない」と言われたような気がした。

自分が南条家の養女だということは、何十年と言う歳月を経ても、決して変わることに無い事実なのだと思いつけられた気分だった。

育てて貰っているだけでも有り難いと思わなければならぬ。

こうして、静揮と同じ高校に行かせて貰って、何不自由なく暮らさせてもらっているのだ。

何に不満があるというのだろうか？

どうして、時々ひどく淋しいと思ってしまうのだろうか？

いけないと、自分を戒めれば戒めるほどその気持ちは心に濃く影を落としていく。

「暗くなっただってしょうがないじゃないっ」

楓は、廊下の窓の棧に寄りかかり、外の空気を吸い込む。

「あれ？ 綜ちゃん」

何気なく見下ろしたそこに、綜一狼の姿を見つける。

綜一狼がいるのは裏庭だ。

そこは建物が完全にその場を囲っており、まるでその場だけ切り離されているかのように暗く雑然としている。

「あんなところで何してるんだろう？」

楓は首を傾げる。

裏庭などに誰も好き好んで足を踏み入れない。

そこにいくのは、学園内でも噂の芳しくない連中と相場が決まっている。

喫煙、カツアゲ、恐喝。

上層階級の学校といったところで、そういった部分では一般の学校と何ら変わらない。

いや、下手に権力を持っている分、問題は厄介だと言えるかもしれない。

そういったことに疎い楓でも、裏庭がどんな場所になっているのか知っている。

楓の中に不安が過ぎる。

何かトラブルでもあったのかもしれない。

一度不安を感じてしまうとそれが雪だるま式に肥大していく。

楓は慌てて一階へと駆け下り裏庭に向かった。

綜一狼の姿はすぐに見つかった。

楓はホッとして綜一狼に駆け寄りうとした。

「綜……………」

声を掛けようとして、その場にもう一人の人物が居るのを見て、思わず楓は立ち止まる。

上からだど、木が邪魔していてその人物を認識出来なかったのだ。

「名は聖と名乗っていた」

綜一狼の低い声が楓の耳に届く。

(え？ なに？ 何の話？)

唐突に出た聖の名に驚く。

綜一狼の声が、いつもより幾分か冷たく聞こえるのは、声を潜めるように話しているからだろうか？

「ふうん。にしても、ややこしい話だな。てっきり、アレはあいつらが持つてると思ってたのに」

綜一狼に答え、相手が言葉を吐く。

「ああ。しかしあいつらが持っていないなら、好都合だ。ともかく

『スカイティア空の涙』だけは、何があっても奴らに渡す訳にはいかない」

「！」

綜一狼の声はつきりと耳に届く。

確かに綜一狼は空の涙スカイティアと言った。

「つうかあんなの場合はお姫様もだろ？ 何せ、あの子は……」

・と

男は唐突に言葉を切る。

楓が不審に思いつまもなく、男の気配が近付いてくるのを感じた。逃げようかと迷ってるうちに、楓は唐突に腕を掴まれてしまった。

ぬくもりを求めて(2)

「きゃあっ」

腕を引き込まれ、楓は悲鳴を上げる。

「盗み聞きはよくないよ。……て、もしかして南条のお姫様？」

腕を掴んだ主は意外そうに目を細める。

「お姫様ってあの」

楓は戸惑いながらも相手を見返す。

金に近い茶髪。猫っ毛なのか微妙に癖のある髪。

目が悪いのかそれとも癖なのか、眉間に皺を寄せながら、楓の姿を睨むように見ている。

その上、服装といったら綜一狼の上をいく着崩す方で、校則違反は完璧に破られていること請け合いな格好だ。

とりあえず、学園のズボンとワイシャツ着用をしているために、この学園の生徒であるということは分かる。

しかし、ワイシャツの第一ボタンを外した下には銀の鎖が見え隠れしていたし、指にはシルバーリングが光っている。

その上、耳にも丸いわっか上のピアスを嵌めている。
到底、善良な一般生徒には見えない。

「……………」

楓は面喰らってポケットとその人物をマジマジと見てしまった。

学園内には、性格上問題のある人物はゴロゴロいるが、表面は真面目にといつた者が大半だ。

目の前にいるこの人物のように、奇抜（この学園内では）な人物と会ったのは、初めてのことだった。

「楓、こんなところで何をしてるんだ？」

「綜ちゃん」

綜一狼の呼びかけに、楓はハッと我に返る。

「そーちゃん。………プツ。似合わねえ」

楓と綜一狼の間で、男は二人を交互に見てニヤニヤと笑う。

「あの？」

「こんなに近くで見たのって初めて」

？マークが飛んでいる楓に、男はズイツと顔を近づけてまるで値踏みするかのように、楓を上から下まで繁々とする。

「守屋、早く戻れ」

男………守屋の様子に眉を顰め綜一狼は言葉を吐く。

「そんな顔すんなよ。別に取って喰いやしないって」

綜一狼の不機嫌な様子を見てとって、守屋は愉快そうに言う。そして、もう一度楓へと視線を戻す。

楓は今だ状況が飲み込めずキョトンとして守屋を見ていた。

「あんだ、将来有望株だね。うん。どうだろ？ 綜一狼から俺に乗り換えてみない？」

「へっ？」

守屋のサラリと吐いた言葉に、楓の思考回路は一瞬停止した。

「俺、こう見えても頭いいし。綜一狼に負けなくらい将来有望だぜ」

「あ、あの、その」

「赤くなってる。かつわいいー」

守屋は素早い動きで後ろから楓に抱きつく。

守屋からは微かな煙草の匂いがした。

楓の体温は急激に上昇する。

言葉をうまく口に出せず、パクパクとまるで酸欠の金魚状態である。

守屋はクスクスと楽しそうに笑う。

(一体全体何なの?)

からかわれているのは分かっている。

分かっているのだが、そう言った免疫の少ない楓にはかなりきつい状態だ。

逃げようとする楓だったが、守屋は一向に気に止める様子もなく楓に張り付いて離れない。

「は、離して……」

困り果てて言いかけたとき、フワリと体が軽くなった。

綜一狼が守屋を引き離したのだ。

「俺は戻れと言っている」

ヒヤリとするほど冷たい声が楓の耳に届く。

振り向くと、綜一狼は守屋を壁につけて、殺気さえ感じる目を向けていた。

まるで今にでも殴りかかりそうな雰囲気だった。

「そ、綜ちゃん……」

「たくつ。相変わらず、お姫様のこととなると。冗談じゃん。見ろよ。姫さんが困ってるぞ」

明らかにその原因は守屋なのだが、綜一狼はその言葉を聞きバツが悪そうに手を離す。

「サツサと行け」

綜一狼は一度息を吐いてから、そっぴい捨てる。

その言葉を受けて、守屋は一度肩を竦めてその場を後にした。後に残った綜一狼と楓の間に暫しの沈黙が下りた。

ぬくもりを求めて(3)

「悪かったな」

先に口を開いたのは綜一狼だった。
ぼつりと呟くかのように言葉を吐く。

「え？」

「嫌な思いをさせた」

「そんなことないけど……。あの！ それよりさっき話
たことって」

楓は綜一狼を見上げる。

「さっきの話？」

「スカイデリア
空の涙の話してたでしょ？」

「……………」

綜一狼は無言のまま楓から視線を逸らす。

「綜ちゃん。もし、知っていることがあるなら教えて。お願い」

ほんの小さな糸口でも構わない。
自分と『ヒジリ』をつなげる何か。
それがなんなのか知りたい。

「楓は奴と……。聖と名乗ったあの男とどういつ関係なんだ
？ 本当に、知らないのか」

楓の問いには答えず、綜一狼は逆に楓に問い返す。

「え？」

『知らない』 そう言えない何かがあった。

けれど『知っている』とはつきりと言えるわけでもない。

楓は言葉に窮して黙り込む。

「……………分からない。だから知りたい。あの人が誰なのか」

暫くの沈黙の後で、綜一狼に向き直り楓は本心を言葉にする。

両親を一度に亡くしたトラウマからか、楓の六歳以降の記憶はひどく曖昧だ。

まるでピースの抜けたパズルのように。

日常生活には何の影響もない。

けれど思い出せない何かがあるということはひどく落ち着かない。

例え、それがどんなことであっても、楓は思い出したいと思う。

もしかしたら今回のことは、そのピースを見つけ出すチャンスなのかもしれない。

「忘れているのなら、無理に思い出す必要なんてない」

懇願する楓の視線を避けて、綜一狼はほとんど独り言のように呟

く。

その顔はどこか翳りを含んでいる。

「綜ちゃん？」

楓は驚いて幼馴染みの名を呼ぶ。

「いや、なんでもない。ただ、お前をおかしなことに巻き込みたくないんだ」

真面目な顔で、綜一狼は楓を見つめる。

「おかしなこと？ それってどういう……」
「いいから。忘れる」

言いかけた楓を、綜一狼は唐突に抱きしめる。

「ど、どうしたの？ 綜ちゃん」
「寒いから」

楓の問いの答えはおかしなものだった。

確かに寒い。

十月も終わりの季節。

日差しが差し込まないそこは暗くて寒い。

それにしても、だからと言って抱きつくのもどうかと思う。

楓はどうしたものかと考え込む。

押しのけようと思えば押しのけられる。

けれど、まるで壊れ物に触れているかのように、綜一狼の腕は優しい。

それを拒絶することを楓は躊躇う。

それになぜだろう？

妙に気恥ずかしくて胸の鼓動は痛いくらいに強く早鐘していると
いうのに、反面、心地好いほどの安堵感がそこにはあった。

孤独や不安が溶けていくような気がした。

すべてがその温かさの中で溶けていく。

確かに寒さを忘れさせてくれる温かさだ。

「悪い」

数秒か数分か。綜一狼はゆっくりと楓から体を離す。

「ううん。確かに温かった。けっこうこれっていいかも」

人間湯たんぽ。中々いいかもしれない。

「……………頼むから俺以外の奴にやらないでくれ」

ニコニコと微笑む楓の姿に、脱力しきつた綜一狼が力なく言葉を吐く。

言うておかなければ、この少女は間違いなく他の相手にもしてしまっただろう。

それこそ、相手のテーブルにナイフとフォークをセッティングしてやってメインディッシュの皿の上に座るようなものだ。

もちろんそんなこと、当の楓はまったく分かっていないのだが。

「ううん。綜ちゃんにもしない。昨日のことで、私との間におかしな噂が流れてるみたいなの。私、それを謝ろうと思って綜ちゃんを捜してたんだよ」

ハタツと当初の目的を思い出す楓。

「おかしな噂？」

「うん。その、私が綜ちゃんの彼女とか……………ごめんね。何だか迷惑かけちゃって」

楓はモゴモゴと言葉を転がす。

「いや、俺はそういう噂なら……」

大歓迎。と、いうのが綜一狼の本音だ。

そうすれば楓に近付く男も減るだろうし、楓も自分を少なからず意識してくれるはずだ。

「あ、分かってるよ。そんな噂、綜ちゃんはくだらなさすぎて相手にもしないって。でも、嫌な思いさせちゃうかもしれないから。先に謝っておくね」

「そうじゃなくて、そういう噂ならむしろ歓迎する」

照れもせず、真顔で綜一狼は楓に言葉を向ける。

楓はそんな綜一狼を一瞬キョトンとした顔で見上げ、数秒後に笑顔で口を開く。

「ありがとう。綜ちゃんてすごく優しい。嘘でもけっこう嬉しいかも」

「い、いや。だからそうじゃなくて……」

「ううん。分かってるよ。私も、少し綜ちゃんに甘えすぎてたと思うの。これからは、もっとしっかりするように心がけるからっ。じゃあ、先に行くね」

楓は踵を返すと、綜一狼の言葉を聞かずに走り去っていった。

「あいつは人の気も知らないで……。昔から、ちっとも変わっていない」

苛立ちを含んだ綜一狼の声は、もちろん楓には届かない。

落胆と苛立ちを含んだ表情で肩を落とし、世界最強の鈍さを持つ少女の走り去った方角を、綜一狼は暫くの間見つめていた。

好きな人は……（1）

ナイトウルフ
夜狼が現れてから数日。

毎日は何事も過ぎていた。

騒がしかった楓の周りも、この頃はやっと収まり始めた。

暫くは、綜一狼と一緒にいるだけで注目的ではあったものの、綜一狼は最初からそんなことはまったく気に止めていなかったし、元々順応力の高い楓はすぐにその環境になれてしまった。

時たま綜一狼のファンと名乗る女子達からの嫌がらせもあったのだが、なぜか妙に楓を気に入ったらしいルナが、それらをほとんど撃退してくれた。（小さな嫌がらせに関しては楓が、気が付かなかったというのもあるが）

「はあ。平和だー」

今日一日の授業が終了し、担任が教室から出て行くのを見届けて、楓は椅子に座ったままうーんと背伸びをする。

「なにそれ？　まるで、戦いか何かに行ってきたみたい」

楓の席の横で、壁に寄りかかかったルナがそれを聞いてクスクスと笑う。

「だって、ここのこと何かと騒がしかったでしょ？　今日は本当に久しぶりに静かに一日が終わりそうなんだもの」

「確かにね。今日はおかしな物が机に入っていたりしなかったし、徒党を組んだ女子が押しかけても来なかったし。廊下で足を引っ掛けられるってこともなかったわね」

ルナは指折り数えて、この数日で起きた出来事を一つ一つ言葉に出していく。

「え？ あの、足を引っ掛けられたのってワザと？」

「……今まで気が付いてなかったの？」

ルナは目を丸くする。

足を引っ掛けるのだって、一度や二度なら偶然で納得しなくもない。

が、すでにその行為は毎日のように繰り返されている。

どう考えても、普通の人なら故意のものだと気が付くだろう。

「だって、ちゃんと謝ってくれたし」

その言葉にルナは呆れ顔になる。

確かに、楓の足を引っ掛けていく人物は、皆謝りはする。

それはもう、嫌味のスパイスをたっぷりとまぶして。

「地味すぎて見えなかった」

だとか

「避けてくれるだろうと思ったのに（トロトロしてんじゃないわよ的に）」

など。

その度に、見事に倒れ込む楓を見下して、言葉を投げつけてくるのだ。

つまり、嫌味の前に「ごめんなさい」を付けているに過ぎない。

それらを、青アザをつけながらちっとも怒らないで、にっこり笑って「大丈夫よ」と返す楓を見て首をかしげていたが、なるほど。

本人はまったく気が付いていなかったというわけか。

「それにしても困ったものね。……そうだ。今度やられた

ら、嘉神に言いつけちゃえばいいのよ」

ルナはポンツと手を打つ。

「そんなこと出来ないよ」

楓はあやふやに笑い首を横に振る。

「どうして？」

「だって、私に嫌がらせしてくる人たちって、綜ちゃんを好きなんでしょ？ きつと綜ちゃんには、知られたくないだろうし。そもそも誤解をさせちゃったのは、私の所為でもあるし。だから、きちんと話して分かってもらおうようにがんばる」

「楓」

ルナは楓をギュツと抱きしめる。

いくら女の子といっても、ルナの背丈はそこいらの半端な男子よりも高い。

標準身長より低い楓は、ルナの中にすっぽりと収まる。

「ル、ルナ？」

楓は、ルナの突然の行動に驚いて声を上げる。

「あんなストレスの塊みたいな女の子たちのことまで気遣うなんて楓って、本当にいい子」

「別に、気を遣ったわけじゃなく、当然のことっていうか……」

それにしても、この頃よく人に抱きつかれている気がする。

自分はそんなに抱き心地がいいのだろうか？

などと思わず考えてしまっ。

「離れろっ」

それを止めたのは、教室に入り込んでいた綜一狼だった。
手こそ出さなかったが、その存在は妙な威圧感を発していた。

好きな人は……（2）

「あら？ スキンシップなのよ。これは。いいことですよ」

ニコニコと笑みを浮べてルナは反論する。

「限度がある。くそ。女だと思って安心してたんだが」

最後の方は独り言のようにブツブツと呟く。

「むう。誤解しないでよ。私はあなたのライバルじゃないですから。私には、他にちやあんと好きな人がいるんだから」

「ルナ、好きな人がいるの？」

そのの発言に楓は目を丸くする。

ルナの口からそんな話、一度も聞いたことがない。

「うん。素敵な人なのよ。綺麗で強くて優しくて。楓も会ったらきつと好きになるわ。だから会わせてあげない」

ルナは嬉しそうに言う。

「でも、そう言われるとますます会ってみたいな」

「だめ。それに、楓にだって、もう素敵な人がいるでしょ」

そう言っつてルナは、意味深な目で綜一狼を見る。

「え？ そんなのいないよ！」

両手をぶんぶん振って、楓は驚いたようにルナを見る。

「あれね。え？ 違うの？」

これはルナにも予想外の言葉だった。
思わず間の抜けた声になってしまう。

「あ、もかして綜ちゃんのこと言ってるの？」

綜一狼を見ているルナの視線に気が付き、楓はポニツと手を打つ。

「違うの？」

「だから、今流れてる噂はまったくの嘘なのよ。私と綜ちゃんはただの幼馴染み。それに、綜ちゃんには透子さんがいるもの。ねえ、綜ちゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

につこり笑顔で「ねえ」と同意を求められても、綜一狼には成す
すべもない。

恐るべき鈍さ。

恐るべき勘違いである。

綜一狼は思わず眩暈らしきものを覚え、額を押さえこむ。

「綜ちゃん？」

ダメージを与えた張本人は、キョトンとした顔をしている。

「楓」

「ん？」

「これだけは言っておく！ 俺と透子は、生徒会の役員同士という

だけの間柄なんだ。いわば、チームメイトだ」

綜一狼は楓の肩をガシリと掴んで、ゆっくりはつきりと真剣な眼差しを向けて言う。

「そうなの？」

そういえば、綜一狼の口からそう言った話を聞いたことはなかった。

けれど透子はいつも綜一狼のサポートをしていたし、二人は端から見れば絵に描いたような美男美女のカップル。

二人は付き合っているのだと、周りではもっぱらの噂だった。

「まさか、今までずっと勘違いしていたのか？」

「だって、綜ちゃんと透子さんてすごくお似合いだし。どっからどうみたって、そう見えるよ」

力説する楓に綜一狼は脱力する。

「楓。お前は俺のことをどう思ってるんだ？」

「ん？ 大好きよ」

綜一狼の意図など分からずに、まったく何の臆面もなくにっこり笑顔で答える楓。

「じゃあ、私は楓」

ルナがひょっこりと、楓の目の前に顔を出し自分を指し示す。

「もちろん、ルナも好きよ」

楓はルナにも同じように笑みを返す。

「南条さん。ちょっといい？」

教室の端の方に集まっている、女子たちが楓を呼んでいる。

「なに？」

その声に応じて楓は席を立つ。

「ちょっと行ってくるね」

「ああ」

楓の姿を見送ってから、綜一狼は小さくため息を付いた。

好きな人は……（3）

「ご愁傷様。同情するわ」

その場に残されたルナは、少なからずショックを受けているだろう。綜一狼に、クスクス笑いながら言葉をかける。

「分かっていることさ。あいつは、ああいうやつなんだよ」

楓の姿を目で追いながら、綜一狼は苦笑する。

楓をみる綜一狼の目は優しく温かい。

ほんの数日前から綜一狼と楓と知り合ったルナにだって一目瞭然な程、綜一狼は楓のことを特別視している。

それは、『幼馴染だから』という理由だけでは説明が出来ない程に。

それなのに、なぜ楓本人が気がつかないのか……。

鈍いのはもちろんだろうが、それにしても破滅的に鈍い。

（もしくは、無意識に気づかないフリをしている？）

そして、綜一狼も分かっているのかもしれない。

「どうして、ちゃんと好きだって言わないの？ 楓だって、あなたのことを嫌ってるわけじゃないみたいだし」

興味が頭をもたげて、ルナは綜一狼にストレートに尋ねる。

「……まだ時期じゃない」

幼馴染という関係を楓が一番大切に思っている今は、まだ自分の気持ちを伝えるべきではない。

綜一狼はもうずっと楓だけを見てきたのだ。それを今更焦るつもりはない。

「でも、早くしないと誰かに取られちゃうよ」

「大丈夫だ。楓に近付こうとしている奴らは大方片付けた」

綜一狼は爽やかな笑みを浮かべ、サラリと答える。

「あ、あなた、そんな勝手なことして。もしかしたら、その中に楓を本当に幸にしてくれる人がいたかもしれないのに」

一体、どうやって『片付けた』のか？

気になるところだが、さすがのルナも怖すぎて突っ込めない。

「俺以外に誰が楓を幸せに出来る？ 大体、俺に片付けられるような奴らの中に、楓を幸せに出来る奴なんているわけが無い」

(なんて自信なのかしら)

きつぱりと言い放つ綜一狼の姿にルナは言葉を失う。

確かに、綜一狼を倒さなければ、楓を幸せになど出来ないだろう。しかし、あまりにも高すぎる壁だ。

「でもね、嘉神。油断は禁物よ？ いつ、どんな相手が現れるか分からないんだから」

ニコニコと、けれど隙のない笑みを浮かべてルナは言う。

「それはどう言う……」
「何の話？」

戻ってきた楓が話し込んでいた二人の間に入る。

「大した話じゃないわよ。ね、嘉神」
「ああ」

楓が戻ってきた以上、話は続けられない。
ルナの言葉にひっかかるものを感じつつ、綜一狼はルナに同意して頷く。

「ふうん。あ、綜ちゃん。はい。これ」

楓は、綜一狼に紙袋を手渡す。

「何だ、これは？」
「あのね、さっきの時間調理実習でクッキーを作ったのね。それであの子達が、綜ちゃんにとって」

綜一狼が楓の促す方を見ると、先ほど楓を呼んだ四、五人の女子が、きやあきやあと言いながらこちらの方を見ている。
それを確認すると綜一狼は楓へと視線を戻す。

「楓はくれなのいか？」
「あ、うん。綜ちゃんと静ちゃんにあげようと思ってあるんだけど、でもそんなに食べきれないでしょ？ だから、綜ちゃんの分は春重さんに」
「だめだ」

間髪を入れず、綜一狼が楓の言葉をさえぎる。

「？」

楓は綜一狼をキョトンとした顔で見る。

綜一狼の表情はどことなく不機嫌そうに見える。

しかし、楓にはその理由が分からず首を傾げる。

と、綜一狼は無言でさきほど楓が帰ってきた方向へと歩き出した。

好きな人は……（４）

綜一狼が足を止めたのは、ずっと視線を向けてきている女子の団体の前だった。

楓にクッキーを託した少女たちだ。

先ほどまで、廊下まで響かんばかりの騒ぎようだった女子たちだったが、綜一狼が目の前に現れた途端にぴたりと話を止めてしまった。

何か口に出そうとする素振りはあるのだが、実際言葉が喉まで到達しないらしい。

驚きとも喜びともつかない表情で、綜一狼が口を開くのを、固唾を呑んで見守っている。

なにせ、嘉神綜一狼こと現生徒会長といえば、学園のカリスマ的存在。集会での演説でその姿を見るくらいなもの、面と向かって顔を付き合わせるなどない。

特に一年生にとっては、雲の上の存在。こんな機会、そうそうありはしない。

「これ、ありがとう」

自分を上目遣いに見る女子たちに向かって、綜一狼はにっこりと微笑みながら、手に持っている紙袋を指し示す。

「あ、いえっ！ そんな」

少女たちは赤くなりながら声を上擦らせる。

渡せただけでもラッキーなもので、まさか直接お礼を言われるなどとは思いつかなかったのだ。

「でも、気持ちだけで十分だから」

そう言って、綜一狼はクッキーの入った紙袋を少女たちに手渡す。

「甘いものはお嫌いでしたか？」

その中のいかにもリーダーらしき少女が綜一狼にそう尋ねる。

喜んだのもつかの間、返ってきたクッキーに少女たちは落胆の表情を隠せない。

「いや。そういうわけじゃないんだ。ただ、俺が貰ってもきつと食べきれないから。せっかくおいしそうなお菓子なのに、俺が独り占めするのはもったいないからね」

そう言いながら、極上の笑みを向ける。

少女たちはそれに魅入られただ、頷くことしか出来なかった。

(ま、こんなところだろうな)

その笑顔の裏で、

「厄介払いが出来てよかった」

などと思っているなど、少女たちは露ほども知らないのである。

「と、いうわけで今、俺の手元にはクッキーはない」

帰ってきた綜一狼が、楓に向かってそう言いながら手を差し出す。

「いうわけだって……」

涼しい顔している綜一狼を見て、楓はうーんと唸る。

「どうして？ せっかくあの子たちが綜ちゃんにつけてくれたのに」

「楓のが食べたいから」

きっぱりと綜一狼は答える。

そのあまりにも簡潔な答えに、楓はますます困惑して、幼馴染の顔をマジマジと見る。

「だって味は同じなんだよ？ それに、私のはちょっと焼きすぎちゃって固めだし、どちらかといえば、あの子達のほうがうまくてきたのに」

「そういう問題じゃない。俺は楓の作ったものだから食べたいんだよ」

「別に普通のクッキーだよ？ そんなに期待されるほど、おいしいもんじゃないんだけど……」

「楓のものなら何でもおいしいよ」

普通に考えれば、完璧な口説き文句である。

それなのに、楓には悲しいくらいに伝わらない。

「ね、ところで嘉神。ココに何しに来たの？」

心なしか肩を落としている綜一狼を憐れに思い、ルナは話題を変えろ。

「そつだよ。何か用事があったんでしょ？」

「あ、ああ。今日、一緒に帰らないかと思って。誘いに来たんだ」

綜一狼は気を取り直し楓に微笑みかける。

「うん。いいよ。じゃあ、ルナも一緒に……………」
「たまには二人きりで帰ろう」

ルナを一瞥し、綜一狼は即座に言い放つ。

その目は暗に『邪魔するなよ』と言っている。

「でも……………」

「遠慮しとくわ。たまには二人で帰るのもいいと思うわよ。楓」

意味が分かっている楓に、ルナはニッコリ笑って言う。

「協力感謝する」

楓を挟んで、綜一狼はルナに意味ありげに微笑む。

「どういたしまして。健闘を祈るわ」

そう言いながら親指を上に向けて、ルナは軽くウィンクしてみせる。

「えっと」

二人の間で交わされている会話の意味を、一人まったく理解していない楓だった。

好きな人は…… (5)

稔川学園の校門前。

楓は綜一狼を待っていた。

綜一狼は教室まで迎えに行くといったが、さすがにそれは辞退した。

せっかく下火になりかけているおかしな噂の数々が、また広まりかねない。

(本当にただ幼馴染ってだけなのにな)

昔から何の変わりも無い関係。

けれど、周りはそうは見えてくれない。

それが時々、煩わしくなってしまう。

こうして一緒に帰ることさえ、何だか気が引けてしまう。

次々と下校していく生徒たち。

黒塗りのベンツや高級外車が校門前に列をなしている。

もうすっかり見慣れた光景。楓は見るともなしに、それをぼんやりと見つめる。

「南条さん、帰るところ？」

ポケットとしていた楓の視界に、見慣れた人物の姿があった。

クラスメートの本田だった。

本田は、ニコニコと人懐っこい笑みを向けている。それにつられて楓も微笑みを返す。

「うん。本田君は車待ち？」

「見ての通り。でも、ここのところいつも遅いんだ。うちの運転手。明日もこんな調子なら辞めてもらおうかと思ってるんだけどね」

不機嫌そうに眉を顰め、眼鏡を指の先でたくし上げる。

そんな本田の様子に、楓は曖昧に笑う。

本田は楓のクラスの学級委員で秀才。

総合病院の一人息子である。

「稔川学園に通う生徒の典型的なお坊ちゃんだ。」

「あのさ。この間は悪かったな。クラスで馬鹿みたいに言いたい放題言ったりして。一度、ちゃんと謝らなきゃって思っていたんだ。クラスを代表して、謝るよ。本当にごめんな」

数日前、傷害事件のことで、教室が大騒ぎになったことを思い出す。

「うん。別にもう気にしてないから」

本田の言葉に慌てて首を振る。

「よかった。僕、南条さんに嫌われるのは耐えられそうにないから気にしてないわ」

ホッと胸を撫で下ろす本田に楓はにっこりと微笑む。

それを見て、本田は楓から視線を逸らして赤くなる。

「あ、あのさ。南条さんは嘉神生徒会長とはその、幼馴染ってだけだよな？」

「？ うん。あ、何だか私と綜ちゃん……生徒会長と変な噂が立ってるみたいだけど、あれは本当に誤解なのよ。私たちは本

当に、ただの幼馴染なの」

楓はおもいつきり力説する。

「そうか。そうだよなつ。生徒会長には、副会長の片桐先輩がいるし」

妙に明るい声で嬉しそうに、本田は声を大きくする。

「そうだ。今日、一緒に帰ら……」

「楓。待たせて悪かったな」

言いかけた本田の言葉を遮ったのは、その場に現れた綜一狼だった。

「ううん」

楓はにっこりと微笑む。

「ところで、そこにいるのは誰だ？」

チラリと本田を見て、綜一狼は目を細める。

そこに一瞬、微かな殺気が漂う。

本田はサーと青ざめる。

「同じクラスの本田君。迎えの車を待ってるっていつから、少し話をしていたの」

その殺気には気づかず、楓は屈託なく説明をする。

「へえ……『本田』ね。覚えておくよ」

にっこりと微笑みつつ、全体から発せられる何とも言えないオーラ。

言葉を発さなくても、その威圧感で自分が歓迎されていないのだと、本田は第六感で感じ取った。

「じゃあ。僕はこれで。さ、さようならっ」

そう言いながら、引きつった笑顔のまま、本田は少しずつ後ず去る。

「うん。また明日」

笑顔で手を振る楓につられて、ほんわかした思いで振り返りながら、隣りで睨みを効かす綜一狼の姿を認め、本田はギコチナク楓たちに背を向けると、その場から一目散に逃げ出し、いや、駆け出した。

「どうしたんだろ？ あんなに慌て……」

（ちょっと目を離すとすぐこれだ）

キョトンとしている楓を見ながら、綜一狼はため息を付かずにはいらなかった。

好きな人は……（6）

晴れ渡る空の下、楓は綜一狼と共に歩く。

「綜ちゃん、もう傷は平気？」

「ああ。元々大した怪我じゃないし、包帯も取れたしな」

そう言って、自分の肩を軽く叩いて見せる。

「よかった」

楓は安堵の息を付く。

「そういう楓はどうなんだよ」

綜一狼は楓が口を開く前に手を取る。

傷つけられた手の甲はもうほとんど完治しているが、やはりまだうっすらと傷跡が残っている。

「痛くないか？」

綜一狼は険しい顔で、壊れ物ののようにその傷跡に触れる。

「もう平気。料理も出来るようになったし。今度、夕飯も食べに来てね」

「ああ。もちろん。楽しみにしてる」

交わされる何気ない会話。

久しぶりに二人つきりになると、妙な気恥ずかしさがある。

(何でドキドキしてるんだろ……)

妙に綜一狼の存在を意識してしまう。おかしい感覚。落ち着かない。

「……」

「何だ？　どうかしたのか？」

黙りこんだ楓をみて、綜一狼は楓の顔を覗き込む。

ことのほか近くに綜一狼の顔があり、楓の鼓動は更に早鐘する。

「ううん。べ、別に」

綜一狼との距離をとろうとした楓の手を、綜一狼が掴み取る。

「綜ちゃん？」

「小さい頃を思い出すと思ってさ」

「あ……」

綜一狼の言葉に楓も思い出す。

それは、南条家に引き取られてすぐのことだ。

どうしても両親に会いたくて、コッソリと南条家を抜け出した。

夕暮れ時の、夜の帳が落ちかけている時だった。

まったく道も分からず、だけど何とかして、元の家に行きたくて、ひたすらに歩いていた。

『お前、何してんの？』

トボトボと歩いていた楓を見つけたのは、綜一狼だった。ものすごく驚いたような顔をされたのを、楓は今でもよく覚えている。

どうしてそんな顔をするのか？

なぜ、自分を知っているのか？

楓は、この時はまだ綜一狼が南条家の隣りに住んでいることを知らなかった。

「だれ？」

楓の問いに、綜一狼はひどく不機嫌な顔になった。

「お前こそ誰だよ」

「……楓」

「ふうん。俺は綜一狼」

そう言うと、綜一狼は楓の手を握り歩き出した。

「あ、あの……」

「こんな時間に子供が出歩くな。送ってやる」

綜一狼も十分子供なのだが、あまりのことに呆気にとられていた楓は、そんなことを言い返す余裕もなかった。

「ちょうど、このあたりだったよな」

「うん。それにしても、衝撃の出会いだったなあ」

「そうなのか？」

「だって、子供でしかも初対面なのに『送ってやる』だもん。今にして思えばお隣さんだから、ついでに連れ帰ってくれようとしたんだよね」

クスクスと笑う楓の手を、綜一狼はギュッと強く握る。

「綜ちゃん？」

「……あの後、大変だったよな。静輝に見つかって、誘拐犯だなんだった、いちゃもんつけられてさ」

見上げた綜一狼の表情が一瞬翳りを帯びた気がした。

だが、それは一瞬のことだった。

(見間違い?)

今はもう、いつものように優しい笑みを浮かべている。

「おっ、何だよ。デートかよ。お二人さん」

聞き覚えのある声に顔を上げると、いつの間にか、目の前に守屋が立っていた。

楓と綜一狼を見つけて、からかう様に言葉をかける。

「ああ。見ての通りだ。つまり、お前は間違いなく邪魔だということだ」

守屋の言葉にまったく動揺を見せることなく、綜一狼はきっぱり

と言いつつ。

「んだよっ。そういうことを言うかな普通。人がアクセクがんばって働いてるつーのに。やる気無くすよな。本当に」

素気無い綜一狼の言葉に、口を尖らせ守屋はブツクサと文句を垂れる。

「ワザワザそんなこと言いに来たのか？」

「俺はそんな暇じゃない。夜狼ナイトウルフの件を話に来たんだよ」

咳払いを一つしてから、表情をほんの少し引き締めて、綜一狼に言い放つ。

守屋の言葉に綜一狼の顔色が変わる。

「！ そういうことは先に言え」

楓に絡めていた手を離す。

「楓、悪いが先に帰ってくれるか？」

「でも……」

「すまない。この埋め合わせは必ずするから」

「姫さん、悪いな」

楓が言い終わる前に、綜一狼はそう言うと、足早に守屋と共に行ってしまった。

「どづいつことなのよ。一体」

取り残された楓は、その場に暫く佇んでいた。

キス×2(1)

「楓っ！」

次の日。

教室に入るなり、ルナが飛びつかんばかりの勢いで楓に走り寄ってきた。

綺麗なグリーンの瞳をキラキラとさせ、ニコニコと微笑んでいる。

「お、おはよう。ルナ」

そんなルナの様子に楓は思わずたじろく。

こういう時のルナは、何かおかしなことを考えている時なのだ。

「で、昨日はどうだった？」

「.....」

ルナの言葉に楓は黙り込む。

「あらら？ ご機嫌斜めね。何かあったの？」

頬を膨らませ、珍しく不機嫌な様子の楓のに、ルナは目を丸くする。

「綜ちゃんとは途中までしか一緒に帰ってないの。途中で用事が出来たからって、どこかに行っちゃったから」

「それで怒ってるんだ」

「別に怒ってないわよ。ただ、あんな唐突に行っちゃうんだもの。せめて理由くらい教えてくれたっていいと思うのよ。一緒に帰るの

も久しぶりのことだったんだし」

その上、意味深なあ会話。

今日の朝も聞いてはみたが、うまく話をはぐらかされてしまった。
ナイトウルフ
夜狼のことは、自分だって無関係ではないのだ。
それなのに、綜一狼は何も話してはくれない。

「ふうん。ちょっとは、進歩があったのかしら？」

「何か言った？」

呟きを漏らしたルナの言葉を聞き取り、楓は不信そうにルナを見る。

「何でもないわ。あつ！ そうだ。先生に教材運びを頼まれてるの。
場所がよく分からないから付き合ってくれる？」

そう言いながらも、ルナはすでに楓の腕を引っ張り、席を立たつ。

「うん。いいけど」

せっかちなルナに苦笑しつつ楓は教室を出る。

それは、中棟にさしかかった時だった。

「えっと、確か中棟の……」

廊下を歩く楓の足が止まる。

「どうしたの？ 楓」

「嘘……」

楓は数メートル先の人物を凝視する。

ザワリと心が騒いだ。

何気なしに瞳を向けた先に彼はいた。

あまりにも唐突であまりにも意外なことに、楓は一瞬その人が幻
なのではないかと思った。

楓から数十メートル離れた位置に、彼………聖が立っ
ていた。

青く美しい瞳の青年。

見間違っはすもない。

一度見ただけのはすなのに分かる。

彼なのだ。

一瞬目が合うと、聖はそのまま、楓とは反対方向へと歩き出す。

「楓？」

「ごめん。ルナ！ 先に行って」

楓は弾かれたようにその場から駆け出した。

キス×2(2)

アナタは誰？

そう聞きたかった。

今を逃してしまつたらきつと聞けない。

引き止めなければ。

その思いだけで、楓は聖を追いかけていた。

中棟を抜け大ホールに入る。

ホールは天井も壁もガラス張りで、円形の巨大な温室のようになっている。

授業の始まりも近い今の時間は、そこには楓と聖以外誰の姿もない。

「お願い、待って」

やっと追いついた楓は、背を向ける聖に言葉を投げかける。

暖かな日差しがその場一帯を明るく照らしている。

眩しすぎるその光に目を細めながら、楓は聖の姿を一心に見つめる。

「楓」

振り向いた聖が楓の名を呼ぶ。

その声には、愛しさと温かさが滲み出している気がした。

温かな笑み。

数日前に大型モニターでみた聖とは、かなり雰囲気の違い、楓は戸惑う。

「ヒジリ?」

胸が締め付けられる気がした。

この笑顔を知っていると思う。

前にもこの笑顔に出会ったことがある。

詳しいことは何一つ思い出せないのに、それだけは妙に確信が持てた。

「教えて……あなたは誰? どうして私を知ってるの?」

その問いに聖は小さく頭を振る。

「楓。僕は忠告しに来たんだ。何も思い出さないで。いや、思い出そうとなんて思わないで」

「どうして?」

その問いに、聖はもう一度小さく頭を振る。

楓を見るブルーアイの瞳は、優しくけれど悲しげだった。

「それから……嘉神綜一狼から離れた方がいい」

「え? どうして綜ちゃんと……」

心が大きな音を立てる。

なぜここで綜一狼の名が出てくるのか。

楓は混乱する。

「君が不幸になってしまうから」

「不幸になる?」

ますます意味が分からない。

「全然分からないよ。どうしてそんなこと言うの？ ヒジリは一体何を知っているの？」

「そして、もう二度と僕に近付いてはいけない……。いやっ。今も近づくべきじゃなかったんだ……。お願いだ。楓。すぐに僕から離れてっ。ここからすぐに……」

言葉は最後まで続かず、小さなうめき声に変わる。

まるで操り人形の糸が切れたように、聖はその場に座り込む。

「ヒジリ！」

楓は訳が分からず、苦しんでいる聖に手を差し伸べる。

「いいからっ。逃げ……」

搾り出すような聖の声。

どう見ても尋常ではない。

「待ってて。誰か呼んでくるからっ」

駆け出そうとした楓だったが、唐突に腕を掴まれ引き止められる。

「……………その必要はない」

楓の腕を掴んだのは、紛れも無く聖だった。

先ほどの苦しみが嘘のように、落ち着き払った静かな声。

「痛っ！」

徐々に徐々に、楓を掴む聖の手に力がこもる。
その痛みに楓は顔を歪める。

「逃げろ……か。逃げられては困る。せっかくこうして機会を作ってくれたんだ。もう少し、一緒に居てくれよ」

顔を上げた聖の瞳を見て、体にゾクリとした感覚が突き抜けた。

キス×2(3)

コノ人ハ誰？

明らかに先ほどとは違う。

まるで別人だ。

同じ顔。

同じ声のはずなのに、今目の前にいるのはまったくの別人。

「は、離してっ」

振りほどこうとしたものの、聖の手は腕に食い込むように強くビクともしない。

「ひどく嫌われたものだな。そんなにも、俺とあいつは違うか？」

その目が小さな陰りを宿す。

暗い沼底を思わせる孤独と憤りを秘めた瞳。

「あなたは一体……」

楓は混乱する。

明らかに違う。

違いすぎる。

「聖。そう。俺が聖だ」

楓に……というよりは、自分自身に言い聞かせるかのような言葉。

(違う。この人はヒジリじゃない)

少なくとも、自分が懐かしいと感じたその人ではない。

「離して」

強く掴まれたその腕が痛くて、楓は眉を顰めてもう一度言い放つ。
その声に、聖は座り込んだまま楓を見上げる。

「お前はまたそうやって逃げるのか？」

「え？」

青い聖の瞳が、貫くように楓を射抜く。

「思い出せ。すべての鍵はお前自身にある」

楓から手を離し、聖はゆっくりとその場から立ち上がる。

そんな聖を楓は無言のまま見つめる。

「分からないのならそれでもいい。けれど、これだけは覚えておけ。
俺はお前を逃しはしない。忘れさせてなどやらない」

「どうして……」

投げかけた言葉はそこで途切れる。

聖の唇が楓の言葉を封じたのだ。

甘やかさの欠片もない、まるで何かの儀式のように機械的な口付け。

またも強く掴まれた腕が痛い。

触れた唇と交わる視線。

心を見透かすようなその眼差しから目が逸らせない。

『あなたはヒジリじゃない！ あれは、ヒジリのなんだからっ』

小さな少女の声が脳裏を過ぎる。

『大好きだよ。楓。だから……』

青い青い空のように澄んだ瞳を知っている。

忘れたくないと強く想った。

だけど、その想いさえ忘れてしまった。

『楓、俺は……』

そして、いつも何かに怯えているかのように、孤独で寂しいこの瞳も知っている。

深い深い海のような冷たい青い瞳。

ジリリリリ……。

授業始まりの合図であるベルの音が鳴り響いた。

その音に我に返り、楓は弾かれたように聖から唇を離す。

そんな楓の腕を引き寄せ、耳元でもう一度囁く。

「すぐに迎えに来る。待っている」

心がコトリと音を立てる。

何が起きたのか何を言っているのか理解できない。

頭の中が真っ白だ。

楓は体中の力が抜けてその場に座り込む。

「あなたは誰？」

その場に取り残された楓は、瞳を閉じて呟きを零した。

キス×2(4)

放課後。

生徒会室の前で、楓は行ったり来たりを繰り返す。

聖が現れたこと。

それを綜一狼に告げるべきかどうか迷っていた。

綜一狼はこのところ、何かしらの雑務に追われている。

今日も、生徒会の仕事で遅くまで残るといふ話を聞いていた。

(ここで逃げちゃだめだ。綜ちゃんはきつと、何か知ってるはずだもの)

「し、失礼します」

楓は決心して、ゆっくりと生徒会室に入る。

長い机が並ぶ大部屋。

そこに人の姿はない。

ただその場に置かれたホワイトボードには、

『放課後の生徒会会議は視聴覚室で』

と書かれている。

つまり今は、視聴覚室で会議中ということになる。

「いないんだ」

拍子抜けして楓は小さく呟き、息を吐き出す。

聖が言っていた言葉。

『嘉神綜一狼から離れた方がいい……』

なぜ突然にそんなことを言うのだろうか？

一体どういう意味なのか。

まったく分からない。

そして、思い出していない『何か』

記憶を過去へ過去へと遡らせる。

けれど記憶は徐々に途切れ途切れになっていく。

暗闇。

月明かり。

静寂。

そして……血の色。

頭がズキズキと痛み、胸の鼓動が早まる。

忘れたくない訳じゃない。

けれど、思い出すにはあまりにもつらい。

思い出を手繰り寄せれば、最後に行き着くのは底なしの悪夢だから。
ら。

「やっぱり逃げてるのかな」

悲しい過去を、無意識に忘れようとしているのかもしれない。

楓は目を閉じてゆっくりと深呼吸をする。

遠くから、部活動に勤しむ生徒の声が微かに聞こえてくる。

風のザワメキと鳥の声。

穏やかな日常。

気持ち徐徐に落ち着いていく。

微かに頬を掠めた風が優しい。

「風？」

誰もいないはずの部屋の窓が開いている。

何となく気になって、楓は奥の部屋に入る。

生徒会室は吹き抜けで、二部屋に分かれている。

入り口近くの会議用の個室と、奥の生徒会長席と諸々の資料保管の空間。

風は奥の部屋から来ている。

きっと誰かが閉め忘れたのだろう。

何気なしに入り込んだ部屋。

入った瞬間、楓は思わず声を上げそうになり、慌てて口元を抑える。

（な、何でいるの？）

そこには、いないとばかり思っていた綜一狼の姿があった。

キス×2(5)

(眠ってる?)

生徒会長用の座席に突っ伏した綜一狼は、双方の瞳が閉じている。楓が部屋の中に入り込んでもピクリとも反応せず、規則正しい寝息を立てている。

そんな綜一狼を前に、楓はあたふたと狼狽する。

心の準備が出来ていない。

一度はこのままユーターンしてしまおうかと踵を返す。

だが、一向に目覚める気配がない綜一狼の様子に、楓は恐る恐る綜一狼に近付く。

(うわぁ)

綜一狼の顔を覗き込み、楓は思わず感嘆する。

いつもは決して見せることのないあどけない寝顔。

無防備に穏やかな寝息を立てるその姿にドキリとする。

暫くの間、思わず見入ってしまう。

「ん・・・・・・・・」

観察をしていたその時、綜一狼が小さく声を上げる。

起きるのかと、楓は思わず身構える。

だが、綜一狼はそのまま、すぐに規則正しい寝息を立て始めた。

(疲れてるのかな?)

当たり前かもしれない。

綜一狼が暇そうにしているところなんて見たことがない。
楓はソツと綜一狼に手を延ばし髪に触れる。

「無理しないで」

そつと呟く。

綜一狼は人に頼らない。

弱さを見せたことがない。

それをこの頃は、少し寂しいと思う。

「誰かいるの？」

澄んだよく通る声。

(えっ、透子さん)

別にやましいことは何もない。

そのはずなのだが、楓は反射的に綜一狼から離れ、書庫の後ろに身を隠す。

「綜一狼」

間一髪のところ、入れ替わるように透子はその場に姿を現す。

綜一狼の姿を見つけて透子は苦笑する。

「起きて。綜一狼」

「……何だ。透子か」

そつと囁いた透子の声で、綜一狼はやっと目を覚ます。

「何だとはご挨拶ね。もう会議が始まるのよ」

透子は髪を掻き揚げ呆れたように言い放つ。

「少し寝ていた。……それで夢を見た」

「夢？」

「天使に抱きしめられている夢。すごく気持ちが悪かったんだけどな」

綜一狼は小さく笑う。

「……………」

カタリ。

綜一狼が座る椅子が、重圧を受けて小さく音を立てる。
小さな沈黙。

その場面を見て、楓は目を見開く。

重なり合う二つの影。

綜一狼の体に絡みつく細く白い腕。

美しい長い髪も綜一狼の体に降り注ぐ。

柔らかく温かそうな唇が、綜一狼の唇に触れている。

綜一狼は、それを受け入れることも拒むこともしない。

ただ、美しいその少女との触れ合いを他人事のように見つめてい
る。

楓は視線を逸らし、その場に座り込む。

「……………夢の天使なんか役立たずだね。私なら、あなたのだ

めに、天使にでも悪魔にでもなれるのよ」

唇を離すと、透子は綜一狼を真っ直ぐ見つめ言葉を紡ぐ。

「会議なんだろ？」

自分から身を離れた透子に、綜一狼は素っ気無く言い放つ。

透子は一瞬寂しそうな表情を作り、けれどすぐに微笑みを浮かべる。

「十分後に始めます」

それだけ言うと、透子は身を翻しその場を後にした。

キス×2(6)

その場面を目撃してしまった楓は、その場に座り込んでしまう。心臓がドキドキと音を立てている。

ずっと、綜一狼は透子と付き合っている。

そう思っていた。

だから、キスをしたって何の不思議もないはずだ。

そう思っているのに、心の中がモヤモヤする。

嫌な感じだ。

自分の中で発生した黒くて苦い思い。

それを持って余し楓はひどく戸惑う。

書庫の隅に座り込んだまま立ち上がれない。

息をすることさえ苦しいほど胸が締め付けられている。

妙に居た堪れない。

すぐにここを出よう。

混乱する頭の中、楓は思う。

綜一狼のいたデスクを覗き込む。

そこに綜一狼の姿はない。

楓はヨロヨロと立ち上がる。

その時だった。

「そこで何をしてるんだ？」

真後ろから声が降り注ぐ。

「盗み見なんて感心しないな」

どうやらいつからか、楓の存在には気が付いていたらしい。

覚悟を決めて楓は振り向く。

その姿を見止めて、綜一狼は驚いたように目を見開く。
まさか、隠れていたのが楓とは思っていなかったらしい。

「見る、つもりはなかったの。ごめんなさい」

立ち尽くす綜一狼を尻目に、平坦な声を出し楓は深く頭を下げる。
喉がカラカラに渴いているみたいだった。
知らず知らずのうちに声が硬くなっていた。

「見て、いたのか？」

綜一狼の問いに楓はコックリと頷く。

「誤解するなよ。今のは……」

「平気だよ。好きな人とキスするのは普通のことだよ。私だって子供じゃないもの。そのくらい分かってるから」

楓は何とか笑みを作る。

「違うんだ。あれはそういうんじゃない」

綜一狼の言葉が空しく楓の耳に届く。

「誤魔化さなくてもいいってば。私、誰にも言わない。分かったことだし」

(これじゃあ怒ってるみたいだ)

そう思っても、声が強張るのを止められない。

言葉も止めることが出来ない。

「綜ちゃんと透子さんはすごくお似合いだし、透子さんなら、綜ちゃんの事……」

「楓ッ。だから違っ」

「聖に会ったの」

言いかけた綜一狼の言葉を遮り、楓は静かに言う。

「なに？」

綜一狼の顔色がサツと変わる。

「聖は私に『何か』を思い出させて言ったわ。それが何なのか、私にはまだ分からないけど」

「他には？」

「それから……」

不意に聖に唇を奪われたことを思い出す。

だが、楓はブンブンと首を振りその場面を振り払う。

「綜ちゃんとは一緒に居ちゃ行けないって」

「……」

「綜ちゃんは、あの人のことを知っているの？ ううん。もしかして私のことも何か知ってるんじゃないの？」

綜一狼は黙り込む。

「隠さないで教えて」

「……ああ。知っている。お前が、『南条』になる前から、

俺は楓を知っている」

ため息を付くように、綜一狼は言葉を吐き出した。

キス×2(7)

「うそ……」

綜一狼の告白は思いがけないものだった。

「本当だ。やっぱり覚えていない……か」

どこか自嘲気味に、綜一狼は顔を歪める。

「そ、それって、いつのことなの？」

思わず声が上がする。

知りたいと思っていた過去。

その一片に綜一狼もいる。

そのことに、楓は大きな衝撃を受ける。

「教えない」

自分を驚きの眼差しで見ている楓に向かって、綜一狼はきっぱり
と言いつつ。

「え？」

一瞬間き違いだと思った。

楓は綜一狼の言葉に目が点になる。

「楓は覚えてないんだろ？ だったら、それはそれでいいんじゃないか？」

冷たい口調で、綜一狼は投げやりに言葉を吐き出す。

「何でそんなこと言うの？ 知ってるなら教えてくれてもいいじゃない」

開き直ったかのような綜一狼の態度に、楓はムツとする。

「嫌だ。知りたいなら、自分で思い出してみろよ」

まるで小さな子供が拗ねたようにそっぽを向く。その様子に、楓は呆気に取られる。

「何でそんな意地悪言うの？」

理不尽なものいい。

楓も思わず感情的になって、けんか腰になってしまふ。

「思い出せない過去なら、無理して思い出すことない。そう思うから」

「私は、思い出したいよ。どんなことでもいいから。聖とだって…」

「なんで、楓はあいつにこだわるんだ？」

楓の言葉を遮り、綜一狼は不満気に言葉を吐き出す。

「そんなの私が知りたいくらいだよ。あの人が私にとって何なのか。でも、思い出せないんだものしょうがないじゃないっ」

聖をみると、何かを思い出せる気がするのだ。

それが何なのか知りたい。
そう思うことは、自然なことのはずなのに。
今日の綜一狼は、妙につっかかってくる。

「……俺のことは忘れてるくせに、あいつのことは気になるのかよ」
「え？ 今なんて言ったの？」

自分の考えに没頭していた楓は、口の中で転がすような綜一狼のぼやきを聞き逃す。

「別に。ともかく、俺の口から言うことは何も無い」
「……」

過去へ繋がる糸口なのに。

それなのに、綜一狼は何も話してはくれない。
他には何の手がかりもない。

唯一、自分と聖を繋げるものは空の涙。
そう。聖の一番の目的は空の涙のはずだ。

「分かったわ。私、空の涙を見つけ出す」
「はっ？ どうしてそうなるんだ」

唐突に出た楓の言葉に、綜一狼は間の抜けた顔をする。

「綜ちゃんも空の涙を探してるんでしょ？ だったら、もし私が先」
空の涙を見つけ出したら、綜ちゃんが知ってること全部教えて

綜一狼に挑むように視線を向ける。

「楓には無理だ」

楓の視線を受けてとり、少しばかり冷静になった綜一狼は、即座に言い放つ。

「無理かどうかなんて、やってみないと分からないじゃない」

考えてみれば、今まで何をするにも綜一狼の力を借りてきたのだ。自分は綜一狼に依存している。

綜一狼と透子の決定的な場面を目撃してしまった今、これ以上、

綜一狼には甘えられない。

そう痛感した。

「綜ちゃんが何と言っても私は探すから」

楓はいつになく強い口調で言い放つ。

「……勝手にしろ」

綜一狼は投げやりに言い放つ。

「絶対見つけるから」

それだけ言うと、楓は生徒会室を後にした。

宝探しの始まり(1)

何だか大変なことになった。

楓はため息を付く。

自分が言い出したにしろ、相手はあの嘉神綜一狼。
史上最強の相手を敵に回したものだ。

(あんなこと言つつもりじゃなかったのに)

綜一狼とあんな風に言い争ったのは初めてのことだ。

「楓！ もうつ。またボーとしてる」

楓の席に来たルナが口を尖らせる。

「あ、ルナ。どうしたの？」

「それはこっちの台詞。さっきから呼んでたのに、ちっとも気が付いてくれないし」

「ごめん……」

「まあ、いいわ。それより！ おもしろいもの見つけたの。今日の放課後、コンピュータールームに来て」

途端に楽しそうにルナは言う。

「なあに？」

「それは来てからのお楽しみ」

首を傾げる楓に、ルナは口元に人差し指を当ててウィンクをしてみせる。

(何だろ一体?)

どこか含みのある笑いが気になるところだが、今の楓にはそれに気が付く余裕はなかった。

「あ、静ちゃん」

放課後。

楓は捜し人を廊下の片隅に見つける。

隣りには綜一狼もいる。

一緒に何やら熱心に話しこんでいたが、楓の姿にピタリと話をやめる。

「どうした、楓」

「あのね、今日一緒に帰ろうって言ってたでしょ？」

綜一狼の存在に妙に居心地の悪いものを感じながら、楓は静揮に言葉をかける。

「悪い、楓。今日は一緒に帰れなくなっちゃった」

楓より早く静揮が口を開く。

「えっ？」

「これから寄るところがあるんだ。遅くまでかかりそうだし夕飯はいらなから、楓から春重さんに言っついてくれるか？」

髪の毛をくしゃくしゃと混ぜ返しながら静揮はバツが悪そうに言う。

「それって綜ちゃんも？」

隣りにいる綜一狼に視線を向ける。

「……ああ」

綜一狼は短く答える。

「そうなんだ」

妙な気まずさを感じて、楓は綜一狼からすぐに視線を外す。

「そういうわけだから、悪いな」

「うん。でも、二人一緒なんて珍しいね」

基本的に灰汁の強い二人だから、滅多なことでは行動をともにしないのに。

「まあ、何だ。男同士で色々とだな……」

もごもごと妙に言い訳をする静揮。

「余計なことは言つな」

それを遮り、綜一狼は静輝にそう言いながら軽く睨む。

「行くぞ。静揮」

「あ、おいつ。じゃあ、楓は早く帰れ」

サツサと歩き出した綜一狼の後を、静揮が慌てて追いかける。
二人が去り取り残された楓は妙な疎外感を感じる。
素っ気無い綜一狼の態度。
楓は小さく胸が痛むのを感じた。

宝探しの始まり（2）

「楓、楓。早くっ」

コンピュータ室。

一足早く来ていたルナが、楓の姿を見つけて手招きをする。ズラリと並んだ最新式のパソコン。

その真ん中ら辺の席を陣取って、ルナは一つのパソコンの画面を開いている。

画面を見たまま、カチカチとリズムカルな音を立てながら、長い指は次々にキーを弾いていく。

相当手馴れている仕草だ。

「ね、これ見て」

暫くルナの手さばきに見入っていた楓だったが、その言葉にパソコンの画面を覗き込む。

画面には、稔川学園の校章がくつきりと映し出されている。太陽と月をモチーフにしたシンプルな印。なんの変哲もない、見慣れた形。

だが、その色は目に痛いほどの赤。

「これって」

楓は思わず画面を凝視する。

パソコンの中に映る赤い校章マーク。

それは特別な意味がある。

通称シークレットメール。

生徒会が、極一部の生徒にだけ流す情報。

個人のことであつたり、学園の秘密事項であつたりと、使われる目的はさまざまであるが、ともかく相当なことがなければ使われな
いものである。

楓もその存在を聞いて知ってはいたが、見るのははじめてだ。
それが、目の前の画面にははつきりと映し出されている。

「な、なんで静ちゃんのメールパスワードなんて知ってるの！」

個人情報厳守のこの学校では、メールを開くには一人に一つのパスワードを入力しなければならない。

それは他の生徒はもちろん教師ですら知らない、自分だけの暗証番号だ。

それを他人に教えるということはありえない。

それなのに、目の前の画面に映し出されているのは、紛れもなく
静揮宛のメールだった。

「アクセスしてみたらでちゃった」

悪びれる様子もなく、にっこり笑顔で答えるルナ。

「だ、だめだよ。早く、消さなきゃっ」

こんなことが知れたら大変なことになる。

不正なアクセスなど、停学どころの話じゃない。

楓はあたふたとパニック状態になる。

「いいから、いいから」

何がいいのか分からないが、そんな楓をルナはやんわりと押しとどめる。

「それよりもこれを見てよ」

「だからっ、見ちゃだめなんだってばー」

クルリと回れ右をして、楓は困ったように言う。

「ムー」

一向に画面を見ようとしない楓に、ルナは不満げな視線を向ける。そうしてから、大げさにポンツと手を打つ。

「それじゃあ、読んであげる」

幸いにも、コンピュータ室にいるのは、楓とルナの二人だけ。防音効果ばつちりのこの室内ならば、多少の大声も問題ない。

「だからね、そういう問題じゃ……」

「南条静揮様。あなたをトレジャーハント宝探しにご招待致します。学園内にある『スカイティア空の涙』を探し……」

そこまで淡々とルナが呼んだ時、楓は思わず画面を振り返る。

『学園内にある『スカイティア空の涙』を探し出してください。尚、見つけ出した方への報酬は望みのままに……。屈強なるあなたのご参加をお待ちしています。生徒会』

そこまでを一気に読んだ。

「ね、おもしろい話でしょ？ あ、誤解しないでね。別に見ようと思ってみたわけじゃないのよ。たまたま、本当に偶然見ちゃったの。」

せつかくだし、楓にも教えてあげようかなーって思っただけ」

言い訳を始めたルナだったが、すでに楓の耳には入っていない。

よそよそしい雰囲気の二人。

やっとその理由が分かった。

一週間後とは書いてあるが、送られたのは前の週。

つまり、今日がその『宝探し』トレジャーハントの日なのだ。

宝探しの始まり(3)

「静ちゃん、こんな話一言もしてなかったのに」

綜一狼のことだ。

何か行動を起こすだろうとは思っていた。

しかし、これほど大掛かりなものになるとは。

楓の予想を超えていた。

「そりゃあそうよ。これが送られたのは、それぞれに長けた生徒数十人だけ。トップシークレット扱いのメールみたいだし。あ、これもたまたま見ちゃっただけよ」

どこでどう、そんなものをたまたま見るのか？

しかし、楓にはそんな突っ込みを入れる余裕もない。

聖がほしがっている『スカイティア空の涙』

綜一狼はそれを本気で探し始めるつもりだ。

自分の知らない間に、事は動きだしていたのだ。

「綜ちゃんてばずるい」

思わず楓は呟く。

確かに一人で探すとは言っていなかったが、これじゃあどう考えても楓に分が悪い。

「そう思うでしょ？ だから、私たちも参加してみない？」

唐突なルナの提案。

「でも、私たちは招待されてないわけだし。絶対に中に入れてくれないと思う」

綜一狼のことだ。

有無を言わず、家に帰らされるのは目に見えている。

「最初から中にいればいいじゃない」

いたずらっこのような表情でルナはにっこりと微笑む。

「無理だよ。生徒の出入りも、認証カードで管理されているのよ？
構内に残ってるのなんてバレバレだよ」

「うんうん。それは大丈夫。そういうシステム系って、私、いじるの大得意なの」

何でもないことのように、すんなりとルナは言い放つ。

「そ、それって校則違反じゃないの？」

「違うわよ。だって、校則にデータの改ざん禁止なんてなかったもの。それに、『得意』って、言ったでしょ？ バレないから大丈夫よ」

「だけどそんなこと……」

「出来ない」と言いかけて、楓は言葉を止める。

いつもの楓なら、絶対に乗らない話だ。

「いいじゃない。別に、誰かの邪魔をするわけじゃないもの」
「うん。そうだよね。やってみようか」

こうなったら駄目で元々だ。

楓はルナの言葉に頷く。

やってみなきゃ分からないと言ったのは、楓自身なのだ。
こうなったら、何が何でも空スカイティアの涙を見つけ出すのだ。

「そうこなくっちゃ。隠れる場所はいい所を知ってるの」

楓の返事に、はりきった様子でルナは立ち上がる。

(私に出来るのかな?)

こんな無謀な挑戦ははじめてのことだ。

ドキドキと鼓動が高鳴る。

緊張とともに、どこかワクワクする楓だった。

宝探しの始まり(4)

「うわぁ。すごいねー」

楓は感嘆の声を発する。

「でしょ？　ここって絶対、上から見たほうが綺麗なのよ」

ルナは答える。

ライトに照らし出された学園が一望できる。

あんなにも大きな学園も、今はまるで小さな箱庭だ。

「私、上からこんな風に学園を見下ろしたのって始めてかも」

その光景に暫くの間目を奪われる。

「ここがね、一番眺めがいいの。学園全体が見渡せるでしょ？」

「でも、よくこんな場所知ってたね」

「うふふ」

楓の言葉にルナは笑って答える。

「ここが、この学園で一番高い場所なのよ。唯一、機械仕掛けじゃないし、滅多に人も入ってこない。絶好の隠れ場所。今日はすべてのセキリユティを一時的に解除してあるってメールに書いてあったし、学園の敷地内に入り込めばこっちのものだわ」

「うん。それにしても時計塔の中に入れるなんて、全然しらなかった」

楓たちがいる場所。

それは、学園の片隅にある時計塔。

「塔」というだけあって、それは巨大でかなり高い。ビル五十階分くらいの高さはありそうである。

レンガ造りの円筒形。

中に入り、最上階まではひたすら階段。

しかし、肝心の時計はもう何十年も前から止まったままで、ほとんどアンティークと化している。

妙な存在感を持ちつつも、ルナの言う通り滅多なことでは人は近付かない。

楓たちは時計塔の最上階、ちょうど、時計の十一と十二のローマ数字の間にある、くりぬき窓から、外を見下ろしていた。

そこからは、空の星も月も近く、地上はひどく遠く感じる。まるでぼつかりと空に浮き上がったような感覚になる。

「ルナってば本当に何でも知ってるのね」

「まあね。それにしても、秘密の『宝探し』トレジャーハントなんてこの学校も変わってるわ。おもしろいからいいんだけど」

心地よい風に身を任せながら、ルナは髪の毛を掻き揚げる。

「綜ちゃんの考えることだから」

楓は小さく笑う。

綜一狼のやることにはいつも驚かされる。

突拍子が無く強引。

けれど、そのやり方が間違っているわけじゃない。ちゃんと筋の通った考えがある。

今回のこともそうだ。

プロを雇うのは簡単だが、綜一狼はあくまで自分のテリトリー内で見つけ出したいのだ。

だから、稔川学園の生徒会長の範囲内で、一般の生徒たちの力を借りて『空の涙』スカイティアを探し出そうとしている。

しかも、一般の生徒は多分、暇つぶしのゲームくらいにしか思っていないだろう。

金と時間を有り余らせている上層階級の生徒が、こんな話を無視するはずがないのだ。

生徒たちに事がばれることはなく協力させる。

何とも奇抜なアイディアである。

「ホント、綜ちゃんにはすごいよ」

「ね、ずーっと、気になってたんだけど、楓って嘉神のこと好きじゃないの。あ、もちろん男としてよ」

ニコツと笑い、ルナは楓の顔を覗き込む。

「へっ?」

唐突な質問に楓は答えに詰まる。

「私ね、二人は恋人同士だって思ってたの」

ルナの言葉に、楓は「違う違う」と思いつきり首を振る。

「だって綜ちゃんは、私の幼馴染だけど、本当の家族みたいで……恋とかとは違うと思うな」

答えはあやふや。

好きかと聞かれれば、もちろん好き。
でも、恋をしているのかと聞かれれば頷けない。

「恋じゃないの？」

「じゃない……と思う。それにっ！ 私なんか、綜ちゃんと釣り合
わないもの」

綜一狼と透子のキスシーンが頭を過ぎり楓は苦笑する。
綜一狼に似合うのは、透子のように綺麗で聡明な女性だ。
そう思うのに、なぜか胸がズキズキと痛い。

「関係ないよ」

楓の答えを聞き小さく笑い、ルナは静かに言葉を吐く。

「え？」

その様子がいつもよりずっと静かで真剣で楓はハツとする。

「どんな人でも、好きになる時は好きになっちゃうのよ。それがど
んなに、見込みがなくても報われなくても、それでも好きになるの」

そう静かに言葉を紡ぎ、ルナは空の月を見上げる。

「ルナ？」

月明かりの下、ルナの表情がひどく寂しげで悲しそうで、けれど
楓には、そんなルナが今までのどんな時よりも美しく見えた。

「さて、そろそろ行こう」

窓から離れ、一度大きく背伸びをして、ルナはいつもの笑顔で楓を促す。

「あ、うん」

気が付けば、予定時間を少し回っている。

そろそろ、『宝探し』トレジャーハントも始まり出した頃だろう。

（好きになる時は好きになる）

その言葉が、楓の頭の中に呪文のように響いていた。

月と狼（1）

「それにしても、こんな広い場所から、どうやって見たこともないものを探し出せばいいんだろ？」

「そーいえば、そこまでは全然考えてなかったわ」

校舎内に足を踏み入れて、楓とルナは顔を見合わせる。

「入れば何とかなると思ってたんだけど」

ガラランツとしたその場をグルリと見て、ルナは肩を竦める。

「見渡す限り、誰もいないのね」

廊下や各部屋の電気は煌々と付いてはいるのだが、人の気配というものがまったくなくない。

いくら人数が少ないとはいえ、誰か一人くらいには、出くわしてもいいくらいのもんだろう。

「警備も手薄になってるし、本当にやる気があるのかしら？」

意気込んできただけに妙に拍子抜けしてしまう。

「うーん。どうしよう」

楓は考え込む。

この広い領域をすべて探すなど、一日かかったって無理だ。

「どこかごう、『どこだっ!』ていつとこるはないの?

・楓だったらどこに隠す?」

「私、だったら?」

ルナの言葉に思いをめぐらせる。

隠すのなら人のいない場所。

けれどココは学園だ。

そんな場所はそうそうあるはずも……。

「地下室とか?」

閃いたのは立ち入り禁止になっている地下室。

生徒はもちろん、教師ですら入ることを禁じられているその場所。

生徒会長である綜一狼でさえ、その中がどういう風になっているのか知らないと言う。

「地下?」

「うん。この学園には、地下室があるの。でも、地下はすごく嚴重に立ち入り禁止になっていて誰も入ったことがないのよ」

人の出入りを禁じている唯一の場所。

隠し場所としては最適なはずだ。

「そう。地下室……」

ルナは考え深げに言葉を零す。

「入り口は確か、中棟のはずれだっと思ったと思う。行こっ!」

「え、ええ」

ルナを促し、楓は歩き出した。

人のいない建物。

それは、とても無機質な空間。

生の息遣いが無い。

例えば光があってもひどく心細く寂しくなる。

そこに人が言む瞬間を知っていれば、なお更のことだ。

「何だか、静か過ぎて怖いね」

ゆっくりと歩きながら楓は隣りを歩くルナを見る。

「別に恐くはないわ。ただ、ひどく虚しいだけよ」

ルナの言葉に楓はフト思い出す。

小さな頃、たった一人で取り残されたときの事を。

すべてが息づき、生活の匂いがしたその場所。

それが、一瞬のうちに別の空間へと変わった。

一人取り残された恐怖。

しかしそれ以上に、その場に一人置き去りにされたという虚しさ。

その気持ちは、今もはつきりと思い出すことが出来る。

「ねえ。こここのところ流れてる噂があるんだけど、知ってる？」

ルナのその言葉に、楓はハッと我に返った。

月と狼(2)

(何でだろう……)

今になって、昔のことをよく思い出す。

両親のことはともかく、南条家に引き取られる前のことなど、ほとんども思い出しもしなかったのに。押し込めていた色々な感情や思いが、少しずつあふれ出すような感じ。

「楓？」

「あ、うん。えっと、何だっけ？」

「だから、噂よ。噂。何でも、この学園にはすごい宝があって、それを名のある泥棒が狙ってるんだって。案外それが空の涙スカイティアだったりしてね」

「い、いつのまにそんな噂が」

まさしくその通り。

しかしいつの間流れたのだろうか。というか誰が流したのか。もし学園の生徒が本当のことを知ったら大変なことになってしまう。

(そういえば、あの人は夜狼ナイトウルフなんだよね)

昔の自分を知っているだろう人。

聖。

『もう一度会いたい』という思いと、『会つのが怖い』というのが半分ずつ。

もう一度会えたなら、言葉を交わしたら思い出せそうな気がした。忘れていた過去を。

それが自分にとっていいことなのか、悪いことなのか分からない。だから不安になる。

聖がしたあの時のキスは、好きだからしたものじゃない。忘れさせないためのものだ。

まるで忘れられるのを恐れているようだった。

けれど、もう一人の聖は『思い出すな』と言う。

そして、綜一狼から離れると……。

嫌ダ。

例えどんな真実があろうと、綜一狼と離れるのは嫌だ。

自分にとって、綜一狼と静揮は誰よりも失いたくない人なのだ。

二人の居る場所が自分の居場所。

その場所がなくなってしまうたら、自分はきつとまた暗闇に飲み込まれてしまう。

孤独という暗闇に。

「でも、本当だったらおかしな話よね。いくら名門校だって言っても、どうして学園なんかに宝があるのかしら？」

「え？ うん。どうしてだろう……」

そう答えながら、楓の脳裏に何かが掠める。

遠い昔の記憶。

忘れていたこと。

思い出すべきこと。

思い出せ。

自分の中の何かが声を上げている。

(でも何を?)

混乱する。

どんなに記憶を探ってみても、答えらしきものは見つからない。

南条家に引き取られる前の自分。

それがひどくあやふや。

自分が思っていたよりも、もっと途切れ途切れではっきりとしない。

その事実には楓自身驚く。

頑なに蓋をしたのは、両親の『不運な死』について。

けれど、その前の事柄も思い出そうとすると、何かが邪魔をする。

何かが邪魔ヲスル。

「楓、大丈夫?」

「え?」

顔を上げると、ルナが心配そうに自分を覗き込んでいた。

「ボウツとした顔して、何言っても答えてくれないし。もしかして、具合悪い?」

「うつん。違うの。ごめんね。ちょっと考えごとをしていたから」

心底心配している様子のルナを見て、楓は慌ててブンブンと首を振る。

「行こうか」

「うつん。後、もう少しだよ」

長い特別室連がある廊下を突っ切って、角を曲がれば地下室への

入り口になる。

結局この場所に付くまで、誰一人とも会わなかった。

「これで、最初に会うのが嘉神だったりしたら笑えるわね」

曲がり角に差し掛かる時、ルナがクスリと笑う。

「笑えないわよ。綜ちゃんと静ちゃんに会ったら、きっと強制的に帰らされちゃうもの。せつかくここまで来たのに」

それに、どうしてここに居るのか、うまく誤魔化せる自信も無い。

「本当に見つかったら大変なことに……きゃっ」

「おっと、ごめん！」

角を曲がりかけたその時、楓は前から来た人物とぶつかる。顔が相手の胸の部分にあたり、鼻をおもいつきりぶつけてしまった。

「す、すみません。私もよそ見してたから」

少しジンジンと痛む鼻を押さえ込み、楓は相手を見上げる。

「あ」

「あ………」

「ああ！」

楓とルナと、ぶつかった相手。

三人は同時に声を発する。

「し、静ちゃんっ」

目の前にいるのは、紛れも無く静揮だった。

月と狼(3)

「な、何で楓がここに居るんだよっ」

数秒のフリーズののち、静揮はやっと上ずりながらも声を出す。

「あ、えっと」

何とも言葉が出てこない。

楓は困り果てて、自分の後ろにいるルナを振り返る。

「はれ？」

が、居るはずのそこにルナの姿はなかった。

「ごめーん。楓っ。後は任せましたっ！」

いつの間にも移動したのか、数メートル先に居るルナはそう言うって、につこり笑って軽くウィンクすると、走り去っていった。

「ルナの裏切り者」

「さて、楓。説明してもらおうか」

半べその楓の肩をガシリと掴み、静揮はニッと意地の悪い笑みを浮かべた。

その場に長い沈黙が降りる。

「説明」しようにも、まさか本人を目の前にして、不正なアクセスでシークレットメールを見たとも言えない。

人一倍嘘の下手な楓は、こういう場合は黙っていることしか出来ないのである。

「……」

「俺と綜一狼の話の聞きちまったんだな」

最初に沈黙を破ったのは静揮だった。

「えっと」

「まあ、あんなところでうっかり話しちまった俺も迂闊だったんだよな」

「どうやら静揮は誤解をしているらしい。」

しかし、楓にとっては都合のいい誤解だ。

これで、下手な嘘を付かなくてもよくなった。

楓はホッと胸を撫で下ろす。

「それにしてもだ。招待を受けてないのに、こんなところに来るのはルール違反だろ？ それになにより、セキリュティは完全解除されてるんだ。危ないだろう」

「でも、私だって関係している一人なんだよ。黙ってるなんてひどいよ」

そのことに関しては、楓だって文句を言いたいところである。

「教えたら来たがっただろ」

「もちろん」

楓の答えに、静揮は大きなため息を付く。

「お願い。私も参加させて。静ちゃんたちの邪魔はしないようにするから。私は私で探すから」

縋り付くように、楓は真剣な眼差しを静揮に向ける。

ここまで来て帰るのは絶対に嫌だ。

「……」

静揮は暫く無言で楓を見る。

「……たくつ。そんな顔されてダメだなんて、俺が言えるわけ無いだろーが」

軽く楓の頭を小突いて静揮は苦笑する。

「ありがとう！ 静ちゃん」

「ただし、絶対に俺から離れるなよ。セキュリティが解除されちまつてるんだ。どんな奴が紛れているか、分かったもんじゃない」

「うん」

ナイトウルフ
夜狼の聖。

もしかしたら、彼も来ているのかもしれない。

そう思うと小さく胸が疼く。

「それと、綜一狼には見つからないように気を付ける」

「分かってる」

「あいつ、勘もけっこういいからなあ」

あの綜一狼にどこまでバレずにいられのか。
静揮は前途に不安を覚えるのだった。

月と狼（4）

女は月夜の下、歌を口ずさむ。

遠い昔に流行り、そして廃れ捨てられた歌。

しかし、女はその歌が好きだった。

昔と変わらず。

変わることなく。

「予定が少し狂ってしまったわ」

女は歌を止め、呟くように言葉を吐く。

サワサワと風がすり抜けていく。

「ここにおびき出せたんだ。まあ、いいだろう」

風に紛れて声が響く。

木々に囲まれたその場に木霊するかのよう。

「……あなたにしては、回りくどくて面倒なやり方だわ」

呟くように言葉を吐く。

「壊したら元も子もない」

風に紛れて答えが返ってくる。

「壊すことしか知らないあなたが？」

どこかイライラと非難めいた言葉。

「お前も楽しんでるんだからいいだろう……ルナ」

その声と共に姿を現す。

ナイトウルフ

夜狼を束ねる長たる男。

聖。

闇夜がこの上なく似合う男だ。と、ルナは思う。

黒い髪に青い瞳。

美しく冷たい。

見慣れているはずなのに、会うたびにドキリとする。

恐怖とそして愛しさで。

「楽しい？ そうね、まるでおかしの家に迷い込んだようで楽しいわね」

クスリと皮肉めいた笑みを零す。

甘い。

甘い世界。

『楓』という少女のいる空間は、どこまでも甘く温かい。

少女は疑うことを知らない。

拒絶されることを知らない。

憎しみを知らない。

彼女の周りには、嫌というほど『負』の感情が満ちているのに、それを溶かしてしまう。

「ここまでご苦労だった。後は俺が行く」

男は笑う。

笑うというよりは、口元を歪ませるといっほづが正しいのかも
れない。

「あの子の隣りには『彼』がいるわ」
「だから？」

月明かりの下、男は青い瞳を鋭く光らせる。

「『彼』はあの人の……」
「好都合だ。裏切り者の罪。その身をもって償ってもらっ
……」

男の言葉に不愉快そうにルナは顔を顰める。

「もっと喜べ。アレさえ手に入れば、夜に紛れて生きることもなく
なる。俺たちの力を世界に知らしめることが出来るんだ」

男は煌々と輝く月に手を延ばす。
まるで、それすら掴み取れるというように。

「そんなもの今更……」

美しく狂ったその男を見ながら、ルナは眉を潜め言葉を吐き出す。

「まだあの男に期待しているのか？ 無駄な努力はするものじゃな
い。あいつはもういない」
「！」

聖の言葉が、冷たい刃のようにルナを突き刺す。

「ここに来れば、奴が戻ってくるだけでも？ 俺が何も知らないでも思ったのか。お前の目的など最初から分かっていた」

不快な笑い声がルナの耳を掠める。

「健気で涙が出る。いや、笑えるな」

憎しみと侮蔑。

悲しみと怒り。

負の感情すべてをぶつけるように聖を睨み、ルナは寸分の隙さえ与えない素早い動きで、聖の背後に回りこむ。

制服の裏側から取り出したのは、数十センチの長さの針。

それを背後から、聖の喉元に突きつけた。

「……」

けれど、それに抵抗を見せることもなく、聖はされるままにその場にただ立っている。

針は後数ミリという位置で動きを止める。

数秒の空白。

聖もルナも動くことはしない。

「それでもお前は俺を殺せない。哀れだな」

その沈黙は破ったのは聖だった。

小さく喉を鳴らし嘲りの言葉を投げつける。

ルナの手が力を失い、針は地面に落ちる。

「気が変わった。お前も来い」

聖はルナを一瞥することもなく言葉だけを残しその場から姿を消す。

後に取り残されたルナは呆然とその場に立ち尽くし、虚ろな瞳で空を見上げる。

「ごめんなさい……私にはやっぱり無理だわ」

贖いの言葉。

けれどその声はもう届かないのだ。

そして、自分ももう逃げられはしない。

いや、元から逃げようという方が無理な話だったのだ。

ルナは一度瞳を閉じてから、静かにもう一度空を見上げる。

煌々と光る月に目を細め、唇をキュツとかみ締めると、その場から踵を返し、聖の後を追うのだった。

ずっと好きだった(1)

稔川学園の地下室に続く階段。

楓は静揮と二人で降りていた。

そこはまるで西洋の城。回りは石の壁。

もちろん階段も石。

足を一步踏み出すたびに、カッソーンツと靴音が子気味よく響く。

唯一現代を感じさせるのが、明かりが懐中電灯だということ。

壁にポツリポツリと蠟燭が立てられているものの、電灯の明るい光になれている楓たちにとっては、光と呼ぶにはあまりにも頼りなさ過ぎる。

「信じらんねー。いくら地下だからって、電球の一つくらいつけるよ」

楓の前を歩く静揮が、ブーブーと文句を垂れる。

しかしそれももつともな意見である。

常に最先端の技術を取り入れている学園。

そのはずが、地下のこの荒みよう。

まったく使われていなかったのだということが見て取れる。

一体何のためにあるのか。甚だ疑問だ。

「静ちゃん、待って」

後ろを歩く楓がヨタヨタとしながら言う。

暗闇で方向感覚が掴めない上に、階段の段差がけっこう急で、気を抜くと躓いてしまいそうだ。

長い長い階段。

そのまま落ちたら、洒落にならない。

「悪い」

静揮は立ち止まり楓を振り返る。

静揮の速度はかなり速い。

野性的勘というか、平衡感覚が良いというか、ともかく、文句を言いつつも、ヒョイヒョイと階段を降りている。

当然いつもスローテンポの楓には、付いていくのが精一杯だ。

「やっぱり危ない。楓は……」

「帰らないよ」

静輝の言葉を遮り、楓はキツパリ言い放つ。

「ったく。いつもは素直なくせに、変なところが頑固だよなあ」

「ごめんなさい」

足手まといだという自覚はある。

楓がいなければ、静輝は身軽に今回のことに集中出来ただろう。

「謝ることじゃねーよ。けど、一緒に来てどうするつもりなんだ？」

「もちろん。空スカイの涙ティアを見つけるのよ」

「……それって、聖って奴のことが関係してるんだよな。何か思い出したのか？」

「……」

その問いに、楓はなんと答えていいか分からず、押し黙る。

「俺には知られたくないか？」

「違うよ！ そうじゃなくて……。何て説明していいか分からない。」

聖のこと、本当に何も思い出せてないから。ただ、多分出会ったことのある人だと思う」

楓は正直にそう告げる。

「そっか……」

「静ちゃんは、どうして今回のことに参加しているの？ あの、空スカの涙を見つげ出して、何か望みがあるとか」

静輝は、学園の行事はともかく、生徒会主催のイベントには、あまり参加をしない。

楓は知らないことだが、影でいいように学園を動かしている、綜一狼が率いる生徒会を好きではないからだ。

「今回のことは、楓にも関わることだろ。それが何なのか分からないが、分かることがあるなら、参加するさ。俺の望みは、楓がいつも笑顔でいられることだ」

言葉にしなくても、楓が過去のことです苦しんでいることは知っている。

亡くなった両親のこと。

思い出したくても思い出せない小さな頃のこと。

それを癒しきれない自分をずっと歯がゆく思っていた。

今回のことも、何か裏で動いている綜一狼に比べ、自分はまったく蚊帳の外だ。

少しでも、何か分かることがあればと、即座に参加を決めた。

「静ちゃん。ありがとう」

「当たり前だろ？ 楓は、俺の家族なんだから」

少し照れたように、楓から視線を外しながら、静輝はそう言葉を口にする。

「うん。静ちゃんが一緒なら心強いよ。がんばって、空の涙を探し出そう」

「だな。あー……楓、手掴まれよ」

静輝は楓へと手を差し出した。

ずっと好きだった(2)

しかし、差し出され方はどことなくギコチナク、躊躇を感じる。

「いいの？」

どこか不自然なその空気に、思わず確認を取ってしまう。

「当たり前だろ？ へ、変な風に考えるな。た、ただ、危ないだろやっぱり。コケたら痛いし、怪我するし。どこかに傷でも付いて嫁に行けなくなったら困る……はあ」

妙な言い訳をこねた上に、『嫁に行く』という単語に、自分で言つて、そして自分で落ち込む静揮。

「う、うん？ じゃあ、手繋いで行こう」

静揮の不自然な態度に首を傾げつつ、楓は静揮が差し出した手を取る。

ドクンッ。

楓の手が触れた瞬間、静揮の心が音を立てる。

(うわあ。なさけないのな、俺)

静揮は思わず苦笑する。

たかが、手と手が触れている。

ただそれだけのこと。

なのに、どうしようもなく気持ちが高ぶる。

昔は、小さく震えていた楓の手を何の気も無く、いつも握っていた。

それは楓が『妹』だったから。

しかし、今日の前にいる楓という存在は『好きな人』なのだ。

もうずっと昔から気が付いていたはずなのに、改めて突きつけられたその事実にうるたえる。

逃げ出せるものなら、今すぐこの場から逃げ出したい。

そう。自分が、『優しい兄』でいる今のうちに。

「何だか昔に戻ったみたい」

歩き出して暫くして、楓はクスリと小さく笑う。

「え？」

「ほら、昔はいつも静ちゃんと一緒だったじゃない？ いつも手を繋いで、一緒に色んな所に遊びに行ったよね」

「そうだったな」

チヨコチヨコと、どこに行くにも後ろから付いてきた楓。

あの頃もすごくかわいらしかった。

思えばあの頃から、自分が守るんだという意識はあった。

それが、恋心なのだと気が付いたのは、もっというと後のことだ
が。

「昔の楓は、ともかく俺と手を繋ぎたがったよな」

そうしていなければ、まるでどこかに行ってしまうと言わんばかりに。

実際、両親と死に別れた楓の中には、無意識にそんな気持ちがあ

ったのかもしれない。

「何だか、静ちゃんの手、大きくなった気がする」

「当たり前だろ。背だつて、楓より二十センチ以上高いんだからな」

「静ちゃんてば高くなりすぎだよ。昔は同じくらいだったのにずるい」

不満げに楓は言葉を漏らす。

「そう言われてもな。勝手に伸びちまつたんだし。それに、楓は女なんだし、小さいほうがかわいいって」

「だめなのっ。私の目標は透子さんだもん」

同年代の女子より子供っぽく見られることが多い分、スラリと背の高い大人っぽい女性に、楓は憧れていた。

身近にいる透子は、正に楓の理想像だったりする。

真剣に言う楓の姿がかわいらしくて、静揮から思わず笑みが零れる。

「あー！ 静ちゃん、今笑つたでしょ!？」

「あはは。悪い。悪い」

そんな他愛もないことを話しながらも、握り締めた手から伝わってくる楓の体温を、妙に意識してしまう自分がいることに、静揮はと惑う。

この手をずっと離したくない。

そう思ってしまうのは、自分の我侷なのだろうか？

「男の人ってやっぱり透子さんみたいな人が好きなんでしょ？」

徐に、楓はポツリと眩いた。

ずっと好きだった(3)

楓のその言葉に、静輝は真顔で答える。

「そんなことはないだろう。俺は、片桐より楓のほづがずっといい女だと思っぞ」

これは紛れも無い本心。

透子は確かに美人だがそれだけだ。

ずっと楓だけを見てきた静輝にとっては、まったく眼中にない相手。

だが、静輝のその言葉に楓は大きく首を振る。

「そんなことない。現に綜ちゃんだて」

「綜一狼？」

消え入りそうな楓のその言葉に、静輝は目を丸くする。

「うん。綜ちゃんは透子さんのことが好きだもの」

でなければキスなんかしない。

生徒会室での二人のキスシーンを思い出す。

少なくとも、あれは無理やりのキスではなかった。

極自然に当たり前のように、唇を合わせていた。

嫌になるくらい綺麗なシーン。

「そんなことはないだろ。綜一狼だって楓の方がいいに決まってる」

綜一狼と透子の仲が噂にあることは、静輝だって知っている。

だが、綜一狼は紛れもなく楓が好きだ。

透子が綜一狼を好きだというのは知っているが、綜一狼はそれをももの見事に無視している。

もつとも、生徒会の宣伝効果として、敢て噂を放っておいているし、透子の気持ちを利用してのような節があることも確かだ。

(まさか、楓がそんなことを気にしてるなんてな)

まだまだ子供だと高を括っていたというのに、まさかそんなことを言い出すとは、驚きだった。

「そりゃあ、綜ちゃんは私が好きだって言ってくれるけど、それはきつと妹みたいな感じで……」

楓の言葉は、モゴモゴと妙に歯切れが悪い。

「楓？」

「う、ううんっ。別にそれが嫌とかそういうんじゃない……ただ何となくモヤモヤしてて……。あはは。何だかおかしいよね。ごめん。静ちゃん、今のなしっ」

自分を呆気にとられたように見つめている静揮の顔を見て、楓は慌てて言う。

「そんなに、綜一狼のことが気になるのか？」

楓の言葉。

それはまるで……。

楓が来てから十年が経つ。

自分と楓。綜一狼。

その関係はずっとバランスよく保たれていた。それが、少しずつずれて来ている。

そのことに今更ながら気が付く。

あせり。

綜一狼が楓を好きなのは火を見るよりも明らかだ。

そして、楓も綜一狼を気にしている。

その事実には強い衝撃を受ける。

楓は自分を兄としてしか見ていない。

自分の後を必死について来ていた少女。

それも昔のことで、今は自分から離れていく気がする。

平行線だ。

この先何年たっても、静揮は楓にとって優しい兄でしかない。そう考えると、堪らなくなる。

「あ、やっと階段終わったね」

永遠に続くかと思われた地下への階段。

最後の一段を降りきると、楓は静揮と繋いでいた手を離す。

「静ちゃん？」

だが、静揮は楓の手に力を込めたまま、その手を離そうとはしない。
い。

そんな静輝の様子に気が付き楓は足を止めた。

ずっと好きだった(4)

「静ちゃん、どうしたの？」

「……」

楓の手を強く掴んだまま、静輝はその場から動かない。離してしまつたら、楓が本当に自分から離れてしまう。そんな危機感に襲われた。

静輝は抑え切れない思いが口をつく。

「昔と逆だ」

静輝は俯いたまま静かに呟く。

「え？」

「今は、俺が楓の手を離したくないんだ」

「静ちゃん？」

不思議そうに自分を見つめる少女。

渡シタクナイ。

静輝の顔を覗き込んだ瞬間、楓は手を強く引かれ、静輝の胸の中に倒れ込んだ。

カランッ。

妙に大きな音を立てて、懐中電灯が静輝の手から滑り落ちる。息苦しいほどに強く抱きすくめられる。

楓は驚き身を硬くする。

「好きなんだ。妹だなんて思えない。俺は、兄妹としてじゃなく、お前のことが好きなんだ。ずっと好きだった」

掠れた声。

その時、震えていたのは楓だったのか静揮なのか。

「嘘……冗談」

そう呟いた楓の声も、ひどく乾いたものだった。

そうじゃないことは、静揮の性格を知っている楓が分かりすぎるほどに分かっていた。

しかし、この状況下で言うべき言葉が見つからない。

「嘘じゃない。冗談でもない。本当はこんなところで言うはずじゃなかった。でも、もう限界らしい」

静揮はフツと楓に回していた手を緩め、楓の顔を覗き込む。

その瞳があまりにも真剣で、楓はうまく言葉を紡げない。

「静ちゃん、私は」

静揮を見上げた途端、楓は唇を塞がれた。

それがキスなのだと、自分が静揮と唇を合わせているのだと、その事実が気が付くのに、大分時間がかかった。

気が付いたと同時に、楓は静揮を突き飛ばし、数歩後ず去る。

「……」

「……」

長い沈黙。

もしくはそれは数秒だったかもしれないが。

「楓」

静揮が口を開く。

それに対し、楓はビクリと肩を震わせる。

「お前にとっては、俺はまだただの『兄』なのかもしれない。けど、俺は楓を一人の女の子としてみている。もうずっと前から」

思ってもみなかった告白。

今まで、静輝には浮いた話のひとつもなかった。

たくさんの女子に告白もされたし、ファンクラブが出来るほどの人気だったというのに。

『いつか静ちゃんに彼女が出来たら、一番に教えてね』

高校に入り、その人気を目の当たりにした楓は、静輝にそう言ったことがある。

その時、静輝は何も答えなかった。

ただ、困ったように笑っただけで。

その時の気持ちは、どんなものだったのだろうか。

「…………ごめん。私、先に行く…………」

まともに静揮の顔を見られない。

震える声でそう言うのが精一杯だった。

今は、混乱する頭を冷やす時間が必要だ。

「楓。俺は謝らないから。今のが俺の嘘偽りの無い気持ちだ」

ためらいの無い凜とした静揮の声。

しかしそれに答えることは出来なかった。

楓は静揮を振り返らずその場から走り出した。

それぞれの想い（1）

楓はただ無心に歩いていった。

仄かな蝋燭の明かりだけが頼りのその場所で、何度か躓きそうになりながらもただ歩いていった。

胸の鼓動がいやに大きく聞こえる。

好きなんだ……。

静揮の声が耳から離れない。

家族だと思っていた。

血は繋がらなくても家族なのだと。

いつの間にもズレてしまったのだろうか？

自分の『好き』と静揮の『好き』は違いすぎる。

「鈍感」

静寂の中、呟いた自分の声がいやに大きく聞こえた。

まさか義兄が好きな女性が自分だったとは、夢にも思わなかった。

心のどこかで、今のままの関係が永遠に続くのだと思っていた。

自分と綜一狼と静揮。

頼りになる兄と幼馴染。

三人で仲良く。

何て都合のいい考えだろう。

永遠なんてありえない。

何にでも終わりはあるのに。

そんなこと、ずっと昔から分かっていたはずなのに。

どうしたらいいのか分からない。

楓は無性に綜一狼に会いたかった。

(また頼ろうとしてる……)

そのことに気が付いて、楓は自分を嫌悪する。

どうして自分はいつもこうなんだろう？

どうして自分はいつも……。

「あれー？　そこに居るのは、南条のお姫様じゃねえの？」

楓が振り返る間もなく、声の人物は楓の目の前に姿を現す。

金色の髪に着崩すした制服。

耳には金色のピアス。

ひょうひょうとしたその顔に、楓は見覚えがあった。

「うおっ。な、泣いてるのか？　あっ、迷子かよ。ま、こんなかび臭いところお姫様じゃあ、似合わないぜ。俺が外に連れてってやるから。泣くなよな」

楓が反応する間もなく、相手はワタワタしながらツラツラと言葉を並べ立て手を取る。

「ち、違いますっ。いいんです。私は別に迷子じゃないですって。あなたこそ、どうしてこんなところにいるんですか？」

慌てて涙を拭き取り、男の手を払いのけると楓は疑わし気に男を見る。

「ふうん。一応、覚えててくれたんだ。ま、改めて自己紹介。俺は

もしやわたる
守屋渉

ニツと笑って、守屋は親指を自分に向ける。

「そうじゃなくて私が聞いているのは、どうしてあなたがここに居るかっていうことです」

ルナは言っていた。

今回のこの件はトップシークレット。

選ばれた生徒は、それぞれに長けた数十名だけ。

失礼なことだが、この守屋という人物が、その数十名に選ばれたとは到底思えない。

「うーん。それは言えない。ま、とりあえず、依頼人からの内密な指令を受けているとだけ、言っておこうか」

本当か冗談か分からない顔で、守屋は口元に指を当てておもしろそうに笑う。

「それって綜ちゃん……生徒会長から？」

「内緒だよ」

楓の問いに守屋は小さく笑う。

「あなたって、何者なんですか？」

不信任を露にする楓に、守屋はニツと笑ってみせた。

それぞれの想い(2)

「密偵というか。まあ、そこいらの奴らとは、縁のない仕事だったことは確かだな。ちなみに、俺、本当はこの生徒でもないんだ。内緒だけだな」

楓の問いに暫く考える仕草をしつつ、守屋はそう言い放つ。

「全然分らないです」

楓は不審の眼差しを向けながら呟く。

大体、どこの学校に密偵なんていうものがあるだろう？
いくら名門校と言ったって、おかしい話だ。

「いいんだよ。分かんなくて。んじゃあ、次は俺が聞く番。あんた、さっき泣いてたよな？ 迷子じゃないとすると、何でだ？」
「それは……」

楓は口ごもる。

とてもじゃないが、人に話せることじゃない。
得体の知れない目の前のような人物にならなお更だ。

「話せないかあ。ま、別にいいけど。とりあえず、生徒会長には報告しとこうかな。恩を売れるし」
「だめっ」

シラツとした守屋の台詞に、楓は間髪を入れず声を上げる。

「それはダメです。絶対にダメなんです！」

「ぷっ。あははっ。そんな恨めしそうな顔すんなって。いいよ。言わないから。俺、こう見えても紳士だし」

おかしそうに笑いながら、守屋は明るくそう言い放つ。

「は、はあ。あの、ありがとうございます……」

思ったよりも、悪い人ではないのかもしれない。

屈託なく笑う守屋をみて、楓はそんなことを思う。

「でもさ、今日はもう遅いし、とりあえず家に送ってやるよ。南条のお姫様を、こんな危険な所に置き去りにしたとあっちゃあ、会長に闇討ちでもされかねえ」

立ちつくす楓に手を差し伸べる。

「確認しなきゃいけないことがあるの。平気です。ちゃんと一人で帰れますから」

その手を取らず楓は大きく首を振る。

「いやいや。そう言う訳にはいかない……」

その時、唐突に明るい光に照らし出される。

あまりの眩しさに、楓は目を細めた。

「楓？」

「……綜ちゃん」

そこに綜一狼が立っていた。

楓の存在に、さすがに面食らっているらしく目を見開く。

「あら、何だか話し声がすると思ったら、意外な組み合わせね」

その後からやって来た透子が、二人を交互に見て呟く。

綜一狼と透子。

二人の姿に、楓の心がチクリと痛む。

「言つとくが、別に俺が連れてきた訳じゃないぜ。たまたま偶然会っただけだ」

綜一狼の言葉を待たず、バツが悪そうに守屋は言葉を吐き出す。

「どういうことだ、楓？」

「ごめんなさい」

そう言うしかなかった。

今更何を言い訳しても始まらない。

理由は何にしる、自分がこうして、ココに忍び込んだことは事実なのだから。

「楓、きちんと説明を……」

「悪い。俺の所為なんだよ」

更に言い募る綜一狼の言葉を遮ったのは、その場に駆けつけてきた静揮だった。

それぞれの想い(3)

静揮の声に楓はドキッとする。

「俺が口を滑らせたんだよ。楓だって事の一部始終を知ってる訳だし。今回だけ、見逃してやってくれないか」

楓の間をすり抜けて、静揮は綜一狼の前に歩み出た。

「今回のことは、トップシークレット扱いにしたはずよね。それを漏らすなんて、迂闊すぎるわ」

透子の非難めいた言葉が静揮に向けられる。

「透子さん、違っ……」

「黙ってるって」

楓の言葉を制し静揮は優しく微笑む。

いつもと何ら変わらない、優しい兄の顔。

先ほどの出来事が嘘だったのではないかと思えるくらいに。

「俺が迂闊だった。すまん」

静揮は綜一狼に頭を下げる。

「知ってしまったものは仕方ないか……。今度だけだ。幸い、まだ他の生徒会役員にはバレてない。透子、この馬鹿に免じて見逃してくれないか？」

「公私混同ですよ、それは。……でも、あなたは言い出したら聞か

ないし。今回だけですよ」

「ありがとう。透子。取り合えず、楓一人で帰す訳にはいかないな。静揮、お前も楓と一緒に帰れ」

綜一狼は幾分表情を和らげ、静揮に言う。

「あ、別に俺が送ってつてもいいぜ」

横で欠伸をかみ殺していた守屋が、首を突っ込む。

「お前じゃ、なお更心配だ」

「うわー、ひっでーの」

取り付く島もないほど、きっぱりと言い放つ綜一狼に、守屋は不満げな顔をする。

「……俺なら安心なのか」

自嘲気味な静揮の言葉が、楓の耳にはっきりと届く。

「何か言ったか？」

「いや、そうだな。楓、一緒に帰ろうぜ」

普段と変わらない静輝。

だが、楓はどう反応していいか分からず黙り込む。

「楓の気持ちも分かるが、今回のことは生徒会の行事でもある。生徒会長の俺が、そのルールを破るわけにはいかないんだ。分かるよな？」

楓の無言を別のことと捉えた綜一狼はそう言い放つ。

「安心して。私たちがちゃんと空の涙は見つけ出すわ」
スカイティア

続けて、透子もそう言つて、艶やかに微笑む。

立ち並ぶ二人は、それだけで絵になるくらいに綺麗だ。

透子なら、綜一狼の補佐としてもパートナーとしても申し分ない。少なくとも、自分のように足手まといにはならないだろう。自分は、綜一狼の邪魔にしかない。

「きゃー!」

唐突に、通路の奥深くから、女性の悲鳴が響いた。

「なに？」

それは確かに人の悲鳴だった。

「やめようぜ。ホラー映画じゃあるまいし」

石造りの地下室。

あまりにもはまり過ぎなシチュエーションに、守屋は肩を竦める。

「行ってくるっ。楓が行くのはまずい。透子、楓と一緒に居てくれるか？」

「分かりました」

「静揮と守屋は俺と来い。楓、そこから動くな」

緊迫した空気の中、楓は小さく頷く。

さすがに一緒に行くなどと、今回はわがままも言えなかった。

それぞれの想い(4)

仄かな懐中電灯の明かり。

徐々に遠ざかる三人の足音が消えると、後は呼吸の音さえ聞こえ
そうな静寂。

ソツと付いたため息さえ、楓の耳を掠め気分を滅入らせる。

「大丈夫かな、綜ちゃんたち……」

数分の空白が、何十倍にも感じる。

堪らなくなつて、楓は隣りにいる透子に声をかける。

「……………」

問いの返事は返ってこない。

透子は綜一狼たちが消えた方角を見据えたまま、ピクリとも動こ
うとはしない。

「透子さん？」

静寂の中、止まったまま一言も発さない透子の姿に、楓は異様な
ものを感じ取る。

楓の声を無視しているというよりは、その声が聞こえていない。
そんな感じだった。

この無音空間で、それはあまりにもおかしいことだ。

「透子さん、具合でも悪い……」

「……………ければ……………」

「え？」

透子の口から漏れた眩き。

息を吐くのと同じくらい微かなものだった。

「透子……さん？」

フィットと透子は楓へと向き直る。

背の低い楓は、透子に見下ろされるような形となる。

その瞳を見た瞬間、楓は寒気が体を突き抜けるのを感じた。

何かがおかしい。

何かが変だ。

美しい透子の顔は、まるで陶器の置物のように固い。

その瞳に生气はなく、代わりに無機質な美しさが彩っている。

「あなたさえいなければ、あの人は私を見てくれるのに」

透子の口から漏れた抑揚のない声。

今度のはつきりと聞き取れた。

けれど、楓は言葉を発することが出来ない。

「どうしてあなたなの？ 何も持たない何も出来ないくせに。それなのに、あなただけが彼の心に入り込んでいる！」

叩きつけるようなその言葉に、初めて怒りがにじみ出る。

「透子さ……」

ザシュッ。

最初、何が起こったのかわからなかった。

自分の頬を掠めた鋭い痛み。

ソツと手を触れると、手に赤い液体が付く。

そこでやつと気が付く。

何か鋭いものが、自分の頬を掠め切ったということに。

「あなたさえ、いなくなればいいのよ」

クスクスと壊れたように笑う透子。

その手にはいつの間にか、小型のナイフが握られている。

楓は数歩後ず去る。

「ねえ。だから消えてよ。私の前から、綜一狼の前から消えてっ」

振り下ろされたナイフ。

それを楓は間髪で避ける。

体勢を崩しつつも楓は駆け出す。

まるで短距離のスタートダッシュだ。

楓はそれが下手だった。

屈んだ状態から駆け出すなんて、走りずらいことこの上ない。

けれども、今はそんなことを言っていられない。

縛れる足を必死に前に突き出して楓は走り出す。

(同じ……)

今回のような出来事は、今度で二回目だ。

もう決して体験しないだろうと思っていたこと。

まさかこんなにも早く出会うことになるとは、思いもしなかった。

透子の今の状態は、早山の時と同じだった。

ただ違うのは、今回のターゲットが総一狼ではなく自分だということだ。

それぞれの想い(5)

「……」

走っていた綜一狼は、足を止め、今来た道を振り返る。

「うおい！ 突然止まるなよっ」

すぐ後ろを走っていた守屋は、ぶつかりそうになり、口を尖らせて抗議する。

「今何か、聞こえなかったか？」

もう一度耳を澄ますが、あるのは静寂のみ。

「気の所為か……」

そう口にしながらも、妙な胸騒ぎがする。

どうにも嫌な感じだ。

と、綜一狼は思う。

「……」

い。同じく来た道に目を向けている静輝は、どこかいつもの覇気がない。

「二人ともボヤボヤしてんなよっ。ちゃっちゃっと、確認しちやおうぜ！ ったく。時間外労働だぜ。報酬割り増し要求してやるからな」

ブツブツと呟きながら走り出す。

「時間内に成果を出さないお前が悪い」

その後が続く綜一狼が、シラツと言いつつ。

「出せるか！ こっちがどんだけ苦労してるか」

ブーブーと文句を言う守屋。

「妙に静かだな。どうかしたのか？」

いつも何かしら口を挟む静輝が、まったく何も言っていない。

綜一狼は静輝に目を向ける。

「……俺、楓に告白したから」

「!？」

「はっ?」

息一つ乱さず、綺麗なフォームで走る静輝は、淡々とそう言い放つ。

「い、告白!? マジマジ? 愛の告白!？」

スパンッ。

興奮気味な守屋の頭を、切れのある動作で叩く綜一狼。

「黙れ。痛い目に合わすぞ」

「いや、今ので十分痛い……いえ、なんでもございせん」

涙目で抗議しかけたが、綜一狼の顔を見て、守屋は慌てて口を引き結ぶ。

「お前の気持ちは知ってたさ。だが、なぜ俺にそれを言っただ？」

いつもと変わらない綜一狼の声。

「黙っているのはフェアじゃないだろ。俺だってお前の気持ちは知ってる」

「そうか……」

「それと、楓にキスした」

続いた静輝の言葉に、綜一狼は足を止める。

「今、何て？」

「楓にキスをしたといったんだ」

同じく足を止めた静輝が、淡々とした口調で繰り返す。

「……だから、姫さん泣いてた……っ」と

仕方なく立ち止まった守屋は言いかけて、『言わない』という約束を思い出し、慌てて口を噤むが遅かった。

ガッ！

綜一狼が静輝を殴り飛ばす。

静輝は何の抵抗もせず、その拳を受け、そのまま通路の壁に体を

叩きつけられる。

「お、おいっ」

なおも殴りかかろうとした綜一狼を、守屋は慌てて押さえ込む。

「ふざけるなっ。どういっつもりだ！」

守屋に抑えられながら、綜一狼は怒りを宿した瞳を静輝に向ける。

「……お前には分かんねーよ。俺は楓にとって、このままじゃ一生『優しい兄貴』のままだ。それを壊すところかかりがほしかった」

切れた口からにじみ出した血を拭いながら、静輝はそう吐露する。

「それが、楓の気持ちを傷つけていい理由になるのか？ お前を信賴している楓を、なぜ裏切るような真似をするんだ」

「……」

綜一狼の言葉に静輝は黙り込む。

その場に、重苦しい空気が立ち込める。

「あら？ 楓の騎士二人がこんなところに」

暗がりから、その場の空気にそぐわないソプラノが響く。

「……あら？ 何だか変なとこに来ちゃったかしら？」

守屋に押さえ込まれている綜一狼と、壁に寄りかかり頬を腫らす静輝の姿を見止めて、その場に現れたルナは乾いた笑いを零した。

それぞれの想い(6)

『あなただけが彼の心に入り込んでいる!』

透子の言葉が、楓の頭の中を目まぐるしく駆け巡る。
混乱する。

二人は恋人同士で、キスだっでしていた。
なのに、透子の言葉はまるで……。

ガッ。

「痛っ」

数百メートル走ったところで、楓は瓦礫に躓き転ぶ。
周りはほとんど暗闇。

懐中電灯は、さっきいた場所に置いてきてしまった。
所々、他の生徒が入ったのか、蝋燭が吊り下げられてはいたが、
それも仄かなもので、無我夢中だった楓には、足元を気にする余裕
などなかった。

「どこ、どこ?」

楓は荒れた息を整えながら、初めて辺りを見回す。

とりあえず、奥へ奥へと進んで来たが、たどり着いたのは一際大
きなホール。

ただし、石の壁はところどころ穴が開いていたし、崩れた石がそ
こら中に散らばっている。

いくつかの別れ道を適当に進んできたが、どうやら一番まずい方
向に来てしまったらしい。

そこは完璧な行き止まり。

ここから出るためには、元来た道に戻るしか手はない。

その上、ただ広いだけの空間のため隠れるような場所もない。
立ち上がった楓の前に透子が姿を現す。

「透子さん、こんなことやめて」

ゆっくりと、けれどしつかりと歩み寄ってくるその姿は、正気を失くした人間には見えない。

けれど右手に光る小型ナイフを持ちながら、悠然とした微笑を浮かべているその姿は異常だ。

「透子さん……」

頬の血は止まったものの、転んだ時に擦り剥いた膝から血がにじみ出し、ドクドクと熱い痛みを訴える。

「さあ、消えて頂戴」

もはや、楓の言葉など聞こえてはいない。

いや、元から聞こえていなかったのか。

もう走る気力はない。

ただよろける様に後ず去るのみ。

ドン。

とつとつ壁際に追い詰められる。

楓の手に冷や汗が滲む。

殺される。

そう確信する。

理由も分からず意味もなく、自分の存在は無くなるのか。そう思った時、会いたいと思った。

いつも自分を優しく導いてくれた彼に。

初めて会った時から、憧れと尊敬を抱た人。

心の奥底に秘めた『孤独』さえ消してくれた人。

そして気が付く。

自分の中で、これほど大きくなってしまった想いを。

そして、その気持ちを何と呼ぶのかさえ。

自分で自分に蓋をした想いがあふれ出す。

(綜ちゃんが好きだ)

ああ。何て簡単なことだろう。

ずっと続いたイライラの名前。

それは『嫉妬』だ。

自分は、透子に嫉妬していたのだ。

死んだ本当の両親でもなく、育ての親でもなく、静揮でもない。ただ一人。

嘉神綜一狼。

その人に会いたいと思った。

自分勝手でも貪欲でも、恩知らずでも構わない。

ただ会いたかったのだ。

『君だけは僕のことを覚えていて』

昔、好きだったあの人の言葉を思い出す。

いなくなるけれど会えないけれど、忘れないでと言ったあの人。

どうして今まで忘れていたのだろうか？

どうしてこの瞬間に思い出したのだろうか？

死ぬこの瞬間に分かるなんて、思い出すなんてひどすぎる。

「綜ちゃん」

自分を貫くナイフを見たくなくて楓は目を閉じる。

そして、意識は深い深い闇の中に落ちていった。

記憶の欠片（1）

そこは木漏れ日が眩しい箱庭のような場所だった。

敷き詰められた芝生とたくさんの木々。

高い壁に囲まれた庭。

そこで少年と出会った。

「誰？」

少年を見たとき、楓は綺麗だけど冷たい子だと思った。
声が恐かった。

目が自分を拒絶していた。

「私は楓」

けれど、にっこり笑って名前を告げた。

「どうしてこんな所に？」

「内緒よ。内緒のことなの」

これは秘密のことなのだ。

誰にも言ってはいけない。

だって見つかってしまったら大変だから。

「ここは遊び場じゃない。出てけ」

楓の答えに不愉快そうに、少年はそう言い放つ。

その場にそぐわない、冷たい目を向けて、冷たい声を出す。

「遊びじゃないもの……。大切なことなんだもの」

怒られたような気がして、楓はスカートの裾を握り締めて、瞳を潤ませる。

「俺は知らない。そんなこと関係ない」

泣き出す寸前の楓から視線を逸らし、少年はぶっきら棒に言葉を吐き出す。

それが合図だった。

「意地悪っ……ヒック……」

瞳から大粒の涙が溢れ出す。

後は言葉にならない。

ただひたすら泣きじゃくる。

「うるさい。うるさい。うるさいっ!」

最初は呟くように、けれど最後は怒鳴り声となる。

それでも楓は泣き止まない。

遠慮なく声を張り上げ、留めなく涙を落とす。

楓の足元は、雨の降り出しのように、点々と濡れている。

「最悪だ。うるさい。もういい加減にしてくれよ……」

その言葉は、楓に向けたものではなかった。

目に見えない何か、自分に不幸をもたらす何かに、投げつけた言葉だった。

そして言葉と共に、頬を伝う何か。
それを見つけた楓は、ピタリと泣くのを止める。

「……」

俯いていたが、少年は泣いていた。

「ごめん……なさい。泣かないで。私、もう泣かないよ？ だから泣かないで」

自分の所為で少年は泣き出した。

楓はそう思い、少年に駆け寄ると必死に言う。

「うるさい」

少年は掠れた声で言葉を吐き出し、耳を塞ぎ座り込む。

「うるさい」と言われては、慰めることも出来ない。

楓は途方に暮れる。

が、次の瞬間、楓は思い出す。

自分がこういう場合、どういう風にしてもらったかを。

楓も座り込み、そして少年の体に抱きつく。

「あのね、あのね。泣いてるとね、ママがギュッとするのよ。そうするとね、悲しいことがぜんぶ無くなるの。悲しいことをね、吸い取ってくれるのよ。だからね、楓もお兄ちゃんの悲しいこと吸い取ってあげる。ママみたいに全部は無理かもしれないけど、半分くらいは大丈夫だと思うのよ」

少年と目が合うと、楓は一生懸命にそう説明する。

その言葉に、少年は固まり最初はキョトンとしていたが、次の瞬

間、爆発するかのように泣き出す。

「うわーっ」

少年は声を上げて泣く。

その声は、さっきの楓の比ではない。

「え？ ど、どうして泣くの。泣かないでっつてばあ」

こんなはずではなかったのに。

困り果て、とうとう楓も泣き出してしまった……。

温かな木漏れ日の下、少年少女は泣いている。

悲しみと優しさに包まれて。

記憶の欠片（2）

「あ………」

フツと意識が戻る。

「ゆめ」

楓はそう呟き違うと気付く。

そう。

違うのだ。

（あれは現実にあつたことだ）

思い出した。

自分は綜一狼と出会ったことがある。

南条家に引き取られる前、幸せしか知らなかったその時に。

綺麗だけど冷たい、でも本当は泣き虫だった少年。

それが綜一狼だ。

でもあれはいつの頃だろう……。

あそこは、どこだった？

自分は何しに行ったのか？

綜一狼は何をしていた？

思い出せない。

記憶を辿ると、途中で切り取られているかのように、スッポリと

そこだけが空欄になっている。

まるで抜け落ちたジグソーパズルのピースだ。

そんなことを思いながらぼんやりと、ぽっかりと空洞になっている天井を見上げる。

そうだ。

あそこから落ちたのだ。

ぼーとする意識の中、思い出したのは透子にナイフを突きつけられたこと。

そして、振り上げられたナイフを見て、目を閉じたのだ。

何だか体が浮いたような感じがしたが、あれは壁が崩れて落ちたからだだったんだ。

地面に付く前に気を失ってしまったらしい。

体中がギシギシと痛む。

楓はゆっくりと上半身を起こす。

「何とか立てる」

ところどころ痛むにしる、結構な高さから落ちたわりに、骨のことも折れていないのだ。

奇跡的と言ってもいい。

「透子さん」

声を出してみるが何の返答もない。

ジャンプしてみても、とても届きそうも無い。

辺りは薄暗く、視界が極端に狭く、うまく状況が把握できない。

(ともかく、ここから出なきゃ)

一応は地下室な訳だし、上に続く階段の一つもあるはずだ。

楓は深呼吸一つして、歩き出す。
今はともかく、ここから抜け出すことが最優先だ。
あの透子の尋常でない行動。
もし、綜一狼たちにも襲い掛かったら……。
一刻も早く、このことを綜一狼に伝えなければならぬ。

楓は壁に手をかけながら、ゆっくりと進む。
幸いにも一本道。

迷うこともなく前に進める。

石畳の床は楓の足音を響かせる。

それが小さな頃、夜中に起きて廊下を歩いたその時を思い出させて、ひどく心細くなる。

まるで小さな子供に戻ったような気分。

そして気が付く。

いつも隣には、綜一狼と静揮が居てくれたのだと。

二人の存在が、自分にとってどれほど心強いものだったかということが。

(私一人でだつてがんばらなきゃ)

頼ってばかりじゃいけない。

自分の力で脱出するのだ。

そして、自分の気持ちを二人に伝えなきゃいけない。

今頃になって気が付いた。

自分は知らないうちに、すべてから逃げていたのだと。

失うことが恐くて、一人にされてしまう気がして、自分の気持ちを押し殺すことで、変わるから目をそらしていた。

静揮の優しさの中に隠された本当の想いも、綜一狼を好きだという自分の気持ちからも。

ルナの言葉の意味が今なら分かる。

『どんな人でも、好きになる時は好きになっちゃうのよ。それがどんなに、見込みがなくても報われなくても、それでも好きになるの』

自分はこんなにも綜一狼が好きだ。

見込みのない報われない気持ちだけど、それでもこの気持ちを愛しいと思う。

大切にしたいと思う。

(光……)

数メートル歩いたところで、視界に仄かな明かりが目に入った。暗がりの中、距離感は掴めないが、それは確かに存在する明かりだ。

楓は安堵の息を吐く。

明かりがあるということは、人もいるかもしれない。

楓は光へと向かって歩みを速めた。

記憶の欠片(3)

だが、やっとの思いでたどり着いたそこを見て、愕然とした。

「出口じゃないの?」

その場に着いた時、よろけて楓は思わずその場に座り込みそうになる。

目の前にあるのは、円形の広い広場。

そこを囲うように壁に蝋燭が灯っている。

中央の壁には大きな十字架。

入り口から壁の十字架まで、一直線に、赤い絨毯が敷かれている。古く崩れ去ってしまったのか、それ以外は何も無い。

(あんまりだよ)

歩き通しで、足は鉛のように重く、今までにないほどに疲れている。

なのに、たどり付いた場所は行き止まり。

まったくの一本道だったから、安心していただけなのに。

楓はグルリとその部屋を見渡す。

それにしても、何か違和感がある。

何かがおかしいと思う。

それが何なのか、楓はジッと考え込む。

(そっか)

蝋燭だ。

この部屋を照らしている明かり。
一体、誰が付けたものなのか。
電気とは違うのだ。

蝋燭が独りでにつく訳がない。
誰かが居たのだ。

蝋燭の長さからいって、そんな時間は経っていないはずだ。

「ここまで誰にも会わなかったのにな」

小さくため息を付いて、ゆっくりと壁に架かっている十字架に歩み寄る。

近くで見ると、十字架はひどく傷付いていた。

それも、ワザと何か鋭利な刃物で傷を付けたかのように、いくつもの切り傷が無数にある。

「それは、神に仇名す者たちの忘れ形見だ」

十字架に触れようとした時、聞こえたその声に振り向く。

「あ、あなた」

声が上がずる。

蝋燭の明かりに照らし出され姿を現したのは聖だった。

悠然とした笑みを携えて、楓の姿を捉えている。
思わぬ相手に楓はただ呆然とする。

「まったく、俺はあの女にお前を連れてくるよう、暗示をかけたつもりだったんだが。まさか、負の感情が勝って、お前を殺そうとするとは。浅ましいことだ」

「殺そうとって……まさかそれって透子さんのこと？」

聖の漏らした言葉に楓はハツとする。

「ああ。確かそんな名前だったか」

楓の問いに、聖は気のない返事を返す。

「あれはあなたの仕業なの？ それじゃあ、もしかして早山先生の時も……」

透子の時も早山の時も同じ状態だった。

早山は自分のしたことを覚えていないと言う。

もし暗示をかけられていたなら、あるいはそうなのかもしれない。

「そつだ。もつともあの男の場合、役割はちゃんと果たしてくれたがな。学園内の見取りからセキュリティ管理のシステム。生徒の名簿。すべての情報を持ち出してくれた。嘉神綜一狼の命を取るようにとも命じたが、まあそれは、大した期待もしていなかったがな」
「そんなんっ」

まるで何でもないことのように、言葉を吐き出す聖の様子に楓は深い憤りを感じる。

「感情の負の部分を探り自我を支配する。羊の群れに狼が入り込めばすぐに見つかるが、羊の群れに羊が入っても分からない。そう思わないか？」

「あなたは一体誰？」

混乱する楓の様子に聖は小さく笑う。

笑う聖の姿にドキリとする。

何て冷たい笑い方をする人だろうと思う。

違う。

訳の分からない強い拒絶感。

小さく胸が疼くのを感じて、楓は胸元を強く掴んだ。

記憶の欠片（4）

「お前は、ここがどこだか分かるか？」

その場をグルリと見渡し聖は楓に問う。

「……」

楓は小さく首を振る。

平静を装いつつも、胸の鼓動は早鐘している。

「ここは、少数民族たちの隠れ家だったんだ。百年以上前、少数民族たちは迫害されていた。高い知能指数。すべてにおいて人間離れしすぎた能力を持つ少数民族たちは、多数種族に受け入れられず、隠れるように地下に移り住んだ」

楓の言葉を待たず聖は淡々と話を続ける。

「そこにある十字架。それは、祈りを捧げるものなんかじゃない。神に見放された者たちが、剣を振り下ろしたものだ。もつとも、神などこの世には存在しないがな。神などという存在は所詮、何も出来ない無能な者たちの戯言だ」

「ここは学園の地下なのよ。どうしてそんなところに、隠れ家なんて……」

聖の言わんとすることを理解出来ず、楓は聖に瞳を向ける。

吸い込まれてしまいそうな、コバルトブルーの瞳。

けれどそれは氷のように冷たく見える。

「反対だ。隠れ家の上に学園が出来たんだ。もつとも、その頃には、そこにいた少数民族たちは外の世界に戻ったがな。この地下は、昔の建築技術の数十倍進んだ技術で造られていた。だから、ここを見付けた連中も、それを潰そうとは考えなかったのだらう。むしろ、ここに興味を抱き、この地下への入り口を作った。そんなところだろうな」

最先端の技術を取り入れられている稔川学園。

それなのに、忘れたように手付かずの荒んだ地下の部屋部屋。

目の前の男の言うことが、妙に説得力のあるものに思えてしまう。

「で、でも、あなたがどうしてそんなことを知ってるの？」

「俺がその少数民族の長だっと言ったら？」

「え!？」

楓は目を見開く。

「少数民族の名は夜狼^{ナイトウルフ}。何百年と迫害され続けた闇に住まう一族。

何の因果か、この地に舞い戻ろうとはな」

聖は自嘲気味な笑いを漏らす。

「俺たち夜狼^{ナイトウルフ}はやがて外の世界に戻り、そして盗賊になった。夜狼^{ナイトウルフ}は、この世界のどんな者たちよりも優れている。捕まりもしないし、奪えないものなど何もない」

聖は徐に楓に歩み寄る。

「だからってどうして盗賊なの？ 優れているというのなら、盗賊

じゃなくてもよかったじゃない。奪うんじゃない。与えて生きていく方法だってあると思うわ。きつと時間をかければ解り合えると思う」

「どんなに優れていても、解り合うことが出来ず、孤独でいるのは寂しい。」

「そして、その寂しさすら気付いていないのなら、それはとても悲しいことだ。」

「無駄なことだ。支配するかされるか。この世にはそれしかない」

赤い絨毯の上を、聖は楓に向かって優雅にゆっくりと歩く。

「そんなことない」

「それに小さな危機感を感じながらも、どうすることも出来ず楓はただその場に立ち尽くす。」

「人の歴史を見ても分かるはずだ。幾度となく繰り返される争い。そして支配し、支配されて人々は繁栄をしてきた。必要なものは力。ただそれだけだ。もっとも、盗賊はただのお遊び、目暗ましにすぎないが。夜狼が下等種族を支配するためのな」

聖は楓の前に立つ。

青い瞳が静かに楓を射抜く。

「あなたの考えは間違ってる」

「お前の考えなど聞いていない。俺が聞きたいのは空の涙のことだ」
「一体、空の涙スカイティアって何なの？ どうして私にそれを聞くの？」

楓は、聖を真っ直ぐ見据えた。

記憶の欠片（5）

聖の瞳に蹴落とされそうになりながらも、楓は精一杯の虚勢を張る。

そんな楓の姿を聖はおもしろそうに見る。

「夜狼の一族は、それぞれ特殊能力を持っている。だが、その能力は徐々に失われていく。だから、その力を保持するための薬が必要だった。空の涙スカイティアというな」

「空の涙スカイティアが薬？」

「今まで空の涙スカイティアは宝石のような物なのだとばかり思っていたが、どうやらそうではないらしい。」

「ところが、こともあるうにそれを持ち出した裏切り者が出た。ご丁寧に、研究のありとあらゆる書類を焼き払い、データをすべて消し去って。そして唯一残っていた空の涙スカイティアのサンプルを持ち出した」

聖の表情が微かに歪む。

「裏切り者は追い詰めたものの、空の涙スカイティアは、また別の人物に渡ってしまった。その価値すらも分からない、幼い子供に……」

「子供？」

意外なことに、楓は聖の言葉を反芻する。

「何も知らず、その子供は遊び心で空の涙スカイティアを隠した。やがて、その子供に不幸が襲う。両親が殺され、子供は一人になった。子供は心

に深い傷を負い心を閉ざしてしまつ。裏切り者の仲間、その子供を哀れに思い、記憶を封印してしまつた。空の涙の隠し場所と共に、子供はすべてを忘れ、託した者は消えた」

ドクンッ。

自分でも分かるくらいに、心臓が大きな音を立てた。

「ちよつと待つて。まさか……」

「記憶の封印を解くのは難しい。無理に解こうとすればその者を壊しかねない。だから、私は待つことにした。封印は年月と共に弱まる。十年。そう決めた。十年後、再びその場所に舞い戻り、子供の記憶を解き放とうと。そして、必ず空の涙を取り戻そうと」

「嘘……」

「そろそろ思い出してくれると嬉しいんだが……楓」

聖の手が楓の頬に触れる。

「し、知らないっ！ 私が空の涙を隠した？ 記憶を封印？ そんなこと信じられない」

反射的に聖の手を払いのけ、楓は言葉を吐き出す。

頭がひどく混乱している。

しかし、『違う』と言い切れないのは、心にひっかかる何かがあるからだ。

忘れていた何か、抜け落ちたピースを見つけ出せていないからだ。

「私は十年待つた。封印のほとんどは無力化しているはずだ。思い出せないのは、お前自身が、自分にガードをかけている所為だ。思い出せ。空の涙を持ったお前は、この学園に入り込んだ。この十年、

部下を幾人が送り込んだが、結局見つけられはしなかった。どこに隠した？」

青い瞳が冷たく光る。温かみの欠片もない瞳。

「本当に知らない。きっと何かの間違いよ」

壁に張り付くようにして、楓は聖から離れる。
出た言葉が小さく揺らぐ。

「何も恐れることはない」
「痛ッ」

聖は乱暴に楓の腕を掴み引き寄せる。
細身の体からは想像も出来ない強い力。
楓は抵抗する間もなく引き寄せられる。

(!?)

強引に上向かされ、そのまま唇を奪われる。
奪う。

その表現は正しい。
優しさも温かみの欠片もない口付け。
抗う楓を力で押さえ込む。
カッと体が熱くなる。

恐怖よりも驚きよりも、どうしようもない怒りが体を突き抜ける。

「やっってくれるな」

体を離れた聖が発した言葉。

口から微かに血が滲んでいる。

「……」

今だ腕を掴まれたまま、楓は口を手の甲で擦り、精一杯の抵抗と
しておもいつきり聖を睨む。

どうしてだか分からないが無性に腹が立った。

この聖という男を、体全体が拒絶していた。

記憶の欠片（6）

「くっ。あははっ」

そんな楓の姿に聖は声をあげて笑い出す。

さもおかしくて仕方がないというような盛大な笑い。

「嫌われたものだな。昔はあんなになついていたのに」

「違うっ。それはあなたじゃないわ！」

聖の言葉に、弾かれたように楓は言葉を吐き出す。

「あ……」

自分から出た言葉に驚く。

そして悟る。

こんなに腹が立つのは『違う』からだ。

大好きなあの人を顔をして声をして、そのクセ本当は『違う』から。

『いなくなるけど君は僕を憶えていて。楓ちゃん』

ヒジリの泣き出しそうな微笑が脳裏を過ぎる。

そう、ずっと昔にヒジリと出会った。

穏やかにいつも優しい微笑を浮かべていたその人が、大好きだった。

ずっと側にいてほしかった。

だから……。

「へえ。覚えているじゃないか」

バンツ。

「きゃあっ」

両腕を掴まれ、楓は壁に押し付けられる。

まるではり付けにされたような体勢。

目と鼻の先に聖の端正な顔がある。

冷たい微笑み。

「あなたは誰？ あなたは『ヒジリ』じゃない」

『ヒジリ』はこんなに冷たく笑わない。

こんなに冷たい瞳を向けたりはしない。

「いいや。俺は『聖』だ。もともと、お前の知っている『聖』はもういないがな。忘れる。お前は俺のモノだ」
「やっ……」

聖の唇が楓の首筋に触れる。

シャツのボタンが独りでに一つ一つ弾け飛んでいく。

胸がはだけ、楓の白く透き通るような肌が露出する。

「やめて……誰か……」

「無駄だ。ここは地下の隠し回路。そう簡単に入り込めない」

笑いを含んだ言葉を楓に向ける。

楓を掴む手は緩めず唇は白い肌を滑る。

嫌悪感が体を突き抜ける。

楓は逃げようとあがくがびくともしない。

「嫌だつ。助けて……綜ちゃんっ！」

無意識にその人を呼んでいた。

「無駄だと……」

「楓っ！」

「なに？」

聖は動きを止め、名を呼んだ主を見る。

目が合った瞬間、聖は小さく舌打ちすると、相手の拳を避けて素早く楓から数メートル離れる。

戒めが解け、楓はそのままその場に崩れ落ちる。

「楓っ」

声が聞こえた。

ずっとずっと聞きたかった声。

もう二度と聞けないのかもしれないと思った声。

「楓！」

引き上げられ、そのまま抱きしめられる。

温い。

そう思った瞬間、涙が溢れ出した。

夜狼（1）

「綜ちゃん……」

綜一狼の胸に顔を埋めて、楓は子供のように泣きじゃくる。

「遅いつ。どうしてもっと早く俺の名前を呼ばないっ」

怒った声。

でもその声には優しさがにじみ出ている。

「呼んだわ。何度も心の中で。けど、声に出して呼んじゃだめだっ
て思ったから」

「馬鹿だ。どうしてそう思う」

苛立たしげに言葉を吐き出す。

「嘉神綜一狼。こんなところで会うとはな」

聖が低く笑う。

「それはこちらの台詞だな。お前たちのしつこさには感服する」

静かに、けれどその声には、深い怒りが織り込まれている。

「お前ごときが私に逆らうか。その女、コチラに貰おうか」

楓は、自分を抱きとめている綜一狼の手に力がこもるのを感じる。

その力に勇気付けられる。
自分を抱きしめているこの手は信じられると思う。

「綜ちゃん、一人で立てる。ありがとう」

そう言っつて、楓は綜一狼から体を離すと聖に瞳を向けた。
楓は真っ直ぐ聖を見据える。

「十年前、私は『ヒジリ』に記憶を封印された。空の涙スカイティアの在り処と一緒に」

綜一狼が驚ろいたように楓を見る。

「ほお」

「私がすべてを忘れてしまいたいと、そう望んだから」

『僕がしてあげられることは、こんなことしかないんだ。全部、忘れてしまつといい。僕のこと悲しい悪夢も』

憶えていてほしいと言つたのに、すべての記憶を封印してしまつた。

それは『ヒジリ』にとつて悲しい選択だつたはずだ。

「でも、分からないこともある。あの人は？ 私の好きだつた『ヒジリ』はどうしたの？」

会つて謝りたい。

悲しみに負けて逃げ出して、ずっと忘れていたことを。

「言っただろ。あいつはもついない」

聖はそう言って低く笑う。

「嘘っ。だって、私は『ヒジリ』に会ったわ」

『やっと会えたね』

そう言ってくれたのは確かに『ヒジリ』だった。

「ああ。ほんの数分、俺の気まぐれで表面化させてやっただけのこと。もつとも、もう用は済んだからな。消し去ってやった」

「嘘……」

「それよりも、思い出してくれたのなら好都合だ。やはり、お前には一緒に来てもらう」

聖が楓に瞳を向けたのを見て、綜一狼は楓の前に立つ。

「お前には、二度と楓に触れさせないっ」

そう言うと綜一狼は、聖に殺気だった目を向ける。

バンッ！

「クッ」

その瞳を受けて、聖は不愉快そうに眉根を寄せる。

その瞬間に、楓はその場の空気が瞬時に重くなるのを感じた。

「え？」

自分を守るように盾になっていた綜一狼が、小さくつめきその場に崩れ落ちる。

慌てて支えた楓も、その重さに耐え切れずその場に座り込む。

「綜ちゃん！」

綜一狼の体には無数の切り傷が付いていた。

ガラスの破片が飛んできたかのように、小さな傷が、顔や腕、足に付いている。

「そういうことは、実力を伴わせてから言っただな。出来もしないことを口にするのは、ただの愚か者だ」

そんな綜一狼の姿を聖は冷たく見下し、そう言い放った。

夜狼（2）

「大丈夫だ」

心配そうに自分を除きこむ楓から体を離し、綜一狼は立ち上がる
と聖を睨む。

「もちろんだ。実力がないかどうか、試してみろよっ！」

そう言うと、綜一狼は聖に向かっていく。

「馬鹿か。私の力がまだ分からないか？」

殴りかかる綜一狼をスレスレのところまで避け、聖は小さく笑う。
その時だった。

ザシュッ。

風を斬る音がした。

避けたはずの聖の頬から血があふれ出す。

「まさか……」

自分の頬に触れ、聖は信じられないと言っように、目を見開く。

「特別なのは自分だけだと思っなよ」

不敵な笑みを浮かべ、綜一狼は聖に言い放つ。

「なるほどな」

その言葉に聖は息を吐き出し、血の付いた頬を手の甲で拭き取る。

「いいだろう。相手をしてやる」

そう言うと、目の前に落ちていた瓦礫の山に目を向ける。

ゆっくりと瓦礫の欠片は宙に浮いたかと思うと、一直線に綜一狼目掛けて飛んでいく。

シュツ。

風を斬る音が鮮明に耳に届く。

綜一狼は機敏な動きで一つ一つを避けていく。

「チツ」

だが、大きな瓦礫は避けたものの、その他無数にある小さな欠片は避けようも無く、まるでカマイタチのように綜一狼の体中を切り裂き、無数の傷を付けた。

綜一狼も攻撃をしかけるが、それらを聖は軽やかに受け流している。

綜一狼の拳は、聖に当たることなく空をきるばかりだ。

「なるほどな。少しは能力があるようだが、子供騙しだ。期待はすれだな」

そう言うと、綜一狼に軽く蹴りを入れる。

「ぐわっ」

その蹴りは、見た目以上の力が加わり、綜一狼は、数メートル先の壁に叩きつけられる。

「綜ちゃん！」

楓は悲鳴に近い声を上げる。

「さて、どうする？」

第二刃の用意もすでに出来ている聖は、その場にゆったりと立ち腕組をしたまま、観察するかのように綜一狼を見る。

体中に傷を付けたその姿は、端から見ても痛々しい。

当の綜一狼自身も、ひどく表情を歪ませて、立っているのもやっとなんか感じだ。

「もうやめてっ」

「ああ。やめてやるぞ。お前が俺と来るならな」

溜まらず叫んだ楓の方を見て、聖はそう言い放つ。

「なっ」

その言葉に綜一狼は絶句する。

「……」

楓は両手を握り締め綜一狼を見る。

今の状態で第二刃を食らえば、今度は大きな瓦礫を避けるのも危

うい。

あんなものがまともにあたれば、怪我どころの話ではない。
下手をすれば死んでしまふ可能だってある。

「楓、相手にするな。奴はどっちにしろ俺を殺すつもりだ。裏切り者の血を引く俺を」

口を開きかけた楓に向かって、綜一狼は落ち着き払った声でそう言った。

夜狼（3）

「裏切り者って……どういうこと？」

綜一狼から出た唐突な言葉の意味が分からず、楓は綜一狼に答えを求めるように視線を向ける。

「元々、空スカイティアの涙を持って逃げたのは、俺の母親なんだよ。楓と同じなんだ。俺も嘉神の両親とは、血のつながりは無い。俺の本当の母親ナイトウルフは夜狼だった」

向けられた視線を受け止めて、綜一狼は淡々と言い放つ。

あまりにも突然の告白に、楓は暫くの間言葉を失う。

綜一狼も自分と同じように、血のつながりのない家族。

しかも、本当の母親は、聖と同じ夜狼ナイトウルフ。

つまり、綜一狼も夜狼ナイトウルフということになるのだろうか？

「う、嘘」

楓は呆然と綜一狼を見る。

「昔、独裁的な長に反発して、夜狼ナイトウルフの一族に反乱が起きた。その筆頭が俺の母親だ」

「……」

「相手の特殊能力は、こちらに不利なものだった。だから、その力を弱めようと、力を維持するために必要な、空スカイティアの涙を持ち出した」
「小癩な手だ。その程度のことです、俺に勝てると思ったのか」

聖は口元を歪める。

「思ったさ。現にお前は、必死に空の涙を探している。力は徐々に弱まっているはずだ」

綜一狼の言葉に一瞬、聖は不愉快そうに眉を顰めたが、次の瞬間には狂ったように笑い出した。

「そうだとしても、お前では俺に勝てない。どちらにしる無意味だ」
「……」

聖の言葉に、綜一狼は唇をかみ締める。

「そろそろおしゃべりは終わりだ。どうする？ 楓」

瞳が楓の姿を捉える。

聖の周りには瓦礫の破片が浮いたままの状態。

暗に、いつでも攻撃できるのだと脅しをかけている。

「ふざけるなつ。お前の目的は空の涙のはずだ」

「ああ。そうだ。そしてその在り処を知る楓を欲するのは自然なことだろ？」

そう言い、楓に悠然と微笑む。

ここで大切な人を見殺しになど出来るはずもない。

「……」

楓はゆっくりと聖の元へと向かう。

「楓！」

止めようとした綜一狼の体を、見えない何かを押さえつける。

「それでいい……それじゃあ、もうこの男も用済みだ」

目の前にたどり着いた楓を満足げに見、聖は小さく口元を歪ませる。

その場の空気が重たくなる。

「そんな！ 約束が違うわ!？」

「悪いな。お前との約束の前に、ナイトケルブ夜狼には掟がある。裏切り者は生かしておかないという、掟がな。そちらを優先させてもらう」

「やめてっ」

シュツ。

空を切り、瓦礫の破片が刃となり、綜一狼目掛けて飛んでいった。

夜狼（4）

ザッ。

だが、それはすべて綜一狼に当たることは無く、壁に当たりバラバラと落ちていく。

「？」

不自然に、まるで瓦礫が綜一狼を避けたかのようなようだった。この事態が飲み込めず、楓と綜一狼は聖を見る。

「くっ」

表情を歪ませ、聖は額を押さえ込みうめき声を漏らす。苦しそつに静かに、その場に膝を着く。

「どうしたんだ？」

綜一狼が、聖のその姿を見つめ訝しそつに言葉を吐く。

「……楓……逃げて……」

うめき声に紛れて聞こえた声。楓はハッとす。

「ヒジリ？ ヒジリなの？」

思わずそのまま聖に駆け寄り、その顔を覗き込んだ。

「行って……早く……スカイティア空の涙を」

その言葉と自分を見つめる瞳で確信を持つ。

自分が会いたかった『ヒジリ』なのだ。

本当の聖。

まだ消えては居なかったのだ。

また会えた。

「けど、ヒジリ……」

「大丈夫。僕は……大丈夫だから。これを持って行って」

聖は金色の小さな鍵を楓に手渡す。

「これは？」

「スカイティア空の涙が入っている宝石箱の鍵」

「分かった。待っててヒジリ。お願いだから消えたりなんかしないで」

一度聖の手を握り締めてから、楓は立ち上がると、綜一狼に瞳を向ける。

「綜ちゃん、歩ける？」

「平気だ。急ぐ」

楓と綜一狼は駆け出す。

「楓。お前と聖。一体どういう関係なんだ？」

走りながら綜一狼は楓に言葉を向ける。

「……聖は、私がまだ南条家に来る前に知り合っただの。怪我をして、うちの前で倒れていたのを私が見つけて、ずっと看病した。自分のことも名前しか覚えていなくて、でもすごくいい人だったから、パパとママはすごく気に入って、思い出すまでうちに居ていいってことになって……」

本当のお兄さんが出来たようですごく嬉しかった。

面倒くさがらずに、小さな自分の遊び相手もよくしてくれた。

「私の知っている聖は優しい人なんだよ」

少し気弱なくらいに優しい人。

「会ったことはなかったが、聞いたことがある。一族を束ねる夜狼ナイトウルフの長は、異なる二つの人格を持っているって。多分楓が会ったその聖と、一族に指示を出していた聖は別者だろう。俺が聞いている聖は、ひどく残忍で冷酷非道な男だから」

楓の言葉に、綜一狼は冷静な声で答える。

「そう……」

綜一狼のその言葉で、やっと確信が持てる。

自分の記憶はやはり確かなものだったのだ。

「暫くして、突然ヒジリが帰らなくちゃいけないって言いだして。その時に、私はどうしてもヒジリにいなくなつてほしくなかった」

だから聖がたった一度見せてくれた綺麗な宝石箱を持ち出した。中身が何かなんて考えなかった。

ただ、大切なそれがなくなれば、きつと見つかるまで帰らないと思っただの。

小さな子供の浅はかな考え。

「それが空スカイティアの涙か」

「多分そうだと思う。宝石箱には鍵がかかっていたから、中をみたことはないけど」

聖は、いつもポケットに忍ばせて、時折、悲しそうに一人でその宝石箱を眺めていた。

「でも分からないよ。どうしてヒジリスカイティアが空スカイティアの涙を？」

「母さんたちが反乱を起こした時、裏切り者が出てそれで、空スカイティアの涙を奪うのを失敗したと聞いていた。だから、てっきり空スカイティアの涙は、奴らが持っているとはかり思っていたんだが……」

「裏切り者はヒジリスカイティアってこと？」

「そう考えれば辻褄が合う。楓の知っている聖が反乱に加担したが、途中でもう一つの人格が表に現れ空スカイティアの涙を奪った。だが、一族の元に付く前に、また人格が入れ替わる」

「でも、どうしてそんな反発しあう人格が出来上がったしたんだらう」

「そこは俺にも分からないが、今はとりあえず空スカイティアの涙だ。楓は、隠し場所を思い出したのか？」

「それが……」

綜一狼の問いに、楓は言いよどんだ。

夜狼（5）

綜一狼と始めてであった場所。

木漏れ日が眩しいあの場所。

そこに隠した。

けれど、それがどこなのか、いまだ曖昧なままだ。

「綜ちゃんは、私とはじめて会った場所、覚えてる？」

「楓とはじめて会った場所？」

「うん。その、十年前に、私が『南条』になる前に、実は一回会ったことがあるんだよね。綜ちゃんと。でも、さすがに覚えてないよね」

会ったのは、あの時たった一回きり。

それから再会したのは、もっと後だ。

楓は記憶をヒジリに封印されていたから、覚えていないし、綜一狼にしても、その話題を出さないとところをみると、覚えてはいないだろう。

「忘れるわけないだろ。はっきりと覚えている」

が、綜一狼の答えは予想外のものだった。

「え！？ 覚えてるの？」

「ああ。なのに南条に引き取られて、俺と会った楓は、まったく忘れてるし、かなりシヨックだったな」

綜一狼の言葉に、楓は目を見開く。

「そつか。だから南条に引き取られて始めて会った時、あんなに驚いた顔をしていたのね」

「驚くさ。正直、空中庭園で会ったのは、半分夢だと思ってたんだ。それが突然、目の前に現れたんだから」

「空中庭園？」

木漏れ日が眩しい温かなあの場所。

それが『空中庭園』なのだろうか？

「そう。学園の上層部にある場所だ。俺が気に入っているから、生徒会長権限で、一般生徒の立ち入りは許可していないから、楓も知らないだろうな」

「うん。知らない。そんな場所があるなんて……」

ここに静輝でもいれば、職権乱用だ。と、ツッコミを入れていただろう。

「大切な場所だからな。俺と楓が始めて会った場所だ」

「でもそれなら、教えてくれたらよかったのに。そうすれば、何か思い出したかも知れないじゃない」

不満げに楓はそう言い、綜一狼を見る。

「……楓には、自力で思い出してほしかったんだよ。それなのに、聖を見た時は、思い出しかけたくせにさ。俺のことは、微塵も思い出さないし。何か癪だよな」

「うっ。ごめんなさい」

楓は返す言葉もない。

綜一狼がそんな想いを抱えていたなど、この十年まったく気づかなかった。

記憶を封印されていたとはいえ、ひどく申し訳ない気持ちになっ
てしまう。

「いいさ。結果的に思い出したわけだし。それに、過去に囚われるのは馬鹿馬鹿しい。俺たちは、ここで決着をつけて、未来に進もう」「うん！」

ずっと思い出せない過去に囚われ、いつも変わることを恐れて、未来なんて考えもしなかった。

けれど、今はそれほど恐いとは思えない。

それは、隣りに綜一狼がいるからだ。

綜一狼はいつだって、楓に勇気と元気をくれる。

恐くないと言えは嘘になる。

けれど、もう逃げるのはやめにしよう。

自分に何が出来るかはわからないが、今は自分に出来ることをしよう。楓はそう決心するのだった。

空の涙（1）

地下から抜け出ると、その場には静揮と守屋。それにルナが立っていた。

もうすでに朝日は昇り始めていて、ずっと地下にいた楓は、あまりの眩しさに目を細める。

「楓っ。無事……………」

言いかけたまま、静揮は固まってしまった。

なにせ、楓の格好と見たら、シャツのボタンが見事になくなり、ブラジャーがチラリと見えているような状態。

その上、体中小さな傷や打撲の跡、とても無事などと言える姿じゃない。

「ありやま。南条のお坊ちゃん固まっちゃったよ。何があったんだ？」

じつくりと楓のセクシー（？）な姿を見て、守屋は呑気な声で言う。

「そ、そうよっ。何があったの！ まさか、嘉神に襲われたの！」

守屋を押しつけて、ルナが見当はずれな解釈をする。

「ま、まさか、てめえっ！ いきなり『楓が呼んでる』とか言っつて、消えたかと思っつたら、か、楓に無体なことを……………」

ルナの言葉に我に返り、静揮は今にも殴りかからんばかりの勢いで、綜一狼に詰め寄る。

一応、綜一狼も傷だらけなのだが、楓の変わり果てた姿に、すっかり血が上っている静揮には見えていない。

「ち、違っの！ これは聖に……で、でも、何にもされてないから平気っ」

楓は慌てて二人の間に割って入る。

『聖』という単語に、更に表情を険しくした静揮を見て、言葉を付け足す。

「どっこういうことなんだよ。一体っ」

頭をかきむしりながら、静揮は苛立たしげに言葉を吐き出す。

「えっと。その色々あって」

「色々ってなあに？」

あまりにもたくさんの方があきすぎて、うまく説明できず楓は言葉を濁すが、ルナは瞳をキラキラとさせて楓に詰め寄る。

「ん？ そっいえば、どうしてルナがここにいるの？」

その場でハタツと気が付く。

ルナとは、地下に行く前に別れてそれっきりだったはずだ。

「えーと」

その問いに、ルナはあらぬ方角を見る。

「地下での悲鳴はこの女だったんだよ。人騒がせこの上ない」

ルナの代わりにそう答えたのは守屋だ。

ルナをジロリと睨み、ワザとらしいため息を付く。

「だって！ 大きなネズミが私の足に乗ったのよっ。すごく気持ち悪くてつい、あんな声が……」

最初は意気込んで、けれど楓の姿をチラリと見て、その声は段々小さくなっていく。

「なあんだ。そうだったんだ」

ことの真相に、楓は思わずクスリと小さく笑う。

「今は時間がない。話は後だ。行くぞ、楓」

そういいながら綜一狼は、自分の着ていた上着を楓に羽織らせる。

「あ。う、うんっ」

こんなところで和んでいる場合ではない。

綜一狼は楓の手を取ると、そのまま何も走り出す。もちろん向かう場所は空中庭園だ。

「待てよっ。俺も行く」

その後を静揮が慌てて追いかける。

「あなたは行かないの？」

後に残った守屋にルナは言葉をかける。

「ああ。うーん。あんまり、姫さんには関わるなって言われてるしな」。あんたは？」

「もちろん行くわよ。だって何だか楽しそうだし」

そう言つと、妙にウキウキした様子でルナも後を追う。

「物好きな連中だぜ。……つつても、俺が行かないわけにはいかないよな」

もうすでに姿の见えない四人の後を、ゆったりとした足取りで追う守屋だった。

空の涙(2)

朝になったといつても、夜が明けてまだそれほど立ってはいない。学園の中は静まり返り、楓と綜一狼。二人が走る靴音だけがその場に響く。

「綜ちゃん。あの、透子さんはどうしたの？」

走りながら、楓はずっと気にかかっていたことを聞く。

「ああ。今、医務室にいるはずだ。途中で見つけて、お前が下に落ちたから助けてくれて言つて、そのまま気を失ったんだ」

「そう……。大丈夫なのかな？」

どうやら聖の暗示は解けたらしいが、意識がなくなったと聞き、楓は不安になる。

「大丈夫。聖に操られていたのが解けて、一時的に意識を失っただけだ」

「綜ちゃん、気付いてたの？」

あっさりと言い放つた綜一狼を、驚きの表情で楓は見る。

「まあな。時期が合いすぎてたからな。聖が現れた時に早山のことはずぐに分かった。透子のことにしても、見つけたときは、早山と同じ状態だったから」

そういつて息を吐く。

「でも戻ったんだよね。よかった」

それにしても、ナイトウルフ夜狼の能力は本当にすごい。

「……あの、綜ちゃんのお母さんて今はどうしてるの?」

先ほどの話を聞き、楓はそのことがどうしても気になってしまったのだ。

「死んだ。一番の首謀者だからな。一番目を付けられていて、結局最後はやつらに……な」

楓の問いに、綜一狼はサラリと答える。

「ごめんなさい」

『やつら』それはナイトウルフ夜狼のことなのだろう。

「別に謝ることじゃない。もう十年以上前の話だ」

「私、そんなことちっとも知らなかった」

綜一狼が嘉神家の養子だということも、ナイトウルフ夜狼の一族だということも。

こんなにも近くにいたのに、本当に何も知らなかった。

「いつかは、話そうと思ってただけだな。きっかけがなかったから。でも、もう全部話す。この件が片付いたら全部。楓に言いたいことがあるんだ」

「え?」

その時、猛ダッシュしてきた静揮が二人の間に入り込む。

「やっと追いついた。で、どこに向かっているんだよ」

二人を交互に見て、静揮は訪ねる。

「さて、おしゃべりは終わりだ急ぐぞ」

そう言つと、静揮を放つて綜一狼は走るスピードを速める。

「て、こらっ。無視すんなよっ。楓！ どういうことなんだっ」

先に行ってしまった綜一狼の代わりに、楓を捕まえて説明を求め
る。

「うん。あのね」

楓は今までのことを簡単に説明する。

「そういうことは早く教えるよ。空中庭園だな。急ぐっっ」

そう言つて、静揮は楓の手を取る。

思わず、楓はその手を反射的に振りほどき立ち止まる。

触れられた瞬間に、静揮の告白が脳裏によみがえってしまったの
だ。

「あつ。」「ごめんなさい」

「なに謝ってるんだよ。急ぐんだろ？」

ひどく困った顔をしている楓を見て、静揮は苦笑しつつ走り出す。

（私、どうしたんだろう？）

ついこの間まで、手を繋ぐなど何でもないことだったはずなのに、今はこんなにも、意識してしまう。

（今は考え込んでる暇はないよね）

頭をブンブンと振り、おかしい気持ちを振り払うと、楓も二人の後に続き走り出した。

空の涙(3)

(ああ。ここだった)

その場にたどり着いた時、懐かしさが胸いっぱい広がった。
地面を覆いつくす芝生の絨毯。

その場に一際大きな大木が一本ある。

朝日を受けて、緑が美しく光っている。

ここに空の涙を隠した。
スカイティア

そして、綜一狼と出会ったのもここだったのだ。

空の涙を隠して帰ろうとしたその時、初めて綜一狼の存在に気が付いた。

ふてぶてしく、その場に立ち尽くしていた少年。

ひどく不機嫌な冷たいその眼差しを、今ならはつきりと思いつくことが出来る。

「楓、思い出したか？」

懐かしさに浸っていた楓は、綜一狼の声に我に返る。

あの時の少年が、今は優しい瞳を向けて自分を呼んでいる。

何とも不思議な感じだ。

「うん」

楓は、大木の前にいる綜一狼に駆け寄る。

「私が空の涙を隠したのはこの中」
スカイティア

庭園の中で、一際大きな桜の木を指差す。

「中？」

「そう。この桜の木には、分かり辛いけど、根の部分に空洞があるの」

「……！　ここか？」

念入りに桜の木を目視していた綜一狼は、小さな空洞を発見する。地表にまで姿を見せている根っこ。

もう大分前からここに根を下ろしているものらしい。

一つ一つの根の大きさも相当なものだ。

その中で、ちょうど小さな洞窟のような空洞がある。

「よくこんなところを見つけたよな」

静揮が感心したように言う。

「そう。確か……」

楓は根の間に手を入れる。

十年。

その歳月の間この場所にしっかりとあるのか、多少の不安はあるが、今はあるということ^{スカイティア}を信じるしかない。

一刻も早く、空の涙を探し出さなければならぬ。

今これを聖に渡すのは危険だ。

「痛っ」

複雑に絡んだ根が、楓の手を阻む。

小さな頃は簡単に入ったはずなのに、今は奥まで入れるのも一苦労だ。

「大丈夫か？ 楓。俺が変わろうか？」

それを見守っていた静揮が溜まりかね声をかける。

「ううん。平気。ももう少しだから……」

手が何かを掴む。

確かな手ごたえ。

楓はそれを掴んだまま、一気に手を引き抜く。

「あつた！」

手にすっぽりと収まる小箱。

ところどころ汚れてはいるが、確かに十年前に隠したものだっただ。

「楓、無茶をするなつ。手が傷だらけだろうがっ」

楓の手から腕の半ばまで、切り傷が無数についている。

無理に手を引き抜いた所為で、木屑で傷めてしまったのだ。

「あのね。全身傷だらけの綜ちゃんには、言われたくないわ」

あきれ返ったように、楓は綜一狼に言う。

「俺はいいんだ。でも、楓に傷が付くのは許せない」

きっぱりと綜一狼は言い放つ。

「こんなことなら、保健室から消毒液の一つも持ってきてくればよかったな」

と、言ったのは静揮だ。

同じく楓の傷だらけの手を見て、眉を顰める。

「そんなことより！ これ、開けるよ」

このままだと罅が開かないと判断した楓は、ヒジリから受け取った鍵で宝石箱を開く。

「これが空の涙」
スカイティア

それを見て静揮は言葉を零す。

外はボロボロだというのに、中は一片の汚れもついてはいない。

スカイティア
空の涙は、透明なガラスケースの中で、美しいマリンブルーを称えていた。

空の涙(4)

キラキラと光る真っ青なその色は、確かに空を連想させる。

「綺麗……」

「にしても、スカイティア空の涙がまさか、こんなただの青い砂みたいなもんだとはな。もっと宝石っぽいもんかと思ってたけど」

スカイティア空の涙を繁々と見ながら、静輝はそう感想を述べる。

「ナイトウルフ夜狼にとっては、スカイティア空の涙に比べれば、宝石なんてただの石ころみたいなものだ」

自分たちの能力を維持するために、必要不可欠なもの。
これを持ち出すために、自分の母親を含め、何人が命を落としたか。

綜一狼はきつく拳を握りしめる。

「綜ちゃん」

その拳に、楓は気遣わしげにそっと触れる。

温かく柔らかな温もり。

「ああ。大丈夫だ」

今は感傷に浸っておる場合ではない。

綜一狼は、楓を安心させるように、落ち着いた声でそう答える。

楓はほっと息を吐き出し、フワフワとした笑みを浮かべる。

愛おしい気持ちがあふれ出し、綜一狼からも自然と笑みがこぼれる。

「……で、コレをどうするんだ？」

そんな二人の様子を、静輝は何ともいえない表情で見っていたが、おもむろにそう言葉を吐く。

「俺もぜひ聞きたいな」

突然聞こえてきた、もう一人のその声に、三人は一斉に振り返る。

「聖」

その姿を見て楓は言葉を漏らす。

皮肉な笑みを浮かべ、自分を見ているその瞳は冷たい。

楓は唇をかみ締める。

今目の前にいるのは、自分の知っている『ヒジリ』ではない。

見た瞬間に、楓にはそれが分かった。

「俺から逃げ切れると思ったのか。言っただろう？ 逃がしはしない」と

冷たい声が降り注ぐ。

「いまいち状況は分かんねーけど、楓に手を出すのは俺が許さねえ」と

スツと楓の前に立ち静揮は聖を睨む。

「静ちゃん、無茶だよっ」

緊迫した空気を感じ取り、楓は思わず静揮の制服の袖を握り締める。

綜一狼ですら歯が立たなかつた相手。

いくら静揮でも、綜一狼の二の舞になることは目に見えている。

「……」

静揮は後ろを振り返り、楓を見下ろすとニツと笑いかけ、いつものように優しく楓の頭に触れると、そのまま腕を回し抱きすくめる。

「！」

「なっ」

綜一狼が声にならない声を発し、楓もそのまま硬直した。

守るべきもの(1)

「楓。俺が時間を稼ぐから、その間に、スカイティア空の涙を持って綜一狼と行け」

困惑しきっていた楓は、静揮のその言葉にハッとする。

「そんな、行けるわけ……」

「俺はお前の兄貴だ。妹を守るのは兄貴の役目だろ？」

その言葉に驚き見上げると、優しく微笑む静揮と目が合う。

「楓は俺を家族として好き。そうだろ？」

静揮の言葉に楓は答えを躊躇する。

静揮の言葉は間違っていない。

いくら考えても答えは同じだった。

静揮への気持ちは綜一狼の好きとは違う。

まったく異なるものだ。

それは恋とは違う。

恋にはなりえない気持ちだ。

それを静揮に伝えるべきなのか迷う。

(逃げちゃだめだ)

ここで気持ちを偽るのは逃げることだ。

楓は静揮を見て頷く。

それを見て、静揮は満足げに微笑む。

「お前が本当に思ってるのは誰かなんて、とっくに気付いてたよ。けどな、やっぱり俺はお前が好きだ。だからせめて、『兄』としてお前を好きでいることを許してくれ」

それが静揮の出した答え。

「……ごめんなさい」

静揮の優しさが痛くて、楓は泣きたくなくなってしまった。

「だから謝るなって。いいから行けよ」

そう言つとそのまま楓を開放し、軽く綜一狼の方へと押しやる。

「綜一狼。楓を頼む」

「言われなくても分かつてる。とりあえず死ぬなよ」

楓の手を取ると、綜一狼はもう一度静揮を見て無表情のまま言い放つ。

「……お前、それは洒落にならないぞ」

冗談なのか本気なのか分からない綜一狼の言葉に、静揮は思わず苦笑してしまう。

「静ちゃん、絶対絶対、無事でいてね」

真剣そのものの顔で楓は、静揮に言葉を向ける。

「だから、お前ら洒落にならないって。平気だ。いいからサッサといけよ」

静揮は乾いた笑いを浮かべつつ、二人に向かって手を払う。

「泣かせるな。あの女のためにその命を投げ出すか」

楓たちが消えた後、聖は静揮を馬鹿にしたように笑う。

「命を投げ出す？ 馬鹿を言うなよ。あいつを泣かせるようなこと、俺がするわけないだろ」

自分がいなくなったら楓は絶対に泣く。

そんなことはあつてはいけない。

楓の涙ほど嫌いなものは静揮にはない。

兄として楓の側にいる。

それはそれでいいかもしれない。

兄として楓の姿を見守っていくのも一つの愛し方だ。

(だけど、暫くはふつきれそうにないな)

格好つけてみたものの、やはり楓を好きな気持ちは変わらない。

少しずつ変えていくしかない。

人は変わるものだ。

粽一狼がそうであったように。

静揮は小さく笑う。

サアアッ。

風が一際強く吹きぬける。
静揮はそのまま聖へと向かっていった。

守るべきもの(2)

楓と綜一狼は校舎に入り込み、階段を駆け上がる。

「楓、上に行こう。とりあえず、屋上を目指すぞ」

「綜ちゃん、先に行つて。やっぱり、静ちゃんだけ置いていくなんて出来ない」

楓は階段に差し掛かったところでそう言い足を止めて、スカイティア綜一狼に空の涙を差し出す。

聖は普通の人間には無い能力を持っている。

いくら武道に長けている静揮でも、太刀打ちできるような相手じゃない。

静揮が傷つくのは目に見えている。

それなのに、静揮を見捨てていくなど、楓に出来るはずはなかった。

それを受け取ることをせず、綜一狼は小さく息を吐き出す。

「お前が行つてなんになる？ あいつの気持ちを台無しにする気か？」

「だつてっ！ 静ちゃんは私の大事な家族だものっ。もし、静ちゃんに何かあつたりしたら私は……」

スカイティア空の涙を強く握り締めたまま楓は俯く。

頭を過ぎるのは好きだった両親。

静揮の気持ちは嬉しい。

けれど不安になる。

自分の前から、いなくなってしまうのではないかと。

あの優しい笑顔が消えてしまったら、きっと自分は耐えられない。

「……たくつ。守屋」

その場をここで動きそうにない楓を見て、綜一狼は仕方がないというように肩をすくめると、男の名を呼ぶ。

「あいよ」

返事は即座に返ってきた。

もう一つ上の階の踊り場から、守屋がひょっこりと顔を出す。まるで、ずっとそこで待っていたかのような絶妙なタイミング。

「そういうわけだから、お前が静揮の助っ人に行つて来い」

「そういうめんどいのはいつも俺なのな」

綜一狼の言葉に、守屋は不服そうに唇を尖らせる。

「どつちかつーと、姫さんとランデブーの方が、俺的にはやる気がするんだけどな。手なんか繋いでさ。綜一狼だけ役得だよなー」

しっかりと楓の手を握っている綜一狼をチラリと見ながら、そんな言葉も付け足される。

「この非常事態に、お前の減らず口に付き合っている暇はない。行くのか、行かないのかどつちだ？」

綜一狼は、殺気だった目でジロリと守屋を睨む。

「うっ。あんたはいつつもそうだ。人権無視で訴えてやるっ」

その殺気を受けて、守屋はその場からいきなり姿を消す。

「え……ええっ」

忽然とその場からいなくなった守屋の姿に、楓は素っ頓狂な声を上げる。

本当に唐突に、姿が見えなくなったのだ。

一瞬の出来事だった。

「さ、行くぞ」

「だ、だって、あの人は？ き、消えちゃったんだよっ？」

あたふたとろたえる楓。

「いいんだよ。あいつは聖のところに飛んだんだ」

綜一狼はサラリと言い放つ。

「と、飛んだ？」

「ああ。あいつも夜狼ナイトウルフだからな。守屋の特殊能力なんだよ。瞬間移

動は」

「あの人も夜狼ナイトウルフ!？」

衝撃的な事実。

確かにおかしな人だとは思っていたが、まさか守屋までもが夜狼ナイトウルフだとは思いつかなかった。

「母さんと守屋の兄弟は、一緒に一族を抜けた仲間だった。あいつに任せておけば平気だ。逃げ方だけは心得てるから、何とかするだ

る
」

「そ、そうなの？」

「そうなんだ。急ぐぞ」

今だ呆然としている楓を、綜一狼は引っ張って、走り出した。

守るべきもの(3)

最後の階段を上がりきったところで、屋上の扉が見えた。

屋上の頑丈な扉の横にある機械に、綜一狼はマスターカードをスキャンさせ開ける。

ガチャリッ。

キーが外れた音が響く。

扉を開けると、その風圧に一瞬飛ばされるのではないかと言う感覚に襲われる。

風がうねりを上げる音が耳に響く。

「うわぁ」

その景色に楓は思わず感嘆の声を漏らす。

澄み切った青い空。

眼下には、人々の営みの風景。

まるで、一つの町をミニチュア化したような景色。

時計塔から見た夜景とはまた違った美しさがある。

フェンスに身を乗り出して、ソツと下を覗き込んでみる。

高いところが平気な楓でさえ、クラリとしてしまう高さだ。

その上、まるで嵐のような風。

「綜ちゃん。これからどうするの？」

「スカイテイル空の涙をここから流す。確実に失くすためには、この風に流して捨てるのが一番いいと思ったんだ」

確かに、ここから空の涙を流せば回収することなど不可能だ。

スカイティア

「でも、本当にいいの？」

「ああ。こんなものがなくても、人は生きていける。むしろ、こんなものがあるから、奴らは能力に頼って人の心を無くしてしまうんだ」

スカイティア
空の涙を見つめて、綜一狼は言葉を吐き出す。

「うん。分かった。捨てちゃおう」

楓はゆっくりとフェンス越しに移動すると、ガラスケースの蓋を開け傾ける。

その時だった。

「動かないで」

耳元でそう囁かれ楓は動きを止める。
のど元に長く鋭い針が突きつけられている。

「お前はっ」

近くにいた綜一狼でさえ、その気配を感じることは出来なかった。
いや、空の涙スカイティアに気を取られていて、周りに気を配るのがおろそかになっていたので。

「どうして……ルナ？」

聞き間違えるはずはない。

低く冷たい声。

けれどそれは紛れも無く、ルナの声だった。
金色の髪がサラサラと流れ、それは楓の視界にも入る。

「これは仕方がないことなのよ。これが運命なの」

呟いたルナのその言葉は、ひどく苦渋に満ちていた。

「何を言ってるの？」

楓は必死に考える。

今までずっと、ルナは自分の味方だった。

初めて心の底から信頼できた女友達だった。

それが、どうしてのど元に、針を突きつけられているのだろう。

「お前もナイトウルフ夜狼か？」

綜一狼の問いにルナは小さく頷く。

「楓に近付いたのもこれが目的か」

「ええ。だから言ったでしょ？ いつ、どんな人が現れるか分からないって」

クスクスとルナは笑いを漏らす。

その姿に、綜一狼は小さく舌打ちをする。

「嘘……」

「嘘じゃないわ。私の役目はあなたの監視。いつ記憶の封印が解けてもおかしくない状態だったし、予想外にも、裏切り者の息子である嘉神が、楓の側に付いていたから。先を越されては大変でしょ？」

ルナの言葉を、楓は呆然と聞いていた。

守るべきもの(4)

楓は空スカイティアの涙を持つ手に力を込める。

「楓。大人しく、それを渡してちょうだい」
「嫌」

楓はきつぱりと拒絶する

「無駄な抵抗はよした方がいいわ。私、針の扱いはプロなの。こんな小さい針だけど、あなたの喉を貫いて殺すことも出来ないわけじゃないわ」

「でも、ルナはそんなことしないわ」

ルナの言葉に、楓は即座に言葉を返す。

「するわよ」

「しない。絶対にしないっ。ルナがそんなことするはずないっ」

楓は激しい口調で言い放つ。

頑なな楓の言葉にルナは眉を顰め、楓が持っていた空スカイティアの涙を素早く奪い取る。

「きゃあっ」

ルナは空スカイティアの涙を手にとると、そのまま楓を突き飛ばす。
よろめいた楓を、綜一狼が即座に動き抱き止めた。

「本当に嫌になるわ。あなたのそういうところが、あの人にそっくりで嫌になるっ」

「ルナ？」

突き飛ばされたのは楓のはずなのに、ルナの方がよっぽど痛そうな顔をしている。

眉を顰め、怒りと悲しみと、色々な感情を取り合わせたかのようなそんな表情。

「仕方がないのよ。これはあの人の、聖の命令だから。例え、聖があの人じゃなくても、私はやはり彼には逆らえない」

ルナは俯きゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ルナも、もう一人の聖を知ってるのね？」

「楓には前に話したことがあるわよね？ 私の報われない恋の相手。私はあの人のためだったら、命だって捨てられるわ」

「だったらなおさら、今の聖に空の涙を渡しちゃだめだよ。もう一人のヒジリはこんなこと望んでない」

今の聖は冷酷だ。

人を傷つけることなど何とも思っていない。

空の涙を手に入れるためには手段を選ばない。

そんな相手に、空の涙を渡すなど、あの優しいヒジリが喜ぶはずはない。

楓の訴えにルナは顔を背ける。

「あの人がもつとも気にかけている少女が居る場所だから、ここに来れば、あの人が戻ってくるかも知れない。私は賭けをしたの。けれど、あの人は消えてしまった。賭けは私の負け。今は、あの男に

従っしかないのよ」

「まだ消えたわけじゃ……」

「綜一狼っ」

緊迫するその場に、唐突に守屋が現れる。

ちょうど楓と綜一狼のすぐ目の前。

隣りには、ぐったりとした様子の静揮の姿。

「静ちゃんっ」

守屋の肩に掴まり俯いている静揮は、楓の呼びかけにも反応がなかった。

完全に気を失っている。

「どういうことだ？ 守屋」

ジロリと守屋を睨み、綜一狼は威圧的に言葉を放つ。

「俺はちゃんと止めたぞっ。お前の敵う相手じゃないし、逃げようって。でもこいつ、人の話全然聞かないし、何度やられても向かっていつちまうし。氣い失ってやっと、とっ捕まえてここまで運んできたんだからなっ」

綜一狼の視線に思わずたじろく守屋。

「で、何でお前は無傷なんだ？ その上、お前がここに飛んできたら、奴にここの場所が分かってしまうだろうが」

「そんなこと言っても、俺この学園に馴染みねえしどこに飛んだらいいか分かんなかったんだよ。知ってる奴つつたら綜一狼と姫さんくらいなもんだし。俺の能力は移動だけなんだっ。あんな化け物み

たいに強い奴と戦えるわけねえじゃんよっ!」

睨みをきかせる綜一狼に、守屋は必死になって弁解をする。

「最悪の状態だ」

そんな守屋を無視して、綜一狼は額を押さえ呟いた。

届かぬ想い……（１）

「静ちゃんっ。しっかりして！」

「楓は必死に静揮を揺り動かす。
体中傷だらけだ。」

大きな怪我はないものの、無数にある小さな傷が痛々しい。

「平気よ。ただ気を失っているだけ。あの人は殺さないわ」

ルナが楓を見下ろして、静かに口を開く。

「それが、お前との約束だからな」

ルナの隣りには、いつの間にか聖の姿があった。

「約束？」

聖の言葉に、綜一狼は怪訝そうに眉を顰める。

「ナイトウルフ夜狼ナイトウルフに関わる奴以外は殺すな。それがルナが俺に出した条件だ」

聖のその答えに、楓はルナを見る。

「私はただ、血生臭いことが嫌いなだけよ」

その視線を避けるかのように、ルナは楓から顔を背ける。

「ご苦労だったな。わざわざ、スカイティア空の涙を探し出しておいでくれるとはな」

ルナの手にある空の涙スカイティアを見て、聖は嘲りを含んだ笑みを浮かべる。

「後は裏切り者たちの抹殺。それに楓。お前には一緒に来てもらう」「聖、約束が違うわ」

眉を顰めて、ルナは聖に非難めいた瞳を向ける。

「お前が出した条件は殺さないことだろ？ 俺は楓を殺すつもりはない」

「だったら……」

「楓は知りすぎている。記憶の隠蔽も、一生効果があるわけじゃない。殺すと言われるれば、連れ帰るしかないだろ？」

聖の瞳が楓の姿を捉える。

「これ以上、お前に楓を触れさせない」

綜一狼のその言葉は静かながら、底知れない怒りが感じられる。

一触即発の空気がその場を支配する。

「……」

その場で最初に動いたのは楓だった。

静揮をその場に静かに横たえようと、綜一狼と聖。

二人の間を阻むように立つ。

「楓？」

そんな楓の行動に、綜一狼は眉を顰める。

「私は……もうこんな嫌。喧嘩して誰かが傷つくのは嫌だ。聖、綜ちゃんを殺すつもりだって言うなら、まず私を殺して」

淡々と落ち着き払った楓の声が、その場に静かに響く。

何の迷いもない凜とした声。

聖に向けた眼差しに揺らぎはない。

「何を言い出すかと思えば……。言っただろ？ 俺はお前を殺さない」

呆れたように言い放ち、聖は低い笑いを漏らす。

「違うわ。あなたは殺さないんじゃない。殺せないんだわ。だってあなたは『ヒジリ』だもの。誰よりも優しい人だから。心のどこかで、あなたを引き止める何かがあるから。だから、私を殺すことが出来ないんだわ」

強く聖を見つめて楓は言い放つ。

「ずっと思っていたこと。」

『ヒジリ』は消えていない。

いや、本当は消すことなど出来はしないのではないか。

『ヒジリ』は聖なのだ。

心が二つに分かれたとしても、片方がなくなってしまうたら、聖は聖でなくなってしまう。

だからこそ、何かの拍子にもう一人の『ヒジリ』は現れる。

何か心に強く思う時、ほとんど居場所を占領しているもう一人の聖を制して姿を見せる。

自分が大好きだった人。

優しすぎるほどに優しい彼は、自分自身さえ差し出してしまった。そんな彼に、もう一人の自分に打ち勝ってもらうために、楓は心の奥底で眠り込んでいるはずの『ヒジリ』に声をかける。

「なるほど。どうやら命がいららないらしいな」

聖からは笑みが消え、代わりに無表情な顔に冷たい光が宿った。

届かぬ想い……（２）

楓は怯むことなく聖を見据える。

「私は『ヒジリ』を信じてる。聖は私を殺さない。絶対に」

聖に微笑みを向け、ゆっくりと歩み出る。

「無理だつ。奴はもう、楓の知っている聖じゃないんだ！」

綜一狼の声にも、楓は歩みを止めない。

「馬鹿馬鹿しい。何を信じると言うのだ？ あいつはもういないんだ」

聖は言葉をはき捨てる。

楓の行動が理解不能だった。

殺されるかもしれないという状況の中で、なぜ微笑を浮かべていられるのだろうか。

ルナも守屋も、一言も発することなくその光景を見つめている。

不思議な光景だった。

あれだけ余裕を見せて、大きく構えていた聖が、今の楓の姿にたじろきひどくうろたえている。

「ヒジリ。お願いだから出てきて」

聖の前に立ち、楓はそう言葉をかける。

優しく温かい愛しみを込めた声。

「いいかげんにしろっ。いくら呼びかけたところであいつはもういないんだ。聖は俺だっ。俺以外に誰がいるっ。なぜ、俺を認めないんだっ」

目の前にいる楓の腕を、乱暴に掴み取る。

「楓っ」

その様子に、堪り兼ねた綜一狼が走り寄ろうとする。

「来ないで、綜ちゃん」

楓はそれを冷静な声で止める。

楓の腕を掴んだ聖の手に、徐々に力が込められる。

「っ」

痛みに小さく顔を歪めながらも、楓は何の抵抗もすることなく、ただされるままになっている。

「こんなの見ていられるかっ」

一向に手を離さない聖に、とうとう綜一狼が動き出す。と、その時だった。

聖に小さな異変が見られた。

聖が強く掴んでいた楓の腕を開放したのだ。

「いいだろう。殺してやるよ。そんなにあいつがいいのなら、死んであいつに会えばいい」

聖の瞳に明らかな殺気が混じる。

「やめてっ。約束は守って。楓は殺さないって言ったわ。その約束が守れないというのなら、これは捨てるわ」

ルナは声を上げると、空スカイティアの涙の入ったガラスケースを傾ける。

「裏切るつもりか？」

「愚問だわ。私は元からあなたに従うつもりなんてなかったもの。ただ、あの人を救えると思ったから、付いていただけ。だけど、それが叶わないというなら、こんなもの何の役にも立たないわ」

傾けたケースの中から、ほんの数滴青い粒が零れ落ち、風に流されサラサラと飛んでいく。

「ちっ」

聖は眉を顰め小さく舌打ちをすると、楓を開放する。その様子に軽く息を吐き出し、ルナは楓に歩みよる。

「これはあなたにあげるわ」

楓の手を掴み取ると、その手に空スカイティアの涙を握らせる。
楓と綜一狼は驚きルナを見る。

「愚か者が」

聖は忌々しそうにルナを睨む。

だが、ルナはその視線を無視したまま言葉を続ける。

「これはあなたが好きにして。どうしたらいいの。あなたが決めて。けれど最後に教えて。あの人は、本当にまだ消えてはいないの？」

懇願するような眼差し。

「私はそう信じてるよ」

「そう。だから、あの人はあなたを選んだのね」

泣き笑いのような微笑を向け、ルナは小さく呟く。

「ルナ、ありがとう」

楓は空スカイティアの涙をしっかりと握り締めた。

届かぬ想い……（3）

皆の視線が、自分に向けられている。

それをヒシヒシと感じながら、楓はその場から踵を返すと、迷うことなくフェンスの前に立つ。

そのフェンス一つ超えれば、地面は遙か下。

目の前にあるのは青い空。

地面よりも空の方がずっと近くに感じてしまう。

楓はフェンスの隙間から、空の涙をスカイティア持っている手を突き出す。

「やめろっ」

聖が鋭い声を発する。

サアアア。

聖の声と、空の涙が空を舞ったのは同時だった。スカイティア

風に煽られ太陽の光を受けて、粒子一粒一粒に光が宿り青く煌めいていく。

何十年という時から開放され、すべては風と共に消え去ったのだ。

「……お前ら全員皆殺しだ」

低く冷たい聖の声。

狂気の瞳がその場全員に向けられる。

フワッ。

楓の体が唐突に軽くなる。

「え？」

楓の足は地面から離れていた。

それだけではない。

体が徐々に地面から離れ、浮き上がっていく。

見えない何かに吊るされているかのような感覚。

グイッ。

周りを囲うフェンスより高い位置にたどり着いたとき、楓の体は何か**に強く引つ張られ、フェンスを越える。**

「まさかっ」

ことの重大さに気が付き、綜一狼が走り出したが間に合わなかった。

楓は地面から離れ、空に宙吊りの状態になっている。

楓の体を束縛しているなにか。

それがなくなった瞬間に、楓の体は数百メートルの高さから、まっさかさまに地面に落下することになる。

「う、嘘だろ」

その光景に、守屋も強張った声を出す。

「この高さなら、万に一つも助からない。お前が犯した罪。その命で償ってもらおう」

無表情のまま、聖は言葉を吐き出す。

「やめる……」

青ざめた顔で綜一狼が言葉を吐き出す。

いつ落ちるか分からない。

そんな状態の中で、声を出すことさえ恐ろしくなる。

「傑作だ。お前のそんな顔が見られるとはっ。しかし安心しろ。お前もすぐに送ってやるよ。あの世でせいぜい仲良くやれ」

その姿を見て、聖は嘲りの表情を浮かべる。

「……」

ルナも言葉なく青ざめる。

「これが、お前のしたことの結末だ。よく見ておくんだなルナ。……さて、楓。最後に何か言うことは？ それとも、泣いて命乞いでもしてみるか？」

呆然とする面々から、聖は当の本人である楓へと視線を戻す。

恐さで声も出ないのか。

先ほどから一言も言葉を発しない。

どうせ殺すのなら、少しくらい自分に屈したという姿を見なければおもしろくない。

「私は……後悔なんてしない……」

小さく震えながらも、楓ははっきりと言い放つ。

「なに？」

その言葉に聖は眉を顰める。

「能力なんてなくても、人は生きていけるわ。争いのために使われるものなんて必要ない」

声が震える。

当たり前だ。

いつ落ちるか分からない今の状態。

風が体全体を吹き抜けていく。

その度に、そのまま落下するのではないかとい恐怖。

気を失わないようにと、気を張り詰めるだけで精一杯だ。

「……もう聞き飽きた。そのまま、死ね」

その声が合図だった。

楓の姿がその場から消えうせる。

いや、正確には戒めが解け重力が戻り、地上へと落下を始めたのだった。

君への想い（1）

「姫さん……」

守屋は目を見開いたまま、呆然としている。

「いやー！」

叫び、その場に崩れ落ちるルナ。

助けられなかったという悔恨と絶望感が支配する。

「楓ッ」

その中で動いたのは綜一狼だった。

フェンスを軽々と飛び越え、何の躊躇もなく飛び降りる。

「馬鹿な男だ」

その光景に、聖ははき捨てるように言い放った。

落ちる。

楓はその瞬間に思った。

考えていたよりずっと冷静な自分に驚く。

落ちるかもとヒヤヒヤしている時よりも、落ちているという結果が出ている方が安心できるらしい。結果的にどちらも同じ結末なのに、おかしい感じだった。

(言いたかったな。綜ちゃんに……好きだった)

見込みの無い恋ではあったけど自分の気持ちを伝えておきたかった。

でもこんな結末になるのなら、言わなくて正解だったのかもしれないとも思う。

(でも、もう少しだけ一緒にいたかった)

自分のしたことに後悔はない。

けれど、静揮とルナとそれから綜一狼。

その他の大好きな人たち。

もっと一緒にいたかった。

死ニタクナイ。

「綜……ちゃん……」

最後になるだろう言葉は大好きな人の名前。

声がその人に届けばいいのに。そんなことを思う。

(あ……)

思った瞬間に、楓は天使を見た。

光の羽を付けた綺麗な天使。
伸ばされた手が楓の手を掴む。
引き戻され抱きしめられる。
いつか感じた温かな気持ち。

「呼んでくれてよかった。楓の声が俺に力を与えてくれる」

天使は言う。

いつもと変わらない優しい笑顔で。

「私……私ね。綜ちゃんが好き」

夢でも幻でも構わない。

今言わなければ、もう絶対に言えない。

楓は光を纏った綜一狼に、唐突に言い放つ。

そんな楓の姿に驚き目を見開く綜一狼。

「俺もだよ」

けれど次の瞬間には、今までに見せたことの無いような無邪気な
微笑みを浮かべ答える。

その答えに楓もフワリと微笑んだ。

「最期に言えてよかった」

きつとこれは神様がくれたご褒美だ。

あまりにも強く思ったから、綜一狼が天使になってきてくれた。
自分の気持ちも言えた。

それだけで十分だ。

「馬鹿言えよ。最期の訳ないだろ」

「え？」

だが、天使が言ったその言葉に、楓は目が点になる。

「言つたる？ 決着をつけて、未来に進むんだ」

その言葉に、夢心地から一気に現実に引き戻される。

「最期じゃない。始まりだよ」

凜としたその声。

「だって、これは夢じゃ……」

「そんなわけあるか」

「え、ええっ!?!」

その一言で、すべてが現実味を帯びていく。

抱きしめられた力強い腕も、空中で止まっているという不自然な状態も、光の羽を纏った綜一狼の姿もすべてが現実。

そのことにやっと気が付き、楓は言葉を失くし、綜一狼を見つめた。

君への想い(2)

綜一狼の背中に羽がある。

光を受けて、七色に輝く大きく美しい羽。

「綜ちゃん、その羽は……」

「話は後だ。しっかり捕まっている」

綜一狼はあやふやに笑い、楓の言葉を制す。

楓を抱きしめたまま、上へと上がっていく。

アツと言う間に、屋上のフェンスを飛び越え、元の屋上へと降り立つ。

「あなたはいつもそうだ。ギリギリにならないと動かない。かつこうつけなんだよな」

不満そうな守屋の声。

「別に格好をつけたつもりはないけどな」

その場に楓を降ろすと、見る見るうちに、綜一狼から光の羽が消えていく。

「楓。ここでジッとしてろよ」

その場に呆気に取られ座り込んでいる楓に向かって、綜一狼は温かな眼差しを向ける。

「綜ちゃんは？」

綜一狼を見上げて、楓は慌てて言葉をかける。

「決まっているだろ。あいつを、このままにしておけない」

その視線の先には聖の姿がある。

綜一狼と、相変わらず冷え切った聖の瞳が交わる。

「お前に、あんな特殊能力があったとはな。まったく。しぶとい奴らだ」

小さなため息を漏らす。

「お前だけは絶対に許さない」

その言葉と共に、綜一狼は聖に向き直る。

「許さない？ 笑わせる。お前に何が出来る」

「少なくとも、お前の命をとる事くらいは出来る」

聖の嘲りの言葉に答えて、綜一狼はその場で一度瞳を閉じる。

すると、綜一狼の背にまたも光の翼が現れる。

バツ。

「!？」

綜一狼が瞳を開けると同時に、光の翼の羽は広がる。

翼を一度はためかせ聖を睨んだその時、その場の風の流れが変わ

った。

正確には、聖の周りの風が変わったのだ。

風は一度大きく円を描き、上へと昇り聖へと一気に落ちる。普通では考えられないほどの風圧。

聖はその重みに耐え切れず、その場に膝を立てる。

風の暴走が収まったその後には、目を見開き、荒い息をする聖の姿があった。

額からは嫌な汗が滲んでいる。

「俺も特殊能力は一つじゃない。攻撃の仕方くらい心得ている」

顔色一つ変えることなく、綜一狼はその場にうずくまる様に座り込んでいる聖を見下す。

「なるほどな。それじゃあ、この攻撃はどうする？」

そう言っ聖は懐から、いくつかの刃を取り出す。

石を鋭く磨き上げたようなそれは小さいクナイに似ている。スピードが加われれば、十分の凶器になる。

シュツ。

それを聖は、綜一狼から外れた位置へと投げる。

「なっ」

綜一狼が小さく声を上げる。

それは綜一狼を標的にしたものではなかった。

離れた位置にいた、楓へと向けられていたのだ。

「きゃあっ」

楓は避けきることが出来ず、なす統べなく、その場で硬直した。

君への想い(3)

だが、それは楓に当たることはなかった。

「チッ」

聖は小さく舌打ちをする。

「卑怯にもほどがある。よりもよって、楓を狙うなんてよっ
「静ちゃん」

間一髪、楓を横に押しやったのは静揮だった。

「怪我はないか？」

「それより、静ちゃんの方こそっ」

先ほどまで気を失ってたというのに、こんな早業どうやってこなしたのだろう？

なにせ、静揮がいる位置から楓のところまでは、十メートル以上ある。

走ったとしても、今のタイミングじゃ、間に合わなかったはずだ。楓はただ目を瞬く。

「俺の存在をお忘れではありませんか？ お姫様」

隣りには、ちゃっかりと守屋の姿がある。

「あ……」

確か、守屋の特殊能力は瞬間移動だ。

「俺が南条のお坊ちゃんを飛ばしてやったんだよ。すけえんだぜ、こいつ。姫さんの悲鳴聞いた途端に、目を覚ましたと思ったら、『飛ばせっ』とか言っつてさ。ホントに、こいつは人間かって感じだ」「当たり前だ。楓が助けを求めてるっていうのに、悠長に寝ていられるか！」

「……最大のピンチの時に寝てたけどな」

ガンツ。

ボソリと呟いた守屋の頭を、静揮は殴りつける。

「もう大丈夫だからな。楓」

痛みで悶えている守屋を横目に、静揮は楓に微笑みかける。

「ありがとう。静ちゃん」

楓も笑みを向ける。

「そういうわけだ。綜一狼。楓は俺が守る。お前は心置きなくやれ」「ああ」

静揮の言葉に綜一狼が頷く。

「聖。戦っているのは俺のはずだが？」

綜一狼は聖へと向き直り、声を低くする。

楓への度重なる攻撃。

綜一狼の怒りはすでに抑えがたいものになっている。
怒りが綜一狼を突き動かす。

(どうしよう。このままで本当にいいの?)

楓は、綜一狼と聖の姿見ながら自問する。

このままでは、どちらかが倒れるまで戦うことになってしまう。

どちらが勝ったとしても、楓はちっとも嬉しくないし、それが何かの解決になるとも思えない。

もうここに空の涙はないのだ。

争う必要など何もないというのに。

一度落ち着くために、深呼吸をしてから、楓はスクリと立ち上がる。

「二人を止めなくちゃ」

「何言ってるんだよ。聖はお前を殺そうとした奴だぞ。大丈夫だ。綜

一狼なら絶対に勝つから」

今にも駆け出しそうな楓を、静揮は慌てて引き止める。

「そうじゃなくて……」

二人には戦ってほしくない。

それは、ルナも同じ思いのはずだ。

両手を強く握り締め、聖の姿を一心に見つめるその姿に、胸が痛くなる。

「やっぱり止めなきゃだめだ」

引き止める静揮の手を振り解く。

「無茶だ。楓」

「さっきので無理だっていうのは、十分分かったはずだろ？ これ以上、どうしようって言うんだよ」

静揮の困ったような声と、守屋の呆れたような言葉が楓の耳に届く。

「分からないけど……。こんなの絶対よくないよ」

そう言った直後だった。

バンツ。

聖の体が宙を舞い、フェンスに体を強く打ち付けられる姿が、目に映った。

最後の記憶の欠片（1）

綜一狼の集めた風が、聖を吹き飛ばしたのだ。

「くっ」

荒い息をしながら、聖は小さく呻く。

ガシャーんッ！

フェンスの一部が、衝撃により外れかかる。

だが、聖はそのままフェンスに体を預け立ち上がるうとする。ガタガタと不安定な音が広がる。

「どうやら、本当にお前の能力は薄れているようだな。力は強いが、長期戦には耐えられないようだな。まだやるのか？」

綜一狼は、聖に冷たい笑みを向ける。

楓にはその瞳が、初めて出会ったときの冷たい瞳と重なってみえた。

聖は小さく笑う。

「……お前にやられるくらいなら」

ガシャーんッ！

聖はフェンスを強く叩く。

脆くなっていたフェンスの止め具はあっけないほど簡単に取れて

しまつ。

止め具が取れば当然、フェンスは支えを失い屋上から落ちる。そして、そこに体を預けていた聖も一緒にバランスを崩し、落ちていく……はずだった。

「馬鹿なっ」

けれど、それを止めたのは楓だった。すでになくなったフェンスのおかげで、その場を隔てるものは何もない。

楓は必死に、体が宙に浮いた状態の聖の腕を掴み引き止める。

「聖っ。楓!」

呆然としていたルナも慌てて駆け寄り、聖のもう片方の腕を掴む。

「そこまで、奴が大切か？」

聖は笑う。

その笑みがひどく悲しげなのは、楓の気のせいではないはずだ。

(あれ? この感じどこかで……)

昔、どこかで、見たことがある。

まだ思い出していない大切なこと。

思い出さなければいけないもう一つのこと。

ドックン。

心臓が一際大きく跳ね上がる。

『楓、俺は……あいつが羨ましいのかもな。認められ求められているあいつが。馬鹿馬鹿しい話だ。あいつを捨てたのは俺のはずなのに。……お前を助けられるのは、あいつだけなのだな』

その瞳は、深い深い海のように冷たいのに、いつも何かに怯えているかのように、孤独で寂しかった。

(ああ。思い出した。そうだったんだ……)

「ごめんなさい。聖。私を助けてくれたのは、あなただったよね。『ヒジリ』じゃなくて、あなただった」

楓の力では支えるのが精一杯だ。

一言発するのもきつい。

けれど、どうしても言いたくて楓は口を開く。

「え？」

ルナが驚き目を見開く。

「……」

「あの時……、パパとママを殺した犯人は、私も殺そうとした。それを、あなたが助けてくれた」

散乱する血の色に呆然とし動けない楓の前に現れたのは聖だった。刃物を振りかざした犯人から、楓を守り、撃退してくれたのだ。

「今度は、私が助ける番だから」

けれど、聖を引き上げるには、楓の力では非力すぎる。

ルナと共に、その場に引き止めるのが精一杯だ。

それでも、あきらめたくない。

楓は、しびれて感覚がなくなるのを感じながらも、懸命に聖を掴む手に力を込めた。

最後の記憶の欠片（2）

もう一つの手が、楓の手に重なる。

「たくつ。楓のお人よしにも困ったもんだよ」

それを引き受けたのは静揮だった。

ひどく呆れた様子ながら、楓から聖を引き上げるのを引き継ぐ。

「それが楓のいいところだ」

そう言ったのは綜一狼だ。

ルナと共に聖の腕を取る。

「あ、あなたたち……」

ルナは驚いたように、綜一狼と静揮を見る。

「殺してはい終わり。じゃあ、あいつらと同じになっちまうよな」

その場でどうしようかと迷っていた守屋だったが、結局聖を助けるのに手を貸す。

四人の力で、聖は地上に引き戻された。

「ふざけるなつ。これで恩を売ったつもりか？」

そう言い、聖はグッと奥歯をかみ締め、楓を強く睨む。

「10年前に聖は私を助けてくれた。これでおあいこでしょっ？」

聖の瞳を受け、楓は臆することなく微笑む。

「馬鹿か？ あれは、空スカイティアの涙の在り処を知るのがお前だけだったからだ」

「それでも、助けてくれたことに変わりはないわ」

たとえ、聖の目的が空スカイティアの涙だったとしても、その後に、心を凍らした楓の前で吐露した言葉は、聖の本心だった。

そして、楓の壊れた心を取り戻すために、もう一人の自分である『ヒジリ』を覚醒させたのも聖。

「もう空スカイティアの涙はないよ。私は夜狼ナイトウルフのことを人に言いふらしたりするつもりはない。それに……『ヒジリ』は聖だって分かったから」

「お前は何を言っているんだ？ 俺を消して、あいつに会いたいのだろう？」

「会いたいよ。でも、あなたも『ヒジリ』でしょ？ あなた否定することは、私には出来ない」

『ヒジリ』が言っていた言葉を思い出す。

『敵対することになってしまったけれど、それでもやっぱり分かり合いたいんだ。奪い合うんじゃないくて分かち合いたい。簡単のようで難しいよね』

小さかったその時は、意味も分からなかったが、その言葉の意味を今なら理解できる。

それはきつと、もう一人の自分に当てた言葉だ。

そして、聖もまた同じ想いを胸に秘めていた。

どうして聖が自分に執着するのか。

楓は、それをようやく理解する。空の涙のことだけではない。

スカイティア

聖は楓を通し『ヒジリ』をみていたのだ。

『ヒジリ』の満ち足りた想いを感じとり、楓を手に入れることで、自分も得ようとしていた。

それはきつと無意識で、聖自身気が付いていない感情。

『愛情』を欲する想い。

「馬鹿な女だ」

聖は苛立ちを露に吐き捨てるように言う。

「んだとっ。助けてもらってその言い方はなん……」
「静かにしろ」

騒ぐ静揮を、綜一狼は静かな声で制す。

「言うておくが、俺はあいつにこの体を渡す気はない。これからも盗賊業は続けるし、いつか必ず空の涙スカイティアに代わるものも見つけ出す」
「それでも、あなたはあの人と共にあるわ。きつといつか、分かり合えると思う」

「いつか……お前をまた殺しにくるかもしれないぞ」

まったく動揺を示さない楓に、聖はそう言い放つ。

「そんなこと俺がさせない」

今まで黙っていた綜一狼が、聖を挑むように見てからそう言い放つ。

「もちろん。俺もだっ」

意気込んで静揮も答える。

「ククツ。今ここで俺を殺せばいいものを……本当に馬鹿な連中だ」

そう言つと、聖はゆっくりと立ち上がる。

その場の楓以外の人間が身構える。

「これが最後だ」

「え？」

聖は呟き楓を見る。

「楓」

名を呼び聖は微笑む。

優しい微笑み。

懐かしい微笑みだった。

最後の記憶の欠片（3）

「ヒジリ？」

「楓。また会えてよかった」

先ほどまでとは明らかに違う柔和な表情。

楓は言葉が見つからず、ただヒジリを見つめる。

「ごめんね。楓。君の声に答えてあげられなくて。でも僕はどうしても、楓のような人間だって居るってことを、彼自身に分かってほしかったんだ。」

聖の言葉に楓は大きく首を振る。

「ううん。謝らなきゃいけないのは私だよ。あなたのことをずっと忘れてたんだもの」

「いいんだよ。それでも君は思い出してくれた。だからいいんだ」

泣き出しそうな楓を見て、聖は優しく微笑む。

「ルナ。君にもつらい思いをさせたね」

その場で俯いていたルナに言葉を向ける。

「いいえっ。あなたにまた会えたから。それだけでいい……です」

ルナは言葉を詰まらせる。

「ありがとう」

「それで、これからどうするんだ。あんたは」

綜一狼はヒジリに問う。

「僕の意識はまた彼の下で眠る」

その問いに、穏やかな顔で微笑み答えた。

「そんな……」

楓は言葉を失う。

「元々の主人格は彼だから」

「え？」

「仕方がなかったんだ。一族を生かすためには、優しさは弱さになる。守るためには強くなければならない。半端な同情心や優しさは邪魔だった。だから、彼は僕を作り上げた。表には出さない弱い自分を」

その場にいる全員を穏やかな瞳で見回す。

「けれど、僕は現れてしまった。本当に偶然に。そして気まぐれから、外の世界に飛び出した。途中、怪我をして動けなくなってしまった僕を、楓と楓の両親は本当によくしてくれた。僕はそのとき初めてはつきりと思った。生きたいと。外の世界にずっと居たかった。自由になって、君の側にずっといられたらって思った」

ヒジリは楓を愛しそうに見つめる。

「ヒジリ……」

「でも、彼はそんなことを許すはずはなかった。当たり前だよ。僕じゃあ、一族を纏め上げられないし、僕自身戻る気なんてなかったし」

悲しそうに微笑む。

「だから僕は、一族を抜けた者たちに協力をした。聖の独裁的なやり方に反旗を翻した者たち。それが、綜一狼の母親で渉の兄弟たちだ」

聖の視線に、綜一狼と守屋は複雑な表情になる。

「彼らと結託して空の涙を盗み出し、僕自身と一族の解放を目論んだ。その結果、抜けた者たちのほとんどが抹殺され、僕自身、結局彼の中に封印されてしまった。そして十年後、こうしてまた楓に会えた」

「でも、また会えなくなっちゃうんでしょ？」

真実がどうであれ、楓の好きなヒジリが眠りに付いてしまうのは事実だ。

「いいや。君のおかげで、彼の中に違う考えが生まれたから。優しさは弱さじゃないってことが。楓を見て、優しさは強さになるんだって、そう知ったから。もしかしたら、また……」

「ヒジリ？」

「おしゃべりが過ぎる」

スッと一瞬のうちに、雰囲気ガラリと変わる。

「お願い。あの人を解放して」

ルナは懇願するように聖に言い放つ。

「勘違いするな。俺は俺の考えで行く。見逃すのは今回だけだ。夜^{ナイト}狼は裏切り者を許さない」

そう言うと、綜一狼と守屋、ルナ。それに楓にも視線を向ける。

「お前たちは、絶対に後悔することになる」

不遜にそう言い放つ。

「何度来ても同じだ。俺たちは、お前に屈しない。俺たちだって馬鹿じゃない。お前に対抗できるくらいの組織は作り上げている」

そんな聖を、真っ向から睨みながら、綜一狼は言い放つ。

「『嘉神』の力と、この学園の裏組織か」

聖は綜一狼を面白そうに見る。

「マジ!? 俺聞いてねーし」

「学園に裏とか作るなよ。生徒会を私物化しすぎだろ」

驚き叫ぶ守屋と呆れる静輝。

訳がわからない楓は、目を瞬き、隣りにいるルナを見るが、ルナは肩を竦めてみせただけだった。

「やはり野放しには出来ぬ存在だな」

「ああ。お互いに」

綜一狼と聖。

二人の視線が好戦的に交わる。

その顔はどこか、楽しげでもある。

「せいぜい、暫しの平和を堪能している」

そう言つと、聖はその場から姿を消した。

日の光の下で（1）

「……とりあえず、終わった……のか？」

静まり返ったその場で、静揮は詰めていた息を吐き出し咳く。

「とりあえず……な」

綜一狼がそれに答えるかのように言う。

「あーあ。これで目をつけられちゃったぜ」

続けて守屋が頭の上で手を組み、そんなぼやきを吐く。

「仕方がないだろ。いつまでも隠れている訳にはいかないんだ。いつかは、決着をつけるべき日が来る」

聖が消えた方角を見据えて、綜一狼は静かに言い放つ。

「これでよかったのかな？」

結局、『ヒジリ』は眠りについてしまった。

スカイテア空の涙がなくなっても、聖は盗賊をやめないと言った。

振り出しに戻っただけのような気もする。

むしろ、すっかり目をつけられた分、悪くなったような気もする。

「よかったんだよ。十分やることはやった」

落ち込み気味の楓に、綜一狼は優しく言う。

「楓のおかげで、ほんの少しの間だけど、あの人に会えたもの。感謝してるわ」

ルナも微笑みを浮かべる。

「そんな。私は何もしてないよ。でも、ルナとヒジリって、どういう関係なの？」

ルナがヒジリを慕っていることは分かった。

だが、その関係がいまいちわからない。

「ヒジリは、私のすべて。ヒジリがいるから、私は生きていられるの」

ルナは艶やかに微笑む。

「私、^{ナイトウルフ}夜狼なのに、特殊能力がないの。それって、すごく珍しくて、不名誉なことなのよ。仲間のほとんどから蔑まれて無視されて……。だけど、群れを抜ければ殺される。だから、小さい頃はただ息を潜めて生きてたの」

「あそこってそういうとこだよな。自分たちのプライドが無駄に高いから、下って見たらとことん見下す。陰険集団」

守屋は吐き捨てるように言う。

「でもね、ヒジリに出会ったの。彼は、そんな私を庇護してくれて、親にさえ見捨てられた私を側に置いて、生きる術を学ばせてくれた」「そっか。そうだったんだ」

敬愛はいつしか恋心が変わった。
ルナの恋は、きつと茨の道だ。
それでもいつか結ばれてほしい。
そう願わずにはいられない。

「本当に、楓には感謝してる。……今更だけど、騙していてごめん
なさい」

ルナは、楓に向かって深く頭を垂れる。

「そんなことしないでよ。私、ルナのこと大好きだよ。だから、こ
れからも友達でいてね」

「楓。私も大好き！ 私、暫くはここに留まるわ。どうやら、こ
こにいた方が、聖に会えるみたいだし。私、まだあきらめないから。
ネバーギブアップよねっ」

いつもの調子でにっこり微笑み、ルナはウィンクをしてみせる。

「うんっ。そうだね。まだ、あきらめるのは早いよね」

ほんの少しだけど、聖も分かってくれた。
時間はかかるかもしれないが、ここで諦めるのはまだ早い。
ルナの言葉で楓は元気を取り戻す。

「じゃあ、話が付いたところで、傷の手当てだな」
「そうだった。二人とも、早く手当てをしなきゃ」

綜一狼と静揮がボロボロだということを思い出す。

「違つたる。手当てをするのは楓。女の子の体に傷があるなんて大変だ」

「え？ 私は平気……」

「だめだ。ほら、行くぞ」

そう言つと、静揮と綜一狼は無言を言わず楓を引っ張っていく。

「兄馬鹿」

「過保護」

そんな静揮と綜一狼の様子を見て、守屋とルナは呆れたように言つたのだつた。

日の光の下で（2）

「で、今度は一体何事なの？」

保健室に現れた面々を見て、保険医は額を押さえ込む。

急病人が出たからと、朝早くに呼び出され、診察が終わったと思つたら今度は傷だらけの男女三人。ここは確か平和な学園の一角にあるはずだ。

どこぞのアマゾンの医療班のテントではない。

「とりあえず、楓の治療をお願いします」

「また、あなたなの？」

「はい。その、お世話になります」

明らかに呆れている様子の保険医に、楓はペコリと頭を下げる。

「倒れた片桐さんといい、一体何をやってたのかしら？」

ブツブツと文句を言いながら、楓の擦り傷をテキパキと消毒していく。

「あの、透子さんは大丈夫なんでしょうか？」

「平気よ。一時的に意識を失っただけみたいだし。今は奥で寝ているわ……はい。終わりっ」

ものの十分もしないうちに治療は終わる。

学園の保険医と言えども、日本屈指の名医と呼ばれていた人物。

口は悪いが、その適切な処置には定評がある。

「私、ちょっと見てくるね」

そう言うと、楓は奥の部屋に向かう。

治療室の奥は病室になっており、いくつかのベットが並んでいる。その中で、一番奥の窓際だけ、仕切りカーテンがピッタリとしまっている場所があった。

「失礼します」

小さな声で言い、楓は中に入り込む。

透子は上半身だけを起こし、窓の外を眺めていた。

「無事でよかったです」

透子が意識を取り戻したのを自分の目で見て、楓は安堵のため息を漏らす。

「……」

その言葉で、透子はやっと楓の方に向き直る。

その目にはもう狂気の色はなく、穏やかだった。

「私はあなたを殺そうとしたのよ？」

ぼんやりと楓を見つめ、透子は言葉を零す。

「それは違います。透子さんが悪いわけじゃなくて、その操られてただけっていうか」

何と説明していいのか分からず、楓はオタオタとする。

「いいえ。あれは私の意志だったわ」

透子はきつぱりと言いつつ。

「でも……」

「仮に背中を押した誰かがいたとしても、私はあなたを殺したいと思うほど憎んでいたんですもの」

静まり返ったその場で、透子の澄んだ声は、楓の耳にはっきりと届く。

透子の瞳は、楓の姿を捉えている。

「どうしてですか？」

震える声で問う。

楓にとって、透子は憧れの存在。

初めて見たとき、何て綺麗な人なんだろうと思った。話をして、もっと好きになった。

こんな女性になれたらと、いつも思っていた。

そんな相手の口から、殺したいと思うほど憎んでいたといわれるなど、思いもしなかった。

「あなたがそれを問うの？ あなたはそうやって、私がほしくてほしくて仕方がないものを、簡単に手に入れてしまうのね」

初めて透子から笑みが零れる。

自嘲気味なその笑みが、楓には痛い。

「……それでも、私は透子さんが好きです」

暫くの沈黙の後、楓は透子に言う。

その言葉に透子は目を見開き、キッと楓を睨む。

「ふざけないで！ 自分を殺そうとした女が好きですって？ いい子ぶるのも、いいかげんにしたらどうなの？ それとも、私を憐れんでいるのかしら？」

今まで見たこともないほど強い口調で、透子は怒りに任せて言葉を吐き出した。

「違いますっ。私はずっと、透子さんが憧れで目標にしてきたんです。嫌いだって言われても、そんなすぐには嫌いになれないです」

怒気を含んだ透子の言葉に負けじと、楓は意気込んで言い放つ。

「馬鹿馬鹿しいわ」

はき捨てるように言い、楓から目をそむける。

「あの時、落ちた私を放っておいてもよかったです。でも、透子さんは綜ちゃんに話してくれたじゃないですか。殺したいほど憎かったのなら、どうして知らせてくれたんですか？ それはきつと透子さんが……」

「出て行ってっ。あなたの正論はうんざりだわ」

目を背けたまま、言葉だけを楓に投げつける。

「もう逃げないことにしたんです。自分の気持ちに、正直に生きよ

うって。私は透子さんが好きです。だから、透子さんが私を嫌いでも、私は透子さんを嫌いにはなりません」

一度深くお辞儀をして、楓はその場を後にした。

「……だから私は、あなたが嫌いなのよ」

その場に残った透子は、唇をかみ締め言葉を吐き出した。

日の光の下で(3)

透子のところから戻ってみると、ちょうど静揮が手当てをしていたところだった。

「あれ？ 綜ちゃんは？」

辺りを見回すが、そこに綜一狼の姿は無い。

「そつえばいないわね」

ルナが首を傾げる。

「姫さん」

守屋が言葉をかける。

「ん？」

「綜一狼から伝言。空中庭園に来てくれってさ」

「あ、うん。分かったわ」

キョトンとしつつその言葉に頷くと、綜一狼の元へと向かった。

空中庭園に行くと、空の涙を隠していた桜の木に寄りかかって目を閉じて座る、綜一狼の姿が目に入る。

「綜ちゃん」

楓はそつと綜一狼に声をかける。

瞳を開け、楓の姿を見止めた綜一狼は優しく微笑み、楓に手招きをする。

それに応じて、楓は綜一狼の隣りに並び腰を降ろす。太陽の光を受けてキラキラと光る木々と、温かな風が優しい。

葉の間から見える空の青。

それは空の涙の色に似ている。

「最後の審判……」

「え？」

その場に身を任せていた楓は、綜一狼の漏らした呟きに我に返る。

「最後の審判を受ける気分だ」

首を傾げる楓に向かって、綜一狼は今度ははっきりと言葉を吐く。

「えつと？」

言葉は聞こえたものの、楓はその意味が分からず困惑する。

「楓は、俺のあの能力を見て、どう思った？」

「能力？」

七色に光る翼や風を操る力。

あの時の綜一狼の姿を、思い浮かべる。

ナイトウルフ
夜狼という一族の特殊能力。

はつきり言えば驚いた。

といつても、驚くことだらけで、最後の方はもう、馴れて何を見ても驚かなくなっていたが。

「それは驚いたけど……すごく綺麗だった。ていうのが感想、かな？」

楓はごく素直に考えを口に出す。

「綺麗？」

今度は綜一狼が首を傾げる番だ。

楓の予想外の言葉に、思わず聞き返してしまう。

「うん。あの時、綜ちゃんの姿を見て、本当の天使だってそう思ったのよ」

「気持ち悪いとか、そういうことは思わないのか？」

綜一狼は目を丸くして楓を見る。

「え？ 何で？」

七色の羽の天使。

本当にすごく綺麗だった。

あれを見て「気持ち悪い」などといえる人はいないだろう。

「……………」

楓の答えに綜一狼は立ち上がり、大木を見上げる。

「まいった。本当にまいったな」

「綜ちゃん？」

額を押さえ込む綜一狼。

言葉の意味が分からず、楓も立ち上がり、綜一狼の顔を覗き込む。

「能力がバレたら、楓に嫌われると思ったんだ。あんな普通じゃない能力。どう考えても不気味じゃないか」

楓を見て綜一狼は苦笑する。

「そんなことないよ。そりゃあ驚いたけど、不気味だなんて思わない。例え綜ちゃんが、不思議な能力を持っていても、ナイトウルフ夜狼でも私はその……」

いざとなると、『好き』という言葉が出てこない。

自分の気持ちを自覚した今、『好き』という言葉はものすごく特別な意味があるもので、前のようにすんなりとは出てこないのだ。

けれど言わなくちゃならない。

絶対に言つと決めたのだ。もう逃げないと。

「あのね、私は綜ちゃんのことを好きなの。多分、もうずっと前から」

楓は一息で言い切る。

言ってしまったのはいいが、まともに綜一狼を見ることが出来ず、そのまま俯いてしまう。

顔がほてり出しているのが自分でも分かる。

「……」

反応がない。

長い沈黙。

「あの？」

堪らなくなって、楓は恐る恐る綜一狼を見る。
綜一狼はジッと楓の姿を見つめていた。

日の光の下で(4)

「そ、綜ちゃん」

その視線にドギマギしてしまう。

「好きって……俺を男としてってことか？」

綜一狼の言葉に楓は頷く。

「静揮や聖よりもか？」

「そりゃあ、静ちゃんも聖も好きよ。だけど、綜ちゃんとは違う好きだから。うまく言えないけど……」

言葉が途中で途切れてしまう。

言葉を口の中でモゴモゴと転がす。

「楓、俺は……」

「い、以上！ 私の気持ちでしたっ。別に返事がほしいとかそういうのじゃないから。綜ちゃんには透子さんが出て、見込みがないことくらい分かってるし、私じゃあ綜ちゃんとは釣り合わないだろうし……」

口を開きかけた綜一狼を楓の言葉が遮る。

答えを聞くのが恐くて、言葉が次から次へとあふれ出す。

「しるわこし」

そんな楓を、綜一狼は唐突に強く抱きしめる。
驚いて楓は言葉を失くす。

最初は驚き身を硬くしていた楓だったが、徐々に体から力が抜けていく。

綜一狼の温もりを感じながら瞳を閉じる。

「泣きじゃくる楓に『うるさいっ』て、あの時もここで怒鳴ったよな」

徐に綜一狼は口を開く。

その場面を思い出したのか、綜一狼は楓を抱きしめたまま小さく笑う。

「うん。思い出したよ。でも、今と逆だったよね。私が綜ちゃんに抱きついてた」

突然泣き出してしまった綜一狼を慰めようと、自分なりにけっこう必死だった。

「あれは、母さんが死んですぐのことだった。俺の知らない間に話がかまとまって、嘉神家に引き取られて、けど母さんはきつと迎えにきてくれる。そう思ってた。なのに、もう死んでるんだって知って、一人ぼっちなんだって思ったら無性に寂しくて腹が立って、授業をサボってここに来たんだ」

「そうだったんだ」

冷たく見えたのは、孤独だったから。

拒絶していたのは、傷ついていたから。

「誰にも会いたくない。そう思ったのに、楓はここにいた。ニコニコ笑って幸せそうな顔をしてさ」

屈託なく微笑むその姿が無性に腹が立った。

八つ当たりだってことは分かっていた。

けれど、その幸せそうな笑みが気に食わなくて、目の前から消えてほしくて冷たくした。すべてが不幸になればいい。

投げやりに、綜一狼は本気でそう思った。

「なのに、楓は俺を抱きしめてくれた。それが温かくて優しくくて、俺は一人ぼっちじゃないんだって、そう思った」

見ず知らずの自分の悲しみを引き受けるという少女。

ただ一生懸命に、自分を元気付けようとがんばるその姿が、本当の天使に見えた。

「俺はあの瞬間から、楓のことがずっと好きだったんだ。もちろん今でも変わってない」

その言葉に、楓は綜一狼の顔を見上げる。

「でも綜ちゃんも透子さんが……」

「だから何度も言うが、それはお前の勘違いだ」

「だ、だって、キスだってしてたじゃない」

そう。生徒会室で、唇を合わせていた二人の姿を、楓ははつきりと見たのだ。

「あれは……悪かった。でも誤解するな。本当に特別な感情があっ

たからとか、そついうんじゃないから。ただ……」

言いかけた綜一狼は、そこで言葉を止めた。

日の光の下で(5)

「ただ？」

そんな綜一狼を真っ直ぐに見据えて、楓は綜一狼の答えを待つ。

「あえて拒まなかっただけだ」

ボソリと呟く綜一狼。

「……」

綜一狼の発言に、楓は軽蔑の眼差しを向ける。

「だから悪かったって！ もう二度としない。約束するっ」

まるで浮気のパレた亭主のように、あたふたとしながら、綜一狼は言い募る。

「本当に？」

「ああ。絶対だ」

楓の疑惑の瞳を受けて、綜一狼は大きく頷く。

「だから楓もだぞ。俺以外の奴にはするな」

「う、うん。これからは気を付ける」

まさかすでに、静揮と聖。

二人にキスをされてしまったとは言えない。

「これから？」

だが楓の歯切れの悪い台詞を、綜一狼は耳聡く聞き逃さなかった。

「あ……」

「まさか、お前にちよっかいをかけてきた奴がいるのか？」

ハツとした様子の楓に、綜一狼の目が光る。

「ち、違うのっ。あれは不可抗力。事故みたいなものだし……」

「不可抗力？ 事故!？」

見事なまでに墓穴を掘っていく楓。

「まったく。これだからお前からは目が離せないんだ」

綜一狼は楓を抱きしめる腕に力を込める。

もう二度と離さないというように。

「本当にいいのか？ 俺で」

「うん」

「もうお前を手放さないからな。お前が嫌だっっていうても、気持ちの歯止めはとつくになくなってんだ。」

「うん……」

「何があっても、俺はお前を守る。聖にも、他の誰にも楓は渡さない」

「綜ちゃんと一緒なら大丈夫だよ」

楓は綜一狼に、にっこりと微笑みかける。

温かな風が、二人の間をすり抜けていく。

綜一狼は楓を見つめ、そっと微笑む。

愛しさを込めた優しい瞳が、楓を捉えている。

「
……」

小さな沈黙がその場を支配する。

綜一狼の唇がゆっくりと楓の唇に触れる。

言葉よりも、たった一度の口付けが、二人の思いを形にする。

『永遠に離れない』

それが二人の誓い。

長い長い口付けが終わったその時だった。

「綜一狼！　そこで何をしてるんだっ」

その場に静揮が姿を現す。

ちよつど楓を抱きしめたままの綜一狼を見て、静揮は鬼の形相で

綜一狼に詰め寄る。

「し、静ちゃんっ」

楓は真っ赤になって、思わず綜一狼を押しつける。

「別にいいじゃないか。両思いなんだし」

慌てる楓を他所に、綜一狼はサラリと真面目な顔で言い放つ。

「て、てめえつ。言っておくがなっ！俺は楓と付き合っことは認めないっ」

「え！？」

静揮の爆弾発言に、楓は静揮を見る。

「兄として、こんないい加減な奴に妹はやれんっ」

「お前な、こんな時だけ兄貴面するなよ」

綜一狼は呆れたように言い放つ。

「今しなくていつするんだっ！」

静揮は即座に言い放つ。

「私も綜一狼に渡すのは惜しいと思うわ」

「ル、ルナまで……」

その場に参戦したルナが、楓に抱きつき言っつ。

「俺も納得出来んっ。綜一狼ばかりいい思いすんなんて」

と、守屋は綜一狼からかなり離れた位置から叫ぶ。

「そっいつ訳だから、よろしくな」

静揮はニツと意地の悪い笑みを浮かべる。

「そんなことで俺が納得するか」

そう言うと、綜一狼は楓の手を取り駆け出す。

「あ、待ちやがれっ」

「卑怯よっ」

その後を、慌てて追う面々。

「俺から離れるなよ」

「うんっ」

握られた手に、確かな温もりを感じながら、楓は綜一狼に微笑みを向けるのだった。

日の光の下で（5）（後書き）

最後まで読んでいただいておりますが、ありがとうございます！

これにて一部完結というところででしょうか？

第二部は、気分次第で（笑）

過去作品なので、読みづらい部分も多々あったかと思いますが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

本当に、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2804n/>

狼の夜～忘れられた約束～

2010年11月22日12時43分発行